

神其通之
管子の語

神解の號は思之思之神其通之といふ古語に因て、蘭崎の題する所にして即序あり。其の外國老の大夫を初め數醫の序あり、未だ印行せるを聞かず。有益の書と覺ゆるにいかなるにや。

甲斐 徳本

永田一本
長田チサダ
と訓す
藥籠一藥を
入る箱
大樹君一徳
川將軍家、
こゝは家光

徳本は永田氏、伊豆武藏の間を行きめぐり、藥籠を負ひて、甲斐の徳本一服十六錢と呼びて賣りあるく。江戸に在りける時、大樹君御病あり、典藥の諸醫手を盡せども、効驗なかりけるに、誰か申しけむ、徳本を召して療せしめ給ふに、不日にして平がせ給ふ。されば賞としていろくの物を下し賜はりけれども、敢て受けず、唯例の一貼十六文に限る藥料のみ申し下したりければ、其の清白を稱しあへり。されば、上にも知し召しけむ、何にまれ願ふ事あらば申すべき由頼に命ぜられしかば、「さらば我が友のうちに家なきを悲しぶ者あり。是に家を賜はらば、なほ吾に賜はるがごとくならむ」と申し程に、即甲斐國山梨郡の地に金を添へて賜はりぬ。やがて其の者を呼びて取らせ、其の身はまた藥を賣りて行方知らずなりぬ。彼の地は徳本屋敷とて今も残りりとぞ。此の老の

著述、梅華無盡藏と號す。近年刻に付けり、藥方古によらず頗奇なり。藥名も一家の隱名を用ふ。

雪 山

雪山は北村三立といひしかども、世に號をもて知らる。肥後の人にして、諸國に遊ぶ。文筆ありしかども、獨り書名高し。書法は漢僧雪機に學びたり。初赤貧にして、屋破れ雨漏るに、沐浴盤を高く釣り、其の下に座して書を學べり。あるとき肥前長崎の橋下に一夜寐て、あくるあした、あたりの酒家に入りて酒を飲む。あるじ其の價を乞ふに、「なし」といふ。其の家を問ふにも亦「なし」といへば、「さらば何する人ぞ」と問へば、「もの書く者なり」と答ふるに、主もすねたるものにて、「いで此の比の閑しきに、酒賣る日記書き付け給はれ。今の酒の代に充む」といひしかば、元よりさして志す所もなければ、目を重ねて止り、日毎に書きつ。さらに漢法の草書なれば、いかにも讀めざりしを、流石に能書なりとは知りけむ、其の人柄も無我なるを見て深く信じ、遂に長崎に住ましめけり。其の後隣國の太守、額字をもちしへ書きにやり給ふとて其の草案を書かしめらるるに、



道人大なる筆を持たざれば、軒にかけし簾の莖をとりて、打ひしぎて書けり。さて彼の國に渡したるに、彼方にもかばかりの手筆なしとてかへしければ、直に其の太守の額となりぬ。薩摩の國に到りし時、金五片賜はらむと乞ひつよ、これをもて蜆積みたる舟五六艘を買ひて、ことごとく海に放ち、「吾は今日仁を行へり」と悦びしとぞ。(蜆を放つは風狂の一事と人はいふべけれど、此の翁佛乘を學びて思ふ所あるか。蜀の法聚寺の僧一夕門人にいへらく、「門外に數萬人、烏帽を著て貧道に向ひて命を救はむことを乞ふ、早く出でて見よ」と。門人急に門を開けて見るに、十餘人蠶を擔ひて市に行くを見る。盡く是を買ひて放つと、蜀記に見えたるよし。また微細なるものは命多し、殺すべからずと、龍舒居士も説けるよし、六如僧都の放生功德集に出し給へるにかなへり。私に思ふに、官なき者は廣く仁を行ふ事はかなふべからねば、大小をいはす、物の憂を救ふは、身に應じたる仁なるべし。此の人、生涯印章を持たず、書きたる者に印を施したるなしとなむ。廣澤はこれが門人なり。

貧道一僧の
自稱

廣澤一細井
廣澤徳川時
代の唐様の
書家の祖

加賀圓通

圓通—觀世音菩薩の尊稱、圓通大士

師は黃檗獨漉禪師の法嗣なり。觀音菩薩を信ずる事人に過ぐ。かよれば即圓通を稱とせるにや。極めて無我の道人なり。ある録の跋を乞はれて自書す。艸書の意にまかせたるものにて、讀めぬ所々多ければ、人携へ來て問ふに、やがて打返しく見て、「吾も亦讀み得ず。吾が筆は、弟子の某が能く讀むなり。それに讀ますべし」と云ふ。ある時、京にして訪ふべき家も名も忘れて、其のあたりに行きて、「加賀の圓通が行くべき家はこゝにや、こゝにや」と尋ねあるかれしも、をかしかりしとぞ。

龜田窮樂

くせもの—畸人の莫逆も交し意氣投合したる友
雙丘—山城國愛宕郡

龜田曳尾は書をもて鳴り、窮樂の號をもて知らる。ものをものとも思はぬくせものなりし。賣茶翁とひとつ小路に住みし時、莫逆のまじはりを結びて、彼は茶を飲み、是は酒を飲む。時ありては酒飲まぬ賣茶翁、壺提けて酒買ひに行ける日もありけるとぞ。後賣茶翁雙の丘の東畔に轉居し、梅雨連月に及び、茶を買ふ客なし。錢筒傾盡して糧絶えし

味芳梅寸

春むつ

米の毒

くまもも

貧乏海

ちよこ



窮樂道人自畫

波臣一鮒

時、窮樂是を聞きて至りとぶらひて賑はよしむ。時に翁謝せる偈、偈語に見ゆ。

無茶無飯竹筒空。

恰似波臣車轍窮。

多謝特來親賑濟。

簞瓢充得養衰躬。

或時大なる酒樽をすゑて、其のわたりの男女の貧しきものをつどへて、酒飲ます。そこへ往きたる人見て、「何事ぞ」といへば、「屏風書きてやりつる報いに人得させれば、飲する也」といふ。えも知れぬ歌ども諷ひて興に入る。はてに樽の下にしかれて紙にするたる金十方を見つけて、「よき肴こそありけれ」とて、配りてみなとらせ盡しぬ。萬の態唯かよりしとぞ。其の知己なりし近江の佃房が持たるを見れば、窮樂好の者と題して、

烟草、相撲、競馬、錢、酒は予が糧なれば計へず。

又嫌ひのものもありしが、その一つには、理窟、餘は今忘れたり。此の佃房年々草といふ年毎の歳旦集に、いつも此の道人の兩節あり。其の中にて記得たるは、

正月は只幾年もおもしろし

うかくと我が宿へ来る春いとし

其の淡しくをさなき氣象を見るに足れば記す。

山村通庵 松本駄堂

死靈—死人の怨念

法橋通庵、名は重高、伊勢國松坂の人、北島の庶流なれども、其の先同國山村に住せしよりこれを氏とす。爲人無我にして正直、禪に參じ、又茶、香、瓶花のごとき風流の技藝に通ず。醫は後藤左一に學びて、自から右一と名乗る。薙髪の後、通庵といへり。其の言に曰く、「師は灸治に心を盡せり。我は温泉の効を試みむため、諸國に遊び、氣味功能を熟驗す、但馬城の崎、上野草津は、其の徳ひとしく、天下に類なし。然るに路程遙にして、或は到り難きものあり。是が爲に變方を制す」と。即、印施の方あり、後に記す。老いても志氣衰へずさわやかなる人なりしが、同郷殿村氏なる人の家婦、死靈のために悩まされて、病む事数年の間（此の靈の事甚奇話なり。瓶原貞福寺洞泉律師彼の國に下向の時、加持力にて靈事状を説きて去れるまでの事實、その弟子惠隆の記に委し。是はその時侍座せる人にて、予相識の僧也）醫至れば罵り狂ひて敢て近づけず。唯翁至る時其の鬮を越ゆれば、病人室中ながら知りて、大に懼れ、診脈按腹をもうけたるなど、其の機鋒を見るに足り、又直にして不拘なる事は、京師に在りける日、平家を語る事を學



未刻—今の午後二時

びしに、同門の人死にたれば、その家に弔し、突然として牌前に至り、平話の哀なる所を心のくばかり語りて、直ちに去る。始終家人に一言を交へず「死者を悲しめども、家人には一面の識なければ」といへり。寛延末年七月二十日八十歳にして家に終る。午時自脈を按じて曰く、「命終今一時なるべし」と。果して未刻に逝す。辭世に頌あり。

本來宗風。無端建通。眼光落地。自性真空。

但馬城崎 上野草津 溫泉變方

助氣溫體。破瘀血。通壅滯。開腠理。利關節。宣暢皮膚肌肉。經絡筋骨。癢疔。癩癩。痺痿。痺痺。脚痺。學急諸痛。消腫。治痔。微瘡。下疳。便毒。結毒。登漏。疥。癬。諸惡瘡。撲損。閃。肭。婦人腰冷。帶下。大凡痼疾。怪癩。洗浴多効。

潮水五斗 開水なき國々にては、常の水は、米皮糠壹斗
 鷓目硫黃 鷓目 六百目 細末にして布の袋に入れ、糠を煎じたる湯の中へふり出す。

右湖水四五斗の内を貳斗分け、米皮糠一斗を入れ、糠の赤くなるまで煎じ、其の湯を飯簀にて桶へ漉し、据風呂へ入る。一日に三度づつ浴す。風呂の湯熱き時は潮水

さし入るよなり。冬三月は十二三日、他月は六七八日も變らず、六七の暑月は、四五日過ぎて上水を取捨て、新なる潮　米皮糠硫黄も初の半ほど入るべし。諸病にさはりなし。

右印施の儘を寫す。翁歿後四十年に向とし、今は世に残らねば、因に記して世を惠むの志を嗣ぐのみ。翁はおのれがゆかりなればなり。(私云、浴湯は遇不遇、その稟賦病症をはかるべし。凡實症にはよろしくして、虚症にはよろしからず)

○松本駄堂は同郷の人、外科を業とす。通庵と友とし善し。參禪と豪放の氣象も相似たればなり。其の室中に通庵ごとき友人の像を圖して、常に相對する思ひをなすといへり。觀音を信じ、自稱して此觀音といひ、後には又此阿彌陀といふ。其の髭手三束に及ぶも、「一旦石山に祈りて此の如し」と語られしとなり。尤風水によし。水なき家は此の人を請じてトを乞ふに　自から其の場を歩み試み、杖をたてよ「ことを掘るべし」といふ。指揮のまよに穿てば、必清泉を得ぬ。また老いても健なる人にて、熊野に至り、人參の出づる事を考へ、官にまうして堀らしむ。熊野直根は此の人に初まるとなむ。尙傳ふる話多き人なれども、今具には記得せず。從來人知れる悟心和尙は此の人の子なり。(悟心は

稟賦一生れつき

子昂一元の趙孟頫、書畫に名あり

八十華嚴大方廣佛華嚴經八十卷

印章を刻するに名あり、詩を好み、書は子昂を學ぶ。洛東岡崎に住庵せられし時は、同宗の僧終南とともに、風流の一雙と稱す。予も親しかりしが、後に伊勢に歸り、中間村淨光庵といへるを創し、そこにて終られき)

美濃隱僧

美濃國某山中(地名失)に、四十六年幽居不出の僧あり、靈巖和尚といふ。淨土宗にて、京師知恩院丈室に侍りしが、此の山中は其の郷里に遠からぬ所なれば、歸りて後不出の願をたてて引籠れり。はじめは何とやらむ世間の戀しきやうに覺えて、或時は堪へかね、松の枝にのほりて望み見るに、異なることもなし。されども猶心動きて、かよること折々なりしに、一とせばかり住み馴るよほどに、其の念永く絶えぬと語られしとなむ。常に八十華嚴を見る。終りてはまたはじめ、間斷なく馴れぬる故にや、二日に一過し終る。日に四十卷なり。夜も座ながらにいぬるともなく、微音に念佛の聲す。巖宗の僧雪丘といへるが、如何なるしるべか有りけむ、其の庵に到り、此の和尚の肉姪の僧共に隨侍せる事一年、其の間言を交ふる日少し。二時の食をとよのへ進むる外に、又あつかふ

禪林—禪宗の寺

事もなく、来る客もなし。おのれくが心に任せて、誦經、看書、念佛、座禪、障る事なく靜に有りしが、或日和尙命じて、即日舊里の甥を呼び來らしむ。其の間二里ばかりなれども、とみの事とありしかば、とく來りしに、和尙曰く、「他の事にあらず、老僧明日は逝すべし。永き訣を告げむため、且年比資料の爲に預り置ける金、此の數は某の寺へ祠堂に充つべし。それくは此の兩僧に與へよ。一金といふとも、俗家に留むべからず。法財なればなり」と。甥大におどろき、「今日微しの恙も見え給はず。如何に斯はのたまふか。されども、もしさもおはさば、妻子もまうでて御別を惜み奉らむ」といふ。和尙首をふりて、「人入りたちさうくしからむは益なし。汝も亦とどまるべからず、此の外また云ふべき事なし」とて、しひて歸らしむ。さて沐浴し、頭を剃りて曰く、「此のまに棺に納めよ、死體を兎角扱ふこと勿れ」と、其の日常のごとし。明日に至りても、朝粥、齋飯等を喫し終りて、午時ばかり、端坐口稱眠るが如く化す。齡七十二三ばかりとぞ。其の雪丘は近江八幡正宗寺といふ壁門の禪林に、一夏勤めける僧にて、美濃に隨侍の後、又來りて、其の寺の虎溪和尙へ物語りし趣なり。今を去る事凡四十年前となれば、寛延の比なるべし。

白幽子

脱洒せず—俗を脱せず—精彩を著け—悟をひらき

白隱禪師初め既に一隻眼を具すといへども、全く脱洒せず、自からおもへらく、急に精彩を著け、一回捨命し去らむと、猛く工夫を凝す事一月、寢食を廢するに至る。終に心火逆上して、肺金焦れ、耳は溪水のあたりを行くがごとく、脚は氷雪を踏むがごとし。肝膽弱りて物に怖れ、夢にもうつよにも、あらぬもの眼にうかみ、汗生じ、涙絶えず。驚きて醫療を盡すといへども、すべて驗なし。或人いはく、「洛東白川の山中に巖居せる人有り、白幽子と名づく。壽は二百歳にも過ぎたらむや知らず。是をのぞむに愚なるがごとし。山深く住みて人にまみゆる事を好まず。行く時は走りて必避く。里人専ら稱して仙人とす。もと石川丈山の師にして、精しく天文に達し、深く醫道に通ず。若し禮を盡して問ふ者あれば、希に言を出し示す所あり。退いて考れば大に利有り」と。こよに於て、寶永七年庚寅正月、美濃の國より立ちてかしこに趣く。山深く入る事二里ばかり、樵夫に路を尋ね、雲を分け岩を傳ひ、辛くして至りつと見れば、洞口に蘆の簾を掛けたり。透間よりうかがへば、目を閉ぢ端座す。蒼髮は垂れて膝に至り、朱顔うるはしくして棗の

老子—周の老聃の作、虚無を説く金剛經—金剛般若波羅密
扁蒼—扁鵲と蒼公、支那上古の名醫
地雷復—復は周易の卦の名、次の泰も卦の名
山地剝—剝も周易の卦の名
臍輪丹田—臍の下一寸許の處、體氣常に此處

如し。太布の衣を掛け、軟かなる草の席を敷き、机上に中庸、老子、金剛經を置くのみにして、飲食の器、夜の衾も見えず。凡風致清絶人間にあらず。魂怖れ、肌戦き、謹しみて病の由を告げ救ひを乞ふ。初知る所なきを以て辭すといへども、請ふ事休ざるに及びて遂に手を捉りて九候を察し、五内を窺ひて後、額を擽めて曰く「已哉。理を觀る事度に過ぎ、終に此の重症を爲す。針灸藥の三物をもて救はむとせば、扁倉といふとも能く爲すべからず。公今内觀の爲に害せらる。つとめて内觀の功を積まずば、終に起つ事能はじ。是地によりて倒るゝものは、地によりて起つ謂なり」と。遂に醫經を引き道書を擧げ、示す事丁寧復す。其の要、「五陰居上。一陽占下。是を地雷復といふ、冬至の候なり。眞人の息は踵を以てするの謂、三陽下に位し三陰上に居す。是を地天泰といふ、孟正の候なり。天得之。則萬物發生の氣を含み、百草春化の澤を受く。至人元氣を下に充たしむるの象、人は是を得れば營衛充塞、氣力勇壯なり。反之則五陰居下。一陽上に止る。是を山地剝といふ。九月の候にして、天人ともに枯槁搖落の象なり。かよれば眞氣を臍輪丹田に藏し、歳月を重ねて守一無適なれば、長生久視の神仙なるべし。浩然の氣を養ふといふも亦是なり」と。こよにして禪師「姑く禪觀を抛下し、努力で治を期せむ」といふ。子



に凝聚すれば、健康保持すべく勇氣持すべしと云ふ。浩然の氣云々道義に毫も疚しからざる剛健の徳。觀—細心の分別。阿舍—増一阿舍、長阿舍、中阿舍、雜阿舍等あり。四大—地、水、火、風

微笑して曰く、「禪觀又他にあらず。大凡觀は無觀をもて正觀とす、多觀は邪觀とす。向に公多觀をもて病を得たり。今救ふに無觀をもてすべし」と。終に佛說祖語をもて清淨觀の眞正を示す。其の中に阿舍の用酥の法、心の勞疲を救ふ事妙なりといふ一條師其の目を請ひ問ふに及びて、乃ち曰く、「行者定中、四大調和せざるを覺えば心を起して此の想を作すべし。たとへば、色香清淨の軟酥。如鴨卵大頂上にあり。(私云、酥は牛羊の乳を以て造り油に和す、諸瘡を治すといふ。凡膏藥のごとし)其の味微妙而瀰く頭を潤し、やうく下に及び、肩臂兩乳胸膈肺肝腸胃脊梁髀骨次第に注ぎ將去る。この時胃中の五積六聚疝癥塊痛隨心降下し、水の下に就くがごとく、歴々として聲あり、遍身に流れ雙脚より足心に至りて即ち止む。行者再び此の想を作すべし。彼の浸々として潤下る所の餘流積み湛へて、世間の良醫の種々妙香の藥物をもて煎湯として浴盤の中に盛り、我が臍輪より以下を漬蘸がごとしと。此の觀を爲すとき、唯心の所現の故に、鼻に希有の香氣を聞き、身根妙好の軟觸を請け、身心調適す。此の時積聚消融腸胃調和し、肌膚光澤を生じ、大に氣力を増す。怠らずんば何の病か治せざらむ、何れの仙か成らざらむ、何の徳か積まさらむ、何の道か充たざらむ。其の効の遲速は、行ふ人

大疑團—大なる多年の疑問。徹底透得し—善く悟り傳大士—齊郡烏傷縣の雙林寺に居す。維摩—維摩羅詰の略。語、淨名居士也、釋迦と同時大悟の居士。白幽子—白幽子は實在の人なる由續編に閑田子の正誤あり、參看

の勤むると怠るとにあるのみ。我昔多病公に十倍す。されども終に是をもて一月ならずして宿病大半銷除す。今此の山中にありて寒をおそれず、飢を知らざるも皆此の觀力なり」と。禪師示しを聽受して辭し去る。後三年を経て、従前の病患自然に治す。たゞ病去るのみにあらず、大疑團徹底透得し大觀喜を得るもの兩三回、省覺怡悅數次。もと二三の襪を着て、足心常に氷の如くなりしに、老の後襪せず、爐によらざるも病む事なきもの、彼の方術の餘勳乎と。禪師著す所の夜船閑話、及闡提記聞等に見えたり。私云ふ。白幽子の始末此の外に聞く所なし。机上の書籍、儒釋道を兼ねたるは傳大士に似て、しかも維摩の黙に遊ぶ。英雄人を欺くにて、若し其の意を著はさむ爲に、假に此の人をまうけ、白川の幽人をもて名とせるも亦知るべからねども、年月などさだかに記されたれば、こゝに録す。示す所の法は實に人に益あるべし。故に要をとりて猶繁きを厭はず。禪師爲人の志を嗣ぐのみ。

近世畸人傳終

續近世畸人傳序

續比年西遊未卜一枝巢居暫寓閑田廬主人適侵余之倦睡曲肱几上出續畸人傳者見眎余曰續也西遊幾歷十有餘國探山川之奇絕未見其奇尋諸藩之畸人未遇其畸然履跡所及往々靡不語翁之畸人傳者今又修此續篇何其盛也主人笑曰足下見奇強不之奇遇畸人不之畸海內之廣山川之奇不可勝舉方今文明之盛託物遯世之人豈其鮮少哉如余固非好奇以其不好反知近古之多畸人所謂傍觀者明于當局之類是耶足下索奇於千里之外故見奇絕不爲奇遇畸人不爲畸所謂觀海者不可語水之類是耶可謂亦是一畸人也請以此語冒此卷首何如續諾之且曰余也空勞步於海外有眼不見奇絕無識不遇畸人不及翁之坐耕筆于閑田廬也遠矣幸以斯語贖之不亦可乎

寛政丁巳初夏

石見 浦 世 續 撰

續近世畸人傳 目次

卷之一

花 顛 子 序
 六如上人櫻花帖 序
 石 川 丈 山
 僧 元 政
 山 口 庄 右 衛 門
 以 登 女
 馬 郎 孫 兵 衛
 卷之二
 里 村 紹 巴
 岡 野 左 内

閑 田 子 題 言
 花顛子櫻畫同人小傳
 佐 川 田 喜 六
 佛 佐 吉
 若狹與左衛門子兄弟
 高 戶 善 七
 本 阿 彌 光 悅
 子 松 源 八

細井廣澤	粟田口善輔	古谷久語	氏家文伯	端野瓢水	瀧野瓢水	百井塘雨	加々見櫻塙	下村道瑞	三宅石庵	三輪執齋	能順	杉山檢校	原田長兵衛
------	-------	------	------	------	------	------	-------	------	------	------	----	------	-------

橫井也右	園木覺郎	僧幻阿	高森正因	其甥庵杜口	一祚梨一	奧田三角	桑原爲溪	松岡恕庵	村上等詮	角倉了以	龍造寺平馬
------	------	-----	------	-------	------	------	------	------	------	------	-------

卷之三

霞谷山人	叡山源七	幾多女	川谷貞六	僧學信	廣瀬才二	傾城吉野並	松任千代女	三國歌川女	僧記	雨森芳洲	堀部金丸女	近江長女	津和野濟六
------	------	-----	------	-----	------	-------	-------	-------	----	------	-------	------	-------

卷之四

霞谷山人	僧僧	僧僧	尼僧	僧空蓮	僧立砂	藤堂由庵	榎林	栢原捨女	僧記	山附僧公慶	僧月舟	小萬女	浪花鶴女	日雁八兵衛	佐々木志津摩女
------	----	----	----	-----	-----	------	----	------	----	-------	-----	-----	------	-------	---------

雇人 要助 卷之五

室 附 町 脱金拾金二人 婦並 本頭

英 一 蝶

熊 斐

望 玉 蟾

高 田 敬 輔

大 橋 東 堤

僧 惠 南

永 田 觀 鷺

宇 野 禮 泉 附 門人望月氏

宮 津 某

芥 川 貞 佐

建 凌 岱

津 田 一 清

岸 立 知

下 長 嘯 子

附 錄

前編漏脱並異聞五條

第二冊 遊女某尼

第三冊 長崎餓人

第四冊 北村祐庵

第五冊 北山友松子

卷尾 白 幽 子

往年伴のうし前編を録せられし時、我はとし老いたり、後を期すべからずと、拾遺を予に任せられしが、予此の六とせばかり、病みて己に死なむとすることみたび、辛うじて命をつなぎ、但馬の温泉に浴して病を養ふの間、つれづれなるまゝに、是かれ聞きあつめしことどもを思ひ出でて筆にまかす。猶とし月をつみて正さば正すべけれど、若しとてたのまれぬ命にあれば、唯大かたにしるして、うしの校讎を需むることにぞ。

寛政五年癸丑冬湯島訥齋の僑居にして記しぬ。

花顛居士 三 熊 思 孝

題言

蒿蹊曰く、花顛子此の草稿を録し、春待ちて後京に歸りても猶考ふるよしにてありしが、事しけきにまぎれて、月比たいめせである間に、使もてしきりにまねかれしかば、八月十三日訪らひしに、おのれ今はたのみなくおほゆ、此の草稿はあらかじめ足下に校讎をこはむとおもひしからに、ひとへに委ねまるらす、いかにも心のまに／＼、正し給へ、唯畫のことは、おのれがむねとする所なれば、たとひ他人の手をかるとも、其の圖様を見ずしてこれにくはへむことはほりせずと聞えられしに、おのれ今は六十を過ぎて、一夜の間ものどかにたのみぬべき齡にはあらねど、もし幸にながらへば事を遂げなむ、さて畫のことは前編既にあり、こたびもなくてはさう／＼しく、書肆もうけがふべからずやと語らひしかば、けにそれも理なり、さらばかく書かしめ給へといへり。是はおもふに、此の人の畫時代によりて人物の服裝器財の考あれば、他人其の意を得ざらむことをいたむなるべしかくて、明くる十四日より病革すむかに言滞り、終に二十六日に身まかれしもいとあはれに、此のことをおのれにかたらはむとて、しばしながらへけるにやとまでおほ

えき。

○花顛草稿には、惺窩闇齋等の諸先生、宗祇、貞徳、芭蕉ごとき諸老、澤庵、盤桂禪師の類ひあれども、こは其の門流廣く、其の傳おほつかなからず。又たとへば、澤庵禪師を納むべくば、一絲禪師を洩すべからず、しかも先に皆成書あるものから、今は此の類を略ぼく。またあるひは、大原古知谷の彈誓上人、澄禪和尚のごときは、畢竟化人といふべく、奇の又奇なる行狀なれども、既に傳記あまねく世に行はれたれば納めず。あるひは又名高き紹巴法橋のごときも、連歌にのみ聞えて奇行のしられぬは、花顛が出せるに潤色して擧ぐるも有り。此の外およそ加ふるも省くも心を用ふる所あり。もとより前編にいへるごとく、畸に一定なし。たとへば他の欺を受けざるを操とする武人の奇もをかしく、欺を容れて咎めざる文人の奇もをかしかれば、唯其の奇のまゝに録す。奇は奇にして、其の所行の善惡是非は、事狀の上に明らかかなれば、評論を必とせず。

○あまりに人數の多きも煩はしく、又似たることの重れるも珍らしけなからむなど諫る人もあれば、既に印行せる書に出でたるは、撰みておほよそこれを除く。

總べて一篇のうへ難なきは、彼の人草案のまよにうつし、章段おほつかなかく、言路たとくしきは、唯意をとりて文を改むるなど、托せるまよに愚意を用ふ。
○刪補大やう終れるころ、書林はたして畫のことに及ぶ。されども遺意かくのごとくなれば、其の軽くといへるはいかどすべからむとかたらへるに、一書肆はかりて、彼の妹氏露香女の畫あらば、故人もよも恨み給はじやといへるを、ことわりに覺えて、傳中畫くべきものすこしをとりて、圖やうなど、彼の志に背くまじうものせられよと語らひぬ。又櫻は故人一生のちからを盡しけるものなれば、其の自畫をもてはしに掲げ、はた六如上人の櫻花帖の序を録す。小傳を附するもまたこれが因みなり。

櫻花帖題

梅竹蘭菊傳照逼真。擅名當時固不乏人。櫻花乃我邦之奇種。最所宜殫精究巧。而振古未聞其人。穠豔者過肥。疎鬆者太瘦。忍使國色死于拙工手。不亦冤乎。富麗中一段氣韻。爭豪髮於瓊施之間者。舍三熊生而將安求焉。余曾題其幅曰。櫻花已來凡馬空。具眼以爲信然。嗚呼。千古年來。天機之妙。獨慳此花者。一旦而迸出。生之貧且病。豈或觸造物之怒與。少陵所云。但看古來盛名下。終日坎壈纏其身。吁亦異哉。雖然齊侯千驕身後灰滅。此雖小技。名足千秋。我已保之今日。三熊生亦可以少慰矣。

寬政癸丑夏五

淡海 六如散納題



三熊花顛傳

介堂三熊氏名は思孝、はじめ正親せいかと通稱す。號は花顛子、城西鳴瀧の産、幼きより畫を好み、肥前長崎の畫人月湖に従ひて漢法を學ぶ。後自からおもへらく、凡鱗鳳および龍虎獅象のごとき見もしらぬものを、忍がくは、唯一旦の眼をよるこぼしむるのみにて世に益なし、古き代の公事民間の有さまをうつして傳ふるや、あるひは今の世の人物調度眼にふるゝ物を圖して、後にしめすなどこそよからめと、是をつとむ。つひにまた思惟すらく、櫻は皇國の尤物にして異國にはなし、是を忍がくは國民の操ならむ、はた枕の草紙に、繪に書き劣りするものにさくらをのせたるは、むかしよりよく忍がく人なかりけるにこそ、いでこれをつとむべしと、研究して生花を摸したるが、知る人は、從來いまだかゝるものを見ずといへり。爲人世にすねたるやうにて貧をうれへず、生産をこととせず。書畫器財にいたるまで、古物を好み、自からの書も亦上代様によりてよくす。生涯すべて奇に終る。其の奇のとぢめは、遺言していはく、

たのむぞよ、柝骨にして、櫻の木

此のこゝろは、其の體を茶毘し、骨を川に流し、なき跡のしるしには、さくらの木を植ゑよといへることとぞ。此の柝骨といへるは、さだめて佛家に説あることならむと、諸學匠にとへども知る人なし。此の人は聞き認めたることありしなるべし。さて知己の人、遺言のごとく、東山にて火葬せし骨を、ただちに携へて嵯峨に行き、戸南勢ミナナセの前の流に沉めぬ。こゝはさくらのいとおもしろき所なれば、同じ河の中にもよかめりと戯れしによれり。又日野の外山に、平生用ひたる禿筆及び其の書畫の反故をうづみて一樹の櫻を栽ゑ、一片の石碣を建て、六如僧都の銘を録す。こゝは醍醐山素川法師の領せる地をあたへ、その肉弟山縣蕪亭生ともにはかりて、逝者の志を遂けしめ、妹女露香のねがひをはたせるなり。

續近世畸人傳

卷之一

石川丈山

丈山名は重之しげゆき、(後凹あふと改め、凹凸窩あふこくわ、頑仙子ごんせんし、大拙など、其の詩其の書に記せらるるものあり) 參河國碧海郡泉郷いづみのがう郷に生れて、若き時は嘉右衛門と稱し、後左兵衛と改む。世々濱松麾下はなまつか、家康の旗下けいこうの旗下の士、浪華合戦なみはあひざり、元和元年五月大阪夏陣わだつばなの時、御麾下ごみかに従ひ奉り、天王寺口にありけるが、人並々の軍せむも見所あらじと將帥しやうしゆの命をまたず、夜をこめて只一騎營中を忍びいでて敵城に攻めかより、櫻の門といふ所にて佐々十左衛門と渡り合ひて、佐々が首をとる。其の郎等其の場をさらず切りかよりしをも、又鎗の下に伏せて、大手を走り過ぎ、打取りし首を實檢じつけんに備へしに、其の武勇は深

濱松麾下
家康の旗下
の士
浪華合戦
元和元年五
月大阪夏陣

此國松木以爲其子貴
 其子人其子人其子人
 其子人其子人其子人
 其子人其子人其子人



此國松木以爲其子貴
 其子人其子人其子人
 其子人其子人其子人
 其子人其子人其子人

依怙の御沙汰一方にひいきする御處置唐宋諸名家云々左方は蘇武、謝靈運、杜審言、李白、王維、高適、儲光義、韋應物、韓愈、劉禹錫、李賀、杜牧、寒山、林甫、梅堯臣、歐陽修、黃庭堅、陳與義の十八人、右方は、陶潛、鮑照、陳子昂、杜甫、孟浩然、岑參、王昌

く感じ思召しけれども、軍令に背きたる罪其のまゝに見許しがたく、殊にかねて寵臣のことなれば、依怙の御沙汰も穩ならずとて、惜ませ給ひながら、勘當し給ふ。さてぞ武門を離れて、日枝の山のふもと、一條寺むらに世を避け詩仙堂を創し、自から六々山人と號し、山水花月に情を慰む。詩仙堂とは、唐宋諸名家三十六人の詩を一首づつ自書し、像は探幽法印に畫せしめて梁上に掲けたれば也。本朝の歌仙に准らふるなるべし。こゝに隠れて後は京へ出づる事をせず。後水尾帝其の風流を聞き召して召されしかど、固く辭し奉りて、

渡らじな世見の小川の淺くとも老の波たつ影は恥かし

と申し上げければ、憐み思し召し、「心に任せよ」と勅ありしが、殊に此の歌の「波たつ」を「波そふ」と雌黄を下し給ひしも忝し。初惺窩先生に道を學び、羅山子杏庵玄同の輩と交り、詩をよくす。平生咏する所の詩若干首集めて覆醬集と號く。又北山紀聞あり、是も翁の詩又詩話を記す。ことに隸書にたくみ也。世人稱して本邦中古以來隸書のはじめとす。寛文二十二年壬子夏五月廿三日享年九十歳にして歿す。翁爲人剛直にして勇あり。其の穎敏なるも亦人に過絶す。二歳の時のことをよくおほえ、四歳にして成人の如く歩

齡、劉長卿、柳宗元、白居易、盧仝、李商隱、靈徹、邵雍、蘇舜欽、蘇軾、陳師道、魯幾の十八人、雌黃詩文を添削する事覆醬集三卷竹如意佛家にて用ひ一尺許の戲の形せる具疣せず餘に述べず

高市皇子一
天武天皇の皇子

行す。十六にして仕へ、三十にして退き、老母につかへて孝を盡し、四十にして隱遁の志を堅くせり。實に希代の隱士といふべし。棲遲のあと禪尼寺となりて存在す。風景凡て雅趣あり。外面に小有洞、中門梅關、嘯月等の額、皆翁の手書也。其の藏する所の翁の肖像、探幽圖して自贊を記せらるゝ幅、閣上より望む所十二景の卷、(此の閣三重に作れり)又木崑崙、竹如意の類、生涯愛翫の六物有りて請ふ人には是を示し、且近來其の圖を模刻し冊となして廣むれば、こゝには疣せず。其の中に七絃の琴は明陳眉公の舊物にして、ことにめづらしといひもてはやすを、靈元法皇聞き召し及ばれて、宮中に召して歛覽まししくけるが、古きいと三筋のみ残りければ、徳大寺家の世臣物加波氏の妻女に勅して、糸四筋を補ひて下し賜ひけるとぞ。物波加氏は世々琴絃を作る來由ありて、勅許を蒙れる故となむ。今右に琴の圖様を掲ぐ。

佐川田喜六

佐川田昌俊喜六と稱す。姓は高階、世系高市皇子六世峯緒より出づ。承和の比高階を省略して高と稱ふ。先人某下野足利の莊早河田村に食みし、遂に文字を佐川田にかへて氏とす。

孫吳の書
兵書孫武、
吳起の著

貞治四年義詮將軍、高掃部助師義をして信濃の賊を討しむる時、援兵となり、足利基氏鎌倉に居て東國の鎮たる時、手書を賜うて累世鎌倉に仕ふ。その後六七世を経て、喜六にいたる。喜六幼くして越前長尾家の將木戸立齋が養子となる。いまだ弱冠ならざる比より、三郡の訟をきよて判するに、議辯よく當れば、人賢者なりとあふぐ。立齋和歌を好む故、したがひて學べり。後立齋亡しくなりて、其の家絶えたる後、洛に赴き、慶長五年庚子大津の驛の戰に、ある人の手に屬し、先登し、鎗を壁下にあはせ、左の股を傷けられてなほ周旋す。永井右近大夫直勝朝臣、喜六が勇名を聞きて、招いてしばしば眷遇し給ふ。慶長十九年難波の役、侯の營に九鬼某の兵すむ時、「其の間いかばかりかある。又沼川の淺深いかならむ」と仰せければ、喜六進み出でて、「おのれ往きてものみつかうまつらむ」といふ。侯とどめ給へどもきかず、芦原沼川をわたりて、九鬼の兵と言を交へ、其の淺深などくはしくはかりてかへり、「敵兵必ずいたることを得じ」とまうすに、果して明日引退。水陸の算喜六がことばのごとくなるを、人皆奇とす。凡て弓矢の道にくはしく、孫吳の書を明らめ、經濟の事をもよく知れり。右近大夫の嗣信濃守尙政朝臣、ますく喜六に禮を厚くしたまふ故に、諸士もまた重んず。寛永十年侯増封を得

倉廩―穀物を納れおく
倉
一休禪師―
紫野大徳寺
四十七世の住僧、名は宗純、
小堀宗甫翁―
遠州流茶道の祖、小堀政一
松花堂―山城男山の僧
昭乗、書畫の大家、
近衛藤公―
近衛信尋公
鷗社―詩歌風流の會合

給ひ、下野より山城の淀に移らる。一時在府の日、封地不熟にして、諸士飢寒す。その比、喜六執事たれば、皆軍用の金をからむと乞ふに、喜六思惟して、「是は君にまうし、同僚にかたらひては成るべからず。吾一人の意にてはからはむ」と、倉をひらき、銀子千貫目を出し、返濟のこゝを示して分配す。後侯是を聞き召して大に怒り、私のはからひを責む。喜六申す、「軍用金も何のためぞ、諸士乏しく、公の恩を思はざる時は、有りても益なし。今十年を経ば各返納して倉廩もとのごとくならむ。されども、此の舉臣一人の所爲なれば、もし義にあらざと思さば、死を賜はむも亦辭せざる所也」と。その理當れるをもて、侯も言なくやみ給ふ。同十五年疾に嬰りて致仕し、家は息俊甫に委ね、薪村酬恩庵一休禪師の遺跡の境内に黙々庵をむすびて幽居す。禪に參じ、山水を翫び、意を方外に遊ばしむ。壺齋また不二山人ともいふ。茶技は小堀宗甫翁を友とし、連歌は昌琢法眼に従ひ、書は松花堂に學ぶ。漢學はもとより羅山子に聞けりし。和歌をも好みて、近衛藤公に參り、中院通勝卿、木下長嘯子にも鷗社をなす。ある時、淀川の鯉を近衛殿に奉りて、
ついであらばまうさせ給へ二つもじ牛の角もじ奉るなり

(閑田子云、鯉の字古假名はこひなれども、後世はこいとかけり) 御かへし

魚の名のそれにはあらで此比にちと二つもじ牛の角もじ (來いとの給ふなり)

博山の香爐
漢に博山
爐あり、其
の形せる香
爐か

又所持の博山の香爐を羅山子に贈る時、子答へて「遠寄一爐示相戀、心如螺甲沈水鍊」とよるこべり。此の類風流の交の書牘世に残れるもの多し。擧ぐるにいとまあらず。昌俊若きときよめるうたに、

よしの山花待つころの朝なく、こころにかかる峯の白雲

これを飛鳥井雅康卿の傳奏にて後陽成院の觀覽に入れければ、深くめでさせおはしましけるが、後寛文の皇后集外歌仙を撰ばせ給ふ中にいりて、忝く宸翰を染め給ふとなむ。連歌において殊に長じけることは、ある人昌琢に向ひて、「當時連歌に冠たる人は誰ぞ」と問ふ。昌琢「西におのれあり、東に昌俊あり」と(是は永井侯いまだ下野に在城の時也)答へられしにて知らる。寛永二十年癸未八月三日病みて終る、享年六十五なり。墓は酬恩庵境内にあり。

集外歌仙一
巻、後水
尾天皇の皇
后、福門院
源和子の撰

○蓋蹊云。墓碣に何でもないといふのみ記すとぞ。予先年此の寺に至りしかども、故障ありて此の墓および其の茶室を見殘せり。今は人の話をもて録す。

○後に正せれば、是什麼と小石に誌し、其の後に大石に道春の碑銘を彫るとぞ。

僧 元 政

釋日政字は元政、妙子と號す。不可思議又秦空とも稱す。姓は菅原、平安の人なり。母石井氏、或夜の夢に、高僧入り來りて、「たのもしきかな」といふとおほえて後孕めることあり、元和九年己亥二月二十三日、京師一條のほとりに生る。母氏曾てなやむことなし。二歳の時、秋七月十六日夜、父携へて東山の送り火を見せしに、大の字を見て、家にかへりて、たどちに其の字をしるす。またさまぐの玩物をならべ置く。人その名をよぶ時、喚ぶにしたがひてとる事かつたがはず。六歳にしてはじめて書を讀ましむるに、一たびさづかりしことはわするよことなし。ある日、父にしたがひて、建仁寺大統院に遊び、院王九巖長老にまみゆ。長老いふ、「兒何の書をならふや」といふ、「大學を學ぶ」と。即長老二行を口授するに、たどちに諳記して誦す。長老掌を打ちて嘆じてい

建仁寺—京
都下京、臨
濟宗

寧馨兒—此のとき兒の意、兒を褒むる語、晉宋間の俗語

得度せむ—出家授戒せむ
天台三大部—天台玄義十卷、天台文句十卷、止観十卷、皆天台大師智観の著

法華經—七卷、後八卷
秦鳩摩羅什譯
切利—切利天の略語
内外の二典—内は佛書外は儒書
深草—山城紀伊郡、
身延山—甲斐身延山久遠寺、日蓮宗總本山、曼荼羅—佛證悟の境界、衆生本具の徳を表したるもの

はく、「誰か知らむ今寧馨兒あり」と。八歳にして近江彦根にいたり武事をならふに、又よくす。十三歳城主井伊直孝君に仕ふ。故ありて母の氏をとなへて、石井俊平といふ。常に官のいとま書籍をよむに、精力人に過絶す。一時江戸にくだらむとするに、かねてより母氏のもたる観音の小像を携へむと乞ふ。此の像は母氏石山にまうづる道にて拾ひしところにて、深くひめ置きたれば、年比得まほしきながら、いはで過せし也。しかるに乞ふに及びて驚きていはく、「よべの夢に尊像告げて、俊とゆかむ俊とゆかむと宣ひしにあへり」とて、すなはちあたふ。さて江戸にありて疾し、京にかへりて養ふこと一年、時に歳十九也。性山水を樂しみ、風景にあうては終日吟咏す。母氏と和泉和氣に遊んで、日蓮上人の像を拜し、三願を起していふ、「一つには出家得度せむ。二つには父母の命ながくて、孝養をつくさむ。三つには天台の三大部を閲せむ」と。時に泉涌寺の雲龍院周律師法華經を講ずるを聴き、切利に生ずるの文に當りて、律師、法藏比丘の母をすくふ因縁を引くを聞き、涕泣してやまず。四座も亦これが爲に袖をうるほす。師、律師の徳義をしたひ、出家の志をつぐ。律師いふ、「汝はなはだ少し。出家いまだ遅からず」と。さて後八とせを経て、二十六歳、妙顯寺日豊上人にしたがひて志を遂げ、果して

て三大部を閲す。もし解せざることをあれば、僧俗長幼をえらばず、是を問うて盡す。夢に天台大師と議論あまたたびにして、解すること多しとなむ。しかも慎みて人にかたらず。常に三學を修して、滯らず離れず。又およそ耳目の觸るゝ所ながくわすれず。かよれば、内外の二典にわたり、かねてよく日本紀に通ず。後深草に隱遁の地を占めて、瑞光寺と名づく。常に袈裟を脱せず、持律誦經怠る時なし。其風をきく者、草のふすがごとく、首をつぎてあふぐ。又來りて道をとふ者あれば、よくをしへてさとす。貴介公子と雖も招くには應ぜず。或は人絹衣を供すれば、棉にかへて徒衆に施す。後父母の舎を寺の傍に設けて、稱心庵と名づけ、孝養おこたる事なし。父行年八十七にして終る。母とし七十九に及びて、身延山に詣でむ事を告げられしかば、師たすけて共にまうづ。此の時身延紀行あり。後母もまた八十七歳にて終る。其の二七日より師俄に病にふし、遂に起たざるを覺り給へば、諸徒弟に遺戒し、自から曼荼羅を書し、弟子恵明に附屬して、法嗣とす。明くる年遷化の前一日、父母の墓に大に法華の首題を書し給ふ。世壽は四十六、寛文八 戊申年二月十八日化す。辭世の歌あり。
鶯の山常にすむてふ峰の月かりにあらはれかりにかくれて

遺骸を稱心庵の側にはうむり、竹兩三竿を植うるのみにして、塔をたてず。遺命によ
 るとぞ。著す所草山集三十卷、草山和歌集一卷、釋氏廿四孝一卷、龍華歷代師承傳一卷、
 同抄一卷、本朝法華傳三卷、小止觀抄三卷、草山要路一卷、身延紀行一卷、稱心病課一
 卷、元々唱和集二卷、扶桑隱逸傳三卷、聖凡唱和一卷、如來祕藏錄一卷、食醫要編一卷、
 猶考訂のもの甚多しとぞ。(以上艸山集に眞名にて出でたるを花顯譯し、蒿蹊又正して記
 す)

○又花顯ある人のもとにて、上人自筆にかたかなして書き給ふ日記のはしを見る。そ
 の語平生を見るに足ればこゝに擧ぐ。

十三日、書_二和歌懷紙_一、草紙をこしらへるとて紙を折る。一僧前にあり。

其の僧「是へ給はり候へ。折り申し候はむ」といふ。予が曰く、「是も修行なり。心か
 らひすまぬやうにすれば、ろくになるのみにあらず、心も正しくなるなり。手をも
 つてすることは是にかぎらず、何事もうるはしからぬものなり。戸のあけたても鳴
 らぬやうに心をつけ、はきものぬぐもゆがまぬやうにするは、見聞のよからむため
 にあらず、心をさめむため也。見聞のためにするは、甚しき時はまことの業に

ひすまぬ
 ゆがまぬ
 ろくになる
 正しく揃
 ふ

源氏—源氏
 物語

定惠—三覺
 中の二にて
 靜慮と眞理

もなるべきなり。心のためにするは、只是佛道の因也。日夜になす所善事といへど
 も、さながら惡業ともなり、さらぬことも又功德善業ともなる也。心をつくべきこ
 と也。凡何事も修行にならぬことはなし。物を二つにするは皆根本にもとづかぬの
 忍なり。

十六日、訓_二點戒牒及光照寺化疏各一卷_一。

十七日午後、讀_二源氏須磨の卷十三張半_一。僧曰く、「戒律を持するは養生にもなるべき
 と存す」予曰く、「何ぞたゞ戒のみならむ。八萬の法藏皆是良藥也。身心のために病
 をなほすより外のことなし。詩歌の道をよくすれば、即是定惠の二法を修する也。二
 法具すること詩歌一致なり。己の藝にほこり、人の耳目をよろこばしめむとするは、
 詩歌の邪路也。西行上人、明惠上人に語りしは、我が歌をよむは遙に尋常に異也。花
 子規月雪すべて萬物の興に向つても、凡所有皆虛妄なること眼にさへぎり、耳に滿
 てり、よみ出す所の言句皆眞言にあらずや、花をよめども、實と思ふことなく、月
 を詠ずるも、實に月と思はず、只此の如くして隨緣隨興よみ置く所也。紅虹
 たなびけば虚空色どれるに似たり、白日かどやけば、虚空明なるに似たり、然れ

ども、虚空もと明らかなるものにもあらず、又色どれるものにもあらず、我^{われ}又此の虚空のごとくなる心の上において、種々の風情を色どるといへども、更に蹤跡なし、此の歌^{うた}即^{すなはち}是^{これ}如^{ごと}來^ら形^{かたち}體^{たい}也^{なり}、されば、一首よみ出でては一體の佛像を造る思^{おも}ひをなし、一句を思^{おも}ひよりては、祕密の眞言を唱ふるに同じ、我^{われ}此^{この}の歌^{うた}によりて法を得ることあり、もしこよに至らずしてみだりに人此の道を學ばよ、邪路に入るべし」といふ。

山深くさこそ心は通ふとも住まであはれは知らむものは

これも、西行上人のその時のうた也。明惠傳記に見ゆ。
十八日。天大晴。嘗^{かゆ}粥^を即^{すなはち}出^{いで}高^{たか}槻^{つき}肩^{かた}輿^こ中^{なか}念^{ねん}誦^ず已^ま畢^ひ而^{して}看^み須^す磨^ま一^{いつ}帖^{てつ}書^{しよ}坊^{ぼく}白^{はく}水^{すい}來^{きたり}出^{いで}叡^い山^{さん}戒^{がい}檀^{だん}院^{いん}戒^{がい}牒^{だつ}一^{いつ}卷^{けん}世^せ尊^{そん}寺^じ行^{ぎやう}忠^{ちゆう}筆^{へつ}予^よ閱^み一^{いつ}遍^{べん}又^{また}示^し爲^な家^け卿^{けい}書^{しよ}古^こ今^{こん}作^{さく}者^{しや}傳^{でん}一^{いつ}帖^{てつ}古^こ今^{こん}集^{しふ}歌^か人^{にん}之^の履^{りふ}歴^{れき}尤^{なほ}詳^{しやう}也^{なり}予^よ乃^{すなはち}覽^{らん}了^{りやう}還^{へん}之^の。

廿日。讀^{よみ}刪^{せん}定^{てい}止^し觀^{くわん}及^{及び}源^{げん}氏^し物^{ぶつ}語^ご。

廿一日。午後。省^{しやう}養^{やう}壽^{じゆう}院^{いん}見^み源^{げん}氏^し物^{ぶつ}語^ご十五^{じふご}六^{ろく}帳^{ちやう}略^{りやく}下^げ

○蕭^{しやう}巖^{いん}云^{いふ}、上人の詩歌其の集あれば、こゝに贅^{ぜい}すべからず。しかれども秀^{しゆう}逸^{いつ}と聞^きゆる歌、又その志を見るべきもの少し擧^あぐ。

深草の里に住みなれて後

住までやは霞も霧も折々のあはれこめたる深草の里

山家 橋

朽ち果てねなほ折々は訪ふ人の心にかよる谷の柴橋

宇治川の水上にのほりて、人も通はず静なる所に久しくながめて、柴船の往きか

ふを見るに、薰大將の「誰もおもへば」などいひしもおもかけにうかびて、

世の中は誰も思へば水の上に浮きて漂ふ宇治の柴船

同じく平等院にて

はかなくて今日も暮れけり明日知らぬ三室の山の入相の鐘

新發意の東へ行くをはなむけすとて、人の歌よみけるをみて、

武藏野の雪も氷も踏み分けて果なき法の道を究めよ

大方の世に濁るとも住みなれし我が山水の心忘るな

折句の歌に、ふゆのはな、

ふみ分けし雪の深山の法の道はるけき跡に猶迷ふ哉

誰もおもへば一薰が柴船を見て人間の無常を嘆じたる語源氏物語橋姫巻に出でたり
平等院山城久世郡

折句一題の假字を毎句の首に置くもの

歸鴈

迷ひ出でし人の心を故郷にいざさは誘へかへる雁金

春の歌の中に

咲きて散るものも思はじ山櫻色香の外に花を眺めば

妙の一字を書きて、歌よみてと人のいひしに

心にも及ばぬ物は何かあると心に問へば心なりけり

○凡調にあるざる歌、あまたなれども、こゝにとぞむ。

○又花顛、彼の法嗣惠明師の手書にて隨筆を見し中にありし一條、面白き事なればとて擧ぐ。

○熊澤次郎八は陽明の學にして、備前岡山侯に教へし人なり。後俸祿をすてて、洛陽上御靈の邊にかくれて、名を蕃山了介と改む。甚樂を好み、伶人を日々招きあつめて、樂を稽古しけり。ある時伶人某といふもの、了介をして艸山に來り調せしむ。爾來節々艸山に來れり。又伶人を携へ來て樂を聞く。余も艸山に従ふ。又師に請うて折々法華經の訓讀を習ふ。梵語の心得がたき所などを聞く。譬喩品に至りてやみぬ。又源氏物語をも師に聞けり。これは全篇聞きけるが、師の前にしては強ち佛法を破することなし。但當世の

梵語—古代の印度の言語
譬喩品—法華經卷三、

釋尊—釋迦の尊稱

霜月—舊曆の十一月

陳元贊—字は善都、既白山人といふ能書且陶器を製す、又筆法を善くす

僧の行などの怪しき事を歎く。釋尊に當世の僧を見せたらば、此の人は何といふものぞと仰せてむ、孔子に當世の儒者を見せたらば、これ何ものぞと仰せてむなど語りけり。寛文二年霜月七日の日、了介又伶人三四人并に小倉少將といふを伴ひて、艸山の稱心庵にて樂をなす。了介は琵琶を弾じ、少將は琴をひく、師は和歌をよむ。天地の心になふ調には山の岩木も動くばかりぞ。了介、吉野山に庵を結びて隠れたりける比、消息したりし、此の春は吉野の山の山人となりてこそ知れ花の色香を

○蕭蹊因に云、陳元贊は明末の亂を避けて歸化する。朱舜水と同時とぞ。初尾張にありて元政師に相見の趣、其の身延紀行に見ゆ。後京師に住みて、常に師と交を結ばれしよし。其の贈答の詩文を集めたる書、元々唱和集也。おのれも元政師に贈られし尺牘を買ひ得たるを左に録す。

久違慈範。每切神馳。未省。邇日。法體若何。老邁自遷居後。目淚。腰疼。足痺。駢集而來。苦楚萬狀。寸步如登九折。緣是不能趨候寶山。以聆清誨。疎譴豈容。筆舌。想高明當鑒。愚之衰憊耳。前承借五雅九冊。謹遣奚奴。奉璧。希檢收幸。

甚。餘惟隆冬。保裔是顯前。此不宜特筆。寶山多竹。小者乞賜。一竿。以備衣桁之用。勿吝是懇。

艸山元政師最愛下

陽月晦 俗子陳元贊花押

北狄—清朝
を指す、愛
親覺羅氏は
滿洲より入
ればなり

—遊行せられ
—行脚せられ

○此の人學才あるのみならず、柔術に妙にして、今も本邦に行はるゝは此の下流多しとぞ。文武の君子にして北狄に従はむとを惡みて皇國に来る。其の爲人知るべし。(此の人所持の觀音の像及持物、北野東向の觀音寺にあり。しかれば京にて終られしなるべし) 丈山老人もまた師と友とし善し。詩仙堂へ茶を乞はれし書簡をある人持てりし。
○深草眞宗院は淨土、深艸流儀の本寺也。師其中興慈空上人とつれに伴ひて遊行せられし。隣寺といひ、同じく律を持ちて齋食なれば、かたみに煩らひなしとよろこび給ひしとなむ。自他宗の嫌忌なきを尊ぶべし。

佛 佐 吉

永田佐吉は、美濃の國羽栗郡竹が鼻の人にして、親につかふることたぐひなし。又佛を

四書—大
學、中庸、論
語、孟子

信す 大かた貧しきを憐み、なべて人に交るにまことあれば、誰となく佛佐吉とは呼びならしけり。いとけなき時、尾張名古屋紙屋某といふ家に僕たりしが、いとまある時は、砂にて手習ふことをし、又四書をならひよむ。朋輩のもの妬みて、「讀書にことをよせ、あしき所にあそぶ」など讒しければ、主もうたがひて、竹が鼻にかへしぬ。されども、なほ舊恩をわすれず 道のついであれば 必ず訪ねよりて安否をとふ。年経て後、其の家大きにおとろへければ、又よりくゝに物を贈りけるとかや。主のいとまを得て後は、綿の中買といふわざをなせしが、秤といふものをもたず、買ふ時は買ふ人にまかせ、うる時はうる人にまかせ。後には佐吉が直なるを知りて、うる人は心しておもくやり、かふ人は心してかろくはかりければ、いくほどなくゆたかに暮しける。父にははやくわかれ、母ひとりを養ひしが、母餅をつきてうりたきよしをいふ。佐吉母の心にたがはず、もち賣ることをはじめしが、「必ちひさくし給へ」とすよむ。母いぶかりて其のゆゑをとふに、こたへて、「ちかきあたりにもとより餅うる家あり。大にせば彼がさはりにならむ」といふ 其の意を得てちひさくすといへども、外と同じく買ふ人ありけり。ある冬、年せまりて、近國へかね集めにゆくことあり。かへるさ日くれて道に迷ひしに、山賊いで

わねしら
お前達

て此のかねを奪はむとす。佐吉いふ。「我むかしはまどしかりしが、今はかばかりのかね與ふるも傷むにたらず」と、投げ出しあたふ。「さらば其の衣類をも脱ぎてあたへよ」といふ。「これも易きことなり。いかさまわねしらさだめてさむからむ、なほほしくば我が家に來れ、みなくに與へむ」と、まづ心よく著たるものを脱ぎて、「さて此代りには街道に出づる道をしへよ。我けふは道にまよひたり」といふに、一人の山だちつくなくと佐吉を見て、「我教へむ。いづくへ歸る人ぞ」と問ふに、「竹が鼻の者なり」とこたふ。「さは佐吉ぬしにあらずや」「しかり」といへば、「こはあしき人のもの取りたり。我が黨のものにいひきかせて、明日かへすべし」といふ。「否ぬしたちにあたへたる上は、又取るべきやうなし」と、行く道を聞きてわかれぬ。其のあくる日、いひしごとく取りたるものなもみて來て還したり。佐吉いろくにいへどもさし置きて走りさりぬ。又ある時、諸國の神社佛閣を拜みめぐりに、出羽の邊にて、疾おこり死せむとしければ、心中に拜みて、「今一度母にまみえしめ給へ」といのりしかば、速に愈えけり。本國へ歸りて老母にかくと物語してよろこびしかば、母「其のやまひ愈えしは佛の御加護なれば、佛像を鑄て謝したてまつれ」といふ。こゝに江戸の某といへる鑄工につくらせけるが、やがて成就して船

大人一尊
客

にて登せける道、遠江灘にて風はけしく船覆らむとせしかば、荷ども海にうちいれけるうちに、此の佛像をも沈めける。舟人此のよしを告げてわびければ、佐吉かへりて大に悦び、「遠江灘は昔より人多く溺れし所なり。そこに佛像いらせたまふことは、幸なるかな。ねがひてもなすべき作善也。其の費はいとふべきにあらず、急ぎて今一體鑄たてまつらむ」と、價を舟人に託しければ、また幾ほどなく成就したるは、今も竹が鼻にあり。その像たやすくなすべきにあらず、大なる御佛なり。又石佛五百體たてむことを誓ひしが、終に七百體に及びしとぞ。およそ母につかふること、晝は起居にこゝろをつけ、よるはいね靜るさまを見ざれば、おのれ枕をとらず。常の所行かぞへつくすべからぬ中に、ある時母柑子をのぞみしかば、近村に求むれどもなし。只同村に此の木をもちたる人あれども、生得客齋こと甚しき人なれば、これに乞はむもいかどはおもひながら、せんかたなく、たゞ一つを乞ひけれども、果してあたへず。さるに、其の時おもひがけす一陣の烈風吹き來て、かの柑子を多くおとしければ、あるじも今は惜む心なく、拾ひてあたへける。佐吉が心天に通じけるならし。又おもふやう、「母身まかり給ひて後は、百味の珍膳もかひなし。生前にまゐらすこそ」と、大人を招請するがごとく響應せしこと

ふたよびありけるとぞ。常に善事をなすことおほきが中に、細なることには、道ゆくごとくに布の囊を腰につけ、米穀のおちたるを、手のとどくほどはひろひ置きて、雪中の餓鳥にほどこす。大なることには、處々の大橋、洪水の時に落つる事を恐れて、自から財をすてて石ばしとす。およそ至孝をはじめて、其の所行を國侯きこし召して、米をおほくたびて感賞し給ひ、なにごとにも望む事あらばまうしいでよとおほせくだされければ、其の時よみて奉りける。

ありがたやかかる浮世に生れきて何不足なき御代に住む哉

閑田子按、作者のころ、世はうきならひなれども、不足なき御めぐみの御代にすめば有りかたしといふなるべし。和歌者流の規矩をもて論すべからず、たゞ心をとるべし。故に花頼子しるせるまゝをうつせり。

老後、覺翁また實道といふ。壽八十九歳にして、寛政元年十月十日に終る。

山口庄右衛門

莊屋—今の町村長にあたる

大和の國十市郡八條村莊屋山口與十郎といへるもの。寶曆の比、凶作により同郡八ヶ村

西國順禮—西國三十三所を順禮する事

高野—高野山金剛峯寺
紀伊伊都郡河南、弘仁七年空海建立

の長とともに訴へ出づることありて、其の趣私あるに罪せられ、皆々伊豆の新島といへる所に流さる。其の子庄右衛門、七旬に餘る祖母を養ひて過すが、もとより家財田地等も没入せられければ、但力作をもてからき世を凌ぎ渡る中にも、父の意を慰めむとて、ひらき文を贈る。(凡流人に文通するには、封を附けずして往復するを、ひらき文といふとぞ) さて年を経るに祖母身まかりしかば、今は島の父の許へ行きて仕へむと志し、領主へ願ひけれども、たやすきことにもあらず。力なく過ごしけるあひだ、大赦の御事あり。此の事を聞くとひとしく、弟の清右衛門といふものをあづまに下して、願ひ奉りけれども、何の御いらへもなく、其の年もくれて、明くる年遠江の某といふもの、西國巡禮して尋ね來り、「おのれも新島の流人なりしが、去年大赦にあひて歸りぬ。彼の島にて與十郎殿には隔なく交りし。與十郎殿は隣村の三郎助なる人と酒を商はれしが、其の三郎助盜人にあひ横死せし後、與十郎殿も眼病にて盲と成り給へり」など語りしかば、庄右衛門いよく心ならず、高野に伯父の僧ありしもとへ行き、しのびて彼の島に渡らむやと、思ふよしを告げしかば、其の僧、「けに孝の心は淺からねども、後もし御赦しあらむ時の障となるべし。たゞ命をかけて願ひまうさば、よも御免しなき事はあらじ」と諫めけれ

官廳に達し
幕府に上
申し

ば、庄右衛門聞きうけて、夫より又領主へ願を奉りけるに、孝養の意を感じ給ひ、官廳に達し給ひしかば、明くる春免許を蒙り、新島に渡りぬ。妻も其の親にあづけ、衣服調度を代なして路費に充つ。かくて領主の邸に出でし時、まづ其のたくはふる所を尋ね給ひしかば、右の儘にこたへまうすに、「かばかりにては心もとなし。糧盡きばいかに」と重ねて問はせ給ふ。「それは物種をたくはへ侍れば、土さへある所ならば、二人が食物心やすく作り出してむ」とまうす。さて是を聞きつたへ給ふ諸侯、又富豪の家々より奇特の孝子なりとて、錢別を若干得たり。梶取水主も官より賜はり、伴船二艘に引かせ、新島に著きて見れば、纒に九尺四方許の柴の庵に、與十郎は實も盲人になりて、さしうつむきてあり。庄右衛門下り來りしよしをいへども、初めはまこととせず、委しく物がたるに及びて、且おどろき、且よろこび、「夢ならばさめすあれ」など惑ひしこそことわりなれ。庄右衛門も、悲み喜びこもくにてむせびける。そのあたりにふくといへる老婆、與十郎が盲になりしよりは、よろづ扶持し、朝のふ心をつけていたはりしかば、此の庄右衛門が下りしを聞き、共によるこぶこと大かたならず。かゝる海島にはめづらしき人がらなりき。さて介抱の餘暇には、持來りし物種を蒔むと見めぐりしに、野よりは菜を生ぜず、



孝子云々
詩經大雅の
語

堵の如くな
り一人の多
く立ち込み

山よりは蔬を出さず、わづかに野老をほり、葛をもとめて喰ふのみ。冬は魚もともしく
て、芋にて命を支ふ。唯綿たばこの類を植ゑ、米に代なして老を慰む。後には山のかな
たにたま／＼沃土を見出して、麥米なども作りしとぞ。島人もかく庄右衛門が父に仕
るを見て、父子孝慈の道をしりけるとかや。孝子ともしからず、天その類をたまふとは
是をやいふらむ。或時彼の福女老父が外に出でたる間、庄右衛門にむかひて、「妻や子は
おはしますや」ととふに、しか／＼のよしを語りければ、「なさけなき人哉。此の四五年
がほど假初にもいひ出し給はぬことよ」といふ。「その事也。もし父此のことを聞き給は
ばせんなきことに心ぐるしう思し召さむとかくしつる也」といへり。此の一つにても常
の心もちひ知らる。さて流罪御免のこと再應願ひ出しければ、島の長もその孝心を感じ、
官の御聞に及びて、赦にあへり。江戸にいたりし時、是を賞嘆して、金銀を贈る人もあ
り。通行の路上これをみる人も堵の如くなりしとぞ。

若狹與左衛門子兄弟

若狹大飯郡小堀村に與左衛門といへる農夫あり。わかき時より慈悲深く、心もたどならず

稼穡―農業

思ひけるに、ある夕暮、二人連の女道者門に立ち、「我等は西國巡禮にてさぶらふが、行
きくれて道も辨へがたし。御情に一夜明させ給へ」といふ。與左衛門憐み心よくもてな
しけるに、一人の女、懐より男兒を出して、「便なきまうしことにさぶらへども、旅はも
のうき習ひなるに、女の足のはか／＼しからず、此の小兒にわびて、折々は捨ててもやせむ
とおもへど、犬狼の懼あればそれもせず。あはれ此の子を養ひ給はらば、心よく巡禮仕
り候はむ」といふ。與左衛門これを聞て、妻にはかりていふ。「我年比子といふものなし。
此の子を養はば、まことの子を得たるも同じことにあらずや。いかに」と。妻も心うつく
しき人にや「けにさることに侍る」とて、速にうけ引ければ、巡禮は涙を流し拜みよ
ろこびて朝とくたち出でぬ。さて夫婦其の子を宗四郎と名づけ、天よりあたへ給ふ所な
りとして、大切に養育せしが、此の後八年をへて實子をまうけ、名を磯八とつけたるが、
兄弟むつまじく、やう／＼長じてともに稼穡をつとめ、父母に仕ふること孝順也。後磯八
はある人に奉公してありしが、宗四郎きかず、「おのれはもと巡禮の子にして、所生も知ら
れぬものなり。磯八は肉を分けられしものなれば、彼に譲り給へ」といふ。父此のよしを
弟にかたれば、「いな、もとは知らず、吾生れぬ先よりの兄也。家を継ぎたまふこそ順な

れ」といふ。宗四郎かたくうけがはず、「おのれ此の家にあらば、いつまでも此の論絶えじ。されども跡をかくさば、父母の哺養なしがたからむ。いかにせまし」と思惟して、つひに隣村の豪農をたのみて奉公し、給米をことごとく父母に贈りて、家には歸らず。しかる間與左衛門老病にてむなしくなりしかども、家をつぐものなく、村長もてあつかひて、兄弟相譲る旨を官に訴へければ、國君感賞し給ひ、宗四郎には米若干を賜ひて家を繼がしめ、剩租税を免じ給ひ、弟磯八には別に月俸を賜ひ帶刀をゆるして、褒美し給ふとぞ。

○思孝曰、大古大鶴鶴帝莚道皇子と、御互に天位を譲り給ひ、三年が間、空位なりしこと、世の知る所なり。夫は上が上、是は下が下にして趣同じ。尊むべき操ならずや。

○菑蹊按、大ささきの帝の御譲は、おほけなけれど、猶新井白石の讀史餘論に疑へる論もあり。此の賤者の譲は議すべきよしなし。たふとむべきかな。

○菑蹊云。上京にある豪富の者、父弟を愛して家を譲らむの趣なりしを、兄訟へて利運になりしが、又弟とも争論に及びたり。兄弟ともに奢侈の外をしらぬ無頼にて、弟は早く身まかり、兄は年を追ひて貧乏になり、色々のよからぬ催事などして過し、其の死する時は陋屋に

借り住みし、身を藏すばかりの葬儀だに出来かねたりし。天鑿あやまたず、善惡の報如斯、豈慎ざるべけむや。

いとめ

老菜子一楚
國の孝子、
廿四孝の一
年七十二、
五彩の衣を
着て兒戲兒
啼をなし父
母を喜ばし

いとめは、若狹三方郡早瀬浦佐左衛門が妻なり。孝心深く、舅姑に仕ふ。姑は先に死し、舅年八旬に餘り、老耄して非理なることをいひのよしれども、少しも逆ふ色なく給仕す。ある日いとめ外より歸りたるに、老人薬をちらして孫とあそぶ。「何事をし給ふ」と問へば、「子産まねしてあそぶなり」といふ。「さらばわれも子を産まむ」とて、又薬を持ち來り、同じく戯るれば、老人興に入ること斜ならず。其の他のあつかひもおして知るべし。(菑蹊云、老菜子が兒戲をなすにははすしてあたれるもの也) 一とせ深雪軒をうづむころ、「茄子の羹を食はむ」といふ。いと心よくうけがひ、近きほとりの寺に走りて、茄子の糠漬をもらひ、水にひたして鹽を去り、羹にしてすむ。又一年冬のころ、鮮き魚をもとむ。折ふし海あれ、漁なければ、いかにともせんかたなけれど、さらぬさまにもてなして門に出で、とやせむかくやせむと思ひ煩らふ折、忽足のもとに魚をどり

たり。いとめ天を拜みてよろこびて、即調じてすよめけり。隣の人見しには、鳶魚をつかみ来ていとが家の棟にとまりしが、やがて魚を落して飛び去りたりとぞ。これ誠に孝の心、鬼神に通じけるならむ。つひに其の行狀を國侯聞し召し、米若干賜はり、家の租をも免し給ふとぞ。

○思孝云、はじめ茄子を羹にせしは晋の石崇が豆粥を熟したるに似たり。魚を得たるは王祥が故態に同じ。孝の切なるより、智も發し、感應にもあづかれり。此の孝女の事委しくは孝婦集といふものに見ゆ。こと繁ければ略して擧ぐ。

○蒲蹊云、前編に出せる大和の伊満女、河内の清七など、鰻を得、鵝を得たる皆同例なり。さきに評せる如く、たゞ昔の物語とのみ思ふべきかは。誠の感通は和漢古今の別あるべからず。

高戸善七

備中國鴨方村に、高戸善七郎、後に孫兵衛といへるは、父に仕ふること極めて孝也。其の父會右衛門四年にあまりて病に伏し居けるに、晝夜側を離れず。弟源次郎もまた孝順にて、兄と等しく懇に心を盡しける。少しく快き日は、近きあたりに休息所をかま

割子一辨當
毛見一稻作
の豊凶の檢査

へ置きたるへ伴ひ行き、割子やうの物開き、そのわたりの人をあつめて、酒をすめよ、心を慰ましむ。善七郎は公務の外他行せず、介抱にのみ心を盡し、行狀正しく、すべて人の及ばざる事多しとなり。早損水損ありといへども、毛見をも願はず。田地破損し、或は砂入せる時も、自から費を出して修理し、官邊のために煩しきことを願ひ出でず。金銀を人に貸與ふる時も、貧者には利足を軽くし、他の物を借れるよりも益あるやうに實義を以て計り、己が利をさらにははず。窮せるものに合力をなすこと多く、此の蔭によりて、貧家も富におもむける者多し。乞食など我が門に立ちより乞ふ時は、分に過ぎて施すと也。領主の聞に達し、寛延三年二月饌を賜り、二萬金を與へて賞美し給へりと、備前孝子傳に見えたり。(これは備中の國なれども、備前の支封池田信濃守殿の領地とぞ)此の人頗る文字もあり。老後人の飼ひたる山雀の翅を殺したるを憐み、乞ひ得て愛養し、翅長するに及び、籠を開きて去らしめむとするに去らず。程なく翁京へ上らむとて、家より一里ばかり出でたる竹輿のうちにて頓死しければ、家にかへしてとかく事を計る間、彼の山雀を其の家の東一丁ばかりある親族のもとへうつしたるに、翁の死をやりけむ、籠を破りて飛び去りぬ。さて葬儀など終りて後、妻子翁の墓にまうでて見れば、彼の鳥

國風—和歌

かぞいろ—
父母

そこにあり。此の墓所は翁の家より西にて。うつしたる家よりは五丁ばかりもあらむに、いかに知りて來りしにかと、人々あやしみて、例のごとく手を動して試むれば、手につきて舞ひ鳴きぬ。いと悲しうて連れ歸らむとしたれば、やがて又空に飛び去りぬとぞ。此の一條は其の邑の儒生西山拙齋老人の話にて、即山雀歌の作有り。(詩長篇歌體也) 蒿蹊にも國風を請はれしかば、

鳥にしも及びにけるかかぞいろに直くつかへし人の誠は
うつくしむ心を知りて山雀のやますも主を慕ひけらしも
などよみておくりぬ。

馬郎孫兵衛

木曾山中(里の名を遺失す)馬夫孫兵衛なる者あり。花頭が知己何某の阿闍梨、江戸よりのかへさ、此の馬夫が馬に乗られたるに、道あしき所に至れば、孫兵衛馬の荷に肩をいれて、「親方あぶなし」といひてたすく。度々の事にて、いと珍らしきわざなれば、あざり「いかなればかくするぞ」と問ひ給ふに、「おのれら、おや子四人、此の馬にたすけ

十念—淨土
宗にて南無
阿彌陀佛の
名號を信者
に授けて佛
に結緣せし
むる事
すさう—殊
勝

られて、露の命をさへさふらへば、馬とはおもはず、おやかたとおもひていたはる也」とこたへ、「さて御僧にひとつのねがひあり。此のあなた清水のある所にて、手あらひ候はむまよ、十念をさづけ給はれ」と乞ひければ、「いとすさうのことなり」とうけがはるるに、はたして其の所に至りて、あざりを馬よりおろし、おのれ手水をつかひ、馬にも口すよがせて、其の馬のおとがひの下にうづくまり、ともに十念をうくるさま也。かくて大によるこび、又馬にのせて、次の驛にいたる。其の賃錢とてわたし給へば、先其の錢のはつほとて、五文をとりて、餅を買ひて馬にくはせ、つひにおのが家のまへにいたりける時、馬のいなときをきよて、馬郎の妻むかへに出でて、取あへず馬にもくはせぬ。男子も出でてあざりをもてなしける。其の妻子のふるまひも、孫兵衛にならひて心ありき。「此のあざりにかぎらず、僧なればいつもあたひを論ぜず、乗る人の心にまかせて、馬とおのれらとが結緣にし侍る一などかたりしとぞ。あざりふかく感じて話せらるるまよに記す

○蒿蹊因に曰く、およそ鳥獸魚虫、形象稟性人に異なりといへども、同じく天地間の蠢動、佛語もていへば法界衆の生なり。しかるをあるひは、人を養ふ爲の天物なりなどいへる語もある

は笑ふべし。果してしからば、蠶、蚊、蚊、蚊のために人を生ずるやと詰りし人もあり。畢竟大
 小相食むに過ぎざれども、農を害する獸、狩らではあるべからず。海濱の民、生産なきは、漁
 釣せずはあらず。皆やむことを得ざる所にして、これをいたまはしめて、白河院の殺生を天下
 に禁じ給ひし如きは、民をいかむ。只生産に預らざる人は、微物といふとも、是を殺し是を
 苦しむる事を斷ずること、常の慎しみなるべけれ。殊に痛むべきは牛馬なり。人を助けて重
 きを負ひ、遠きをわたり、終日苦勞す。然るを老いさらばひて用ふる所なしとて、餌取（今
 俗穢多といふは語の轉せるなり）の手にわたして、之を殺す事などは、いかなる意ぞや。み
 づから牛馬に劣れる意とは知らずや。又牛つかひ馬おふもの、無賴が多きをいかゞはせ
 む。おのれ往年逢坂の山路にて往きかぬる牛車をなさけなく打ちおひけるを見て、

小車のめぐり來む世は已また引かれてうしと思ひ知るらし

とよめるを、あはれなりといふ人もありしが、因果を信ぜぬ人は非笑すべけれど、そはとまれ
 かくまれ、思へるまゝなり。因果はしばらくおきても、惻隱の意人にのみ動きて、物のために
 つれなからむや。畜類も物をこそいはれ、意は却りて人よりもさときあり。前に出せる山雀
 の話、又但馬の人たま／＼京へのぼる道日の岡にて、車牛の立とままりて此人を仰ぎみるな
 ふと見合せたれば、涙をながす。いとあやしくて、よく／＼見れば、吾がもと飼ひし牛な

齊宣王―孟
 子卷一―出
 鄭子産―孟
 子卷四―出
 梁武の粉餅
 佛法の武帝
 佛、生物を信
 じ、生物を
 性とするな
 忌み粉餅を
 作りて牛羊
 豕の三牲に
 代へし事、
 臺城の變―
 梁の武帝が
 候景に臺城
 に圍まれて
 薊に租せし
 を云ふ
 薊豆―共に
 祭肉を盛る
 器

り。いかにしてかく勞する所へは賣りわたされけむと、悲しみに堪へず。其の牛の後に付き
 て、今飼はるゝぬしの許へ行き、三日が間の賃を與へて大津通ひを休ませたりと、其の親族の
 人がたりぬ。もろこしにて、廟中に牛を殺し羊をさくが如きは、聞くもいたまはしき所行なれ
 ど、古來其の邦の習はしにて、先王の禮としもなれり。されど其の中にも、齊宣王の牛もて
 鐘に響を痛み、鄭の子産の生魚を放たれし如き、其の情の忍ざるをみつべし。世の儒生や
 もすれば、物を殺すをいたまず、彼の國の禮をもて口實とす。思はざるの甚しきなり。梁武
 の粉餅をもて三牲の象をなして、生物にかへ給ひたるを、亡國のよしにいへど、臺城の變、
 豈これによらむや。類をもていはば、明の國初、或人廟を祭るに、遷豆を用ひ給へといひし
 を、太祖、我が祖先生るゝ日此の器を知らずとて、用ひられざりしも、三代の禮によらざるは同
 じけれども、國の發る時にあひたれば、人は是を誹らす。何ぞ梁主をのみとがめむや。

續近世畸人傳卷之二

里村紹巴

興福寺—大和添上郡
喝食—律宗
禪宗等の給仕の兒
時宗—相模藤澤の清淨寺を本山とす、一遍上人創始
南都—奈良
平安—京都

里村紹巴、本姓は松井氏、幼なくして興福寺中明應院の喝食たり。はやく志ありて、たとひいやしきことといふとも、必ず名を天下になさむといへり。時に周桂といへる時宗の僧ありて、たまく南都に來れり。連歌をよくするがために、これを好むもの其の門にあつまる。紹巴もとより本土の連歌師大東正云に學びしかば、此の時ひそかに周桂にしたがひて平安にのがる。是よりくるしみつとめて、その技妙にいたり、王侯士庶皆師とし仰ぐからに、其の名天下にあまねし。時に里村昌吡あり、連歌において紹巴と名を齊しうす。松井の氏まぎらはしきゆるあるをもて、かの里村を冒すとなむ。又臨江齋の號は、三條西稱名院殿の賜へる所、即公の御染筆臨江齋の三字并に天龍寺の策彦里の添書等、南都に傳へ持てる人あり。さて後法橋になれるも、また故あり。明智光秀本能寺に押し、事遂けて後、城介信忠のおはす室町妙覺寺へいたる。妙覺寺の構、疎な

三井寺一園
城寺近江滋
賀郡大津町
の西

戴恩記一三
卷
百萬遍一山

れば、其の南隣陽光院の宮（後陽成院の御父、御即位に及ばずして崩す）の小池の御所をかりて城介殿うつらる。陽光院の宮は禁中へ遷れさせ給ふに、事急なれば、乗輿なく歩洗足にて出でさせ給ふ。折しも紹巴其の門を過ぎ、やがて自輿をくだり、是を奉りしかば、此の賞として法印位を賜はりしに、恩を謝し奉りて後、やがて法服を返し奉りていふ、「危を見て節をいたすのみ。豈酬をはからむや」と。ことにおいて法橋に叙せらる。豊太閤の時に至りて、屢脊をかうむり、其の名ますく高し。技能妙に至る者七人、紹巴其の一人也。宅を大炊御門堀川の東南に賜ふ。今も紹巴町といふ。（大炊御門は下立賣也。寶珠庵と名づけられしが、如意嶽をひかしに見る故なりと、花頭は記せり）後秀次の師たるが爲に疑を蒙り、三井寺に謫せられ（花頭云、三井寺中莊嚴寺也）みとせを過ぎしが、終に赦にあへり。紹巴の子、玄仍、玄仲みなよく業を嗣けりと、東涯先生の盍簪録に見ゆ。東涯の祖母は玄仲の長女なれば、其の詳説を先人に聞けりとなむ。されば、先此の説を擧げ、南都のこと、又おのれよく正す所あり。次に花頭がしるし置ける所を掲ぐ。これは貞徳翁の戴恩記によれるなり。紹巴貞徳兩翁も亦師弟の間、親しく見聞する所の記なれば皆實事也。先きに見えたる連歌を學ばれし間、もし成らずは百萬

城北白河の
智恩寺の念
佛は、衆僧
車座になり
て、千八十
個の大珠數
をくりて百
萬遍唱ふ
能の脇師一
能の主人公
を仕手其の
相手を脇と
いふ其脇を
つとむる能
役者

玄旨法印一
細川幽齋

遍の長老の擧狀を取りて東行し、大岩寺にて談義法師とならむとおもへるに、いくたびか袋を荷ひて出で立たむとしけるを、小川宗叔（能の脇師にて名あり）いたく惜しみてとどめ、終にことをなせり。後富み榮えても、もと貧しかりしことを忘れず、寢食を人にまかせず。又和歌の道は稱名院殿に學びしかば、其の御墓に詣づること生涯怠らざりしとなむ。其の人から知るべし。又生得力強き人にて、秋の田といふ處にて、（思孝云ふ、秋田といふ所未考。こは秋の野の道場か。其の寺は其の比鳥丸二條の南にありしとて）辻切のものに逢ひしが、それを掴み投げて、刀を奪ひ歸られしを、小田公聞き給ひて、御褒美にあひし事あり。また少しも媚ぶる心なし。或時太閤の御前に侍りしに、公、
●おく山にもみちを分けて鳴く螢
といふ句を成されて「懐紙に記せ」と仰せ有りしに、紹巴頭を掉りて、「御句にはおはしさむらへど、季もたがひ、螢のなくと申す事は有るまじき事也」とて、筆を執らず。公も色を變じ給ひ、「それにもくるしからず」と仰せけれど、いかにも宜しからぬ由申しける。凡此の公の御詞をかへすものは、四海の内になかりけるに、かく争ひ申すを、玄旨法印、いまだ藤孝といひし時にて座に有り、「いや螢も筋によりて鳴くものによ、いづれ

の集にか、

武藏野の篠を束ねて降る雨に螢より外鳴く蟲もなし

とあり。御句よろしからむ」と取なしければ、公「それ見よ」と仰せけるに、紹巴もことばなくて筆を染めけり。さて其の翌日藤孝の御もとに参りて「きのふのうたは、めづらしきことに侍り。何の集に誰人の所爲にや」と尋ねられければ、大笑ひし給ひ、「律義なる人哉。あのやうなるうたがいくにあるべき。あれはわぬしが首を繼ぎたるなり。此の後何事を仰すとも、かまへてあらそはるゝな」といましめ給へり。されば、また或時に、公、

谷かけに鬼百谷さきて首ぐなり

といふ句を仰せ給ふ時、紹巴二三遍沈吟して、「いかにも神妙の御句也」とて、懐紙にしたためければ、公紹巴が顔を御覽じ、「螢はなかりしが、百合はぐなりとせしか」と仰せ給ふ時、紹巴「宜しき例も候ふ。慈鎮和尚

まくすが原に風さわぐなり

と仰せられ候ふ」と申しければ、斜ならず興じ給ひ、「紹巴は賢きものなり」と仰せける

律義—正直

慈鎮—天台の座主、又名慈圓、歌を善くす、「拾玉葉三、物思ふ心の秋の夕まぐれ眞葛が原に風渡るなり」

蟄居—家内に籠り居る事

大徳寺—山城愛宕郡紫野、臨濟宗

とぞ。かの三井寺に蟄居の時、貞徳翁とぶらひて、終日もの語りしつゝ、

滋賀の浦や寄せ来て残る小波も春にはやがて立ちぞ返らむ

といひて別れし。その翌る春免しを蒙りて歸洛し、後逝せらる。慶長五年也。大徳寺中正受院に墓あり。

本阿彌光悦

本阿彌光悦、太虚庵、又自徳齋、徳有齋とも號す。本佐々木の家族、多賀豊後守高定の孫、片岡治大夫宗春の三男にして、本阿彌光心が養子となる。本阿彌は、刀劍の鑒定磨礪淨拭等を家業とし、これを本阿彌の三事といふ。しかるに、光悦この三事に長じ、殊にそのかたしとする所の淨拭に委し。是につきて自からの戯歌、

一ふりはらいのたぐひと思ひしがいま一ふりはめきよものなり

人の刀を相せし時白雨しける故とぞ。尤書に妙也。或時近衛三藐院殿、光悦にたづね給ふ、「今天下に能書といふは誰とかするぞ」と。光悦「先。さて次は君。次は八幡の坊也」(松花堂をさす)と。藤公「その先とは誰ぞ」と仰せ給ふに、「恐れながら私なり」と

三藐院殿—近衛信尹公の號、近衛流書風の祖

孫過庭—唐人、名は虞禮、字は過庭、草書に妙、虞世南—唐人、字は伯施、智永に習ひて妙を得、王右軍—晋の王羲之、右將軍たり、善書古今に冠たり、瀧本流—松花堂の書風

申す。此の時この三筆天下に名あり。或は粟田宮尊純法親王を算へ奉りて、四筆ともいふ。藤公以下三人も、或は法親王の御弟子といふ説もあり、實否を知らず。また或る時、藤公にはかに光悦をめしければ、何事ごとあわてて参るを、即おまへにめして、悦が手をきとらせ給ひ、「汝はく」と言もあらよかに仰せ給ふに、悦思ひよらざることなれば「御意にたがひし覺は侍らず」と、恐れく申しければ、公打笑はせ給ひ、「何としてかくはよく書くぞ」と戯れ給ふこともあり。又松華堂とともに、藤公へまゐり、夜のふくるまで、御物語申せし時、今古の書家を品評し給ひ、「孫過庭、虞世南等、ともに王右軍を學ぶといへども、その風なし。今の人は、その風を學んでその心をまなばず。その姿を真似るを書奴といふ。書奴の名を得むよりは、おのく我が好にまかせて、一家を成すべしや」と宣ふ。「二子僕等も常に思ひ侍らふ所也」とて、「あすともに書をなしておまへにして戦はしめむ」とて歸りぬ。約のごとく明くる日二子まゐり、公の御書とならべて、おのおの一風を書出せしをくらべける。今も近衛流、光悦流、瀧本流とて、世にもてはやさる。又茶を好みて、初宗且と善し。後その子宗拙父に勘當せられし時、もとより光悦が書の弟子なれば、ひそかに野間立澤（鷹峰の隠者）にあづけたるを、且聞き出でて深

くうらみ、交りをたちしはいかなる故なりけむ。また陶器を好みて焼きぬるを、今も世につたへて珍重す。凡藝のみにあらず、經濟の才もありて、鷹峰の邊に金堀るべき山を考へ、五箇所を得て、人民多くその益を蒙る。もとよりこよろばせ正しき人にてありし。その一事は七月十四日にある町家へ行きたるに、常に同じく家職をいとなみてありしかば、悦あやしみて、「けふは貴賤となく金錢の出納に閑しき日也。なぞかくつねにかはらぬぞ」といふに、あるじ「町家には利用を計るをむねとしさぶらふ。けふ與ふべきものを五日過ぎて與ふれば、何計の利を得ることさぶらふゆゑに、けふは心いそぎも侍らず」といひしに、悦こたへもせず、家の内のものどもの面をひとりくならまへて、「よき畜生めら」といひすてて出で、それよりは再び來らざりしと也。寛永年間洛北鷹峰を悦に賜はりしより、こよをひらきて、人家を設けたるに、若狭丹波の通路なる故に、往來しけくなり、此の邊に山賊などいふもの絶えたり。是より先は、かやうの悪黨かくれ住みて、人を犯す事多かりしとぞ。寛永十四年丁丑二月三日こよに終る、壽八十歳。光悦寺そはのあとなり。

因に云ふ、光悦生子なし、光瑳は養子也、その子光甫は空中齋と號し、法眼に敍す。家

錯綜する
入れかふる

上杉家―出
羽置賜郡米
澤領主、上
杉彈正大弼
仙臺侯―陸
奥の領主伊
達政宗
猩々皮―極
めて紅色の
羅紗、古く
舶來せる物
中間―侍と
小者との間
に立つ者

の三事に長すること光悦に劣らず。茶も甌べり。子十八人あり、季子は八十歳の時
まうく。天和二年壬戌七月二十四日、八十七歳にして終れり。
○萬蹊云、此の傳人のしらぬことどもあり、花頭よく聞き出せり。予一事も加ふるに
及ばず、たゞ文章の前後を錯綜するのみ。

岡野左内

岡野左内は上杉家の臣、陸奥にありて、壹萬石を領し、越後守といふ。その武功ども近世
の軍記に見ゆる中にも、はからず仙臺侯と一騎打して、猩々皮の陣羽織に二所まで劔の
跡つけしを、和睦の後、侯、「誰ぞ」と尋ねて知り給ひ、其の勇を賞し、彼の陣羽織を賜り
けるなどは、ことにいさましきものがたり也。此の人並びなき福者にてありし。或る時、
馬屋の中間に黄金壹枚もちたるものあるを聞きて呼び出し、奇特なる旨褒美して、黄金
十枚を與ふ。貧しくては武功も全くしがたきをおもふなるべし。凡いとまある時は、金
をあまた並べ、その上に臥すをたのしみとす。是をきく人は「武士の道に有るべからぬふ
るまひ也」といはぬはなかりしが、或時此のたのしみをなしるけるに、我奥の士、口論



貞宗—刀工の名

亂舞—能樂の間に一さしとて行ふ舞

を仕出したる事をしらせければ、敷きたる金はそのまよにうち置き、貞宗の太刀を帯び、鹿毛なる馬に鞭うちて走り、一日二夜の間さまよつあつかひなだめて家に歸りしが、其の間は金の事はおもひ出しもせぬけしきなりしを、つたへ聞く人はさらにおどろきたりとなむ。又軍陣に臨んでは、必能役者をまねきて、亂舞をなさしむ。つねはかつて翫ばず。人その故をとへば、「平日はたれくも好む故にけれいとまなし。軍陣のことあれば、俄にあわたどしく、そのまうけするがために、かうやうの遊びをかへりみず。おのれはつねに出陣の用意を備ふれば、いとまあり。亂舞者も亦いとまあれば、これをさせて見ることも也」といへり。すべて所行他の案外に出づる人といふべし。

子松源八

子松源八時達は、出雲の家士、射藝の師也。老いて山心と號す。爲人方正淳朴比類なし。若年の時、兄の過失に連坐せられて祿を離れ、國內大原郡に墾居し、家貧なれば、日雇して衣食を給す。その居宅の隣に、農夫茄子を種う。原八は菜を作る地なければ、これに就いて茄子を買はむとこふに、農夫「たどひとりめさむ程は日々といへども、いくば

莊官—村役人

くのことかあらむ。たゞ我がものごとく取り用ひ給へ」とて、價をうけず。是より後、源八茄子を喰はむと思ふ時は、まきて取り、價の錢をその莖に結び付けて去る。圃主所々に錢のかよれるを見てあやしみ、此の人の所爲ならむと、取集めて返せども、固く辭してうけず。又富民の家内皆他に適くことある時は、源八堅固なる人なれば、留主を託せるに、くれにおよび戸障子を引はなち、家の中央に座し、傍に弓矢を置き、八方に眼を配りて終宵睡らず。又ある時、村中莊官の妻出産せし時、源八往きて「つねく、懇意なる故に夜伽に来れり」といふ。主悦びて、「此の比夜伽に皆疲れたれば、今宵は頼み參らせて皆安眠させせむ」とて、俱に熟睡に及ぶ。源八たゞ獨り産婦の前に端坐し、通宵すこしも眼を離たず、産婦の顔を守れり。産婦夜明けて家人にいへらく「よべは源八ぬしに見詰められて、よすがら顔の置き所なかりし。此の後このぬしの夜伽は止め給はれ」といへり。此の間近隣の小民の家に醜き女ありしが、顔に似す心やさしきものにて、源八が赤貧にして獨居せるを憐み、しばく衣を洗ひ、綻を補ふ。父母禁すれどもひそかに心を盡して介抱せり。源八心に其の恩を感ずといへども終に猥雜の話を下さず。後君命により歸參する時、速に駕籠をもたせ、親往きて迎ふ。醜女も父母も大きにおどろ

きて信ぜざれども。遂に共にかへり、官に達して妻とし、終身其の醜を厭はず。偕老の契を全す。さて老にいたるまで射術怠らざるをもて、俸祿を増さる。是より以前は酒器を貯へず、茶碗にて飲みしが、此の時に及びて妻諫めて、「今は諸士と祿同じければ、酒器なくてはかなふべからず」といふ。けにもとて、市店にいたり、盃を買ひて、その大小心に慚ふを擇みて「瑕なきや」と問ふ。市人「なし」と答へたれば、頓て價を出し、盃を懐にしてかへりしを、妻熟視て、杯のうらの糸底に瑕あるを見出し、かくといへば、源八また懐にして彼所に往き、盃を返して、「何故に我を欺くぞ」といふ。市人過を謝し、値を返さむといふ時、源八「我は、欺を受くることを欲せず、故に盃を返す也。値を惜むにはあらず。汝は値を欲する故に我を欺く也。いまわれ欺をうけざれば望足る。汝も亦値を得れば望たれり。是兩ながら望足れば、何ぞ値を返すをうけむや」といひ捨ててかへる。又或時骨董舗に刀の鏝有りしを立寄りて價をとふ、婦人云く、「夫他適にて價さだかならず。二錢目とか三錢目とかいへり」とこたふ。源八懐より二錢目を出し、あたへ、又一錢目を出していふ、「夫歸りて二錢目には賣まじといはど、又是をあたへよ」といへり。凡そ人に詐はなしとして、魚菜を買ふにも價を下せといふことなし。我が

心に應ずれば買ひ、應ぜざれば買はず。久しくして商人も是を傳へ知りて、其の家にては價を二つにすることなし。其の家に使はるゝ奴婢も、其の風に化して質朴にして詐はらねば、そこに使はれしものといへば、人争ひて召し抱へたり。年八十に垂として、眼力衰へるをみることも明かならず。射る時は門人側において、「二寸上れり、三寸下れり」といへば、其の言葉に従ひて矢を放てば、必中れり。尤後には其のごとくするも中らねば、弓矢を投げて、「吾老いたり。今は君の用にも立たず。生きて益なし」と、遂に食を断ちしを、妻子門人交すもむれども食はず。其の門人に三谷半大夫といふ國老あり。是を聞きて、往いて自から粥と箸とを取りて勸むれば、源八押いたどき一口飲み、第二口に至りて吐きて云く、「吾が病、食を受けず」と。遂に食はずして歿す。

原田長兵衛

但馬豐岡侯
但馬城崎
郡豐岡の領
主京極飛驒
守背戸—裏口

原田長兵衛は、初め但馬豐岡侯の士なりしが仕を致して後、劍術をもて家産とす。爲人正直にて人の戲言もみな實とす。ある時門人いふ、「我が村中に、百歳の老人あり。其の背戸の井の傍に、枸杞の木あり。其の井の水にて手水をつかふに、其木葉の霰面

雙鑠—老健

前生の宿因
—前世の因縁

にかゝるがゆゑに、かくのごとく長壽せり」と。長兵衛是を聞きてより、井の水の廻りに枸杞を栽ゑ、その露を掬して、顔にそよぐことおこたらず。枸杞の能こそあれ、面に洒ぐは、おろかにいはれなきに似たれど、此の人も八旬に過ぎて、猶雙鑠なりき、生涯手習ふ事をつとめとす。門人等「六十の手習といふに、八十はあまりによしなきこと也。只枕を高くして樂しみ給へ」といふに、「いなさにあらず、われ手あしければ習ふなり。是はもと前生の宿因なきより拙ければ、若今生に上達せずとも、後世の縁に成りなむ。よし／＼それはともあれ、寸陰もむなしく暮すは天の恐れあり」と申されしは、たふとし。又此人若き比伊勢參宮せむとするに、あたりの人々、その謹厚をすれば、よきついでとて娘どもをわれも／＼とあづけて、まうでさせむといふ。さまざま辭すれどもせちにたのみければ、せんかたなく伴ひたるに、京にいでたる日と、伊勢の宇治山田にては、人多き間にて、はぐらしやせむと、女達の腰に繩をつけて、おのれたしかに持ちて大路を行くさま、かの美濃の長良川にて鵜をつかふにひとしかりしと、京にて見し人かたりしが、大切に守りける心づかひ思ひやられぬ。常に他郷に行く時は、妻子に暇乞の酒汲み、遺言ことごとしく心残らぬまでいひ置きて出づ。妻子もいつも涙にくれて門送りせしとなむ。武術

をたしむ人の心づかひ、殊に殊勝なり。

龍造寺平馬

郡山—添下
郡郡山

大和郡山の舊主本多侯の臣龍造寺平馬は、勇氣適人しかも慈仁あり。禪學をも好む。劍鎗の術に長じ、かつ巧思ありて常に帶ぶる所の大小刀なども、自から鍛冶し、用ふるに當るを期す。或時、夜更けてうらの方に物音するを、唯ひとり聞き付けて、枕もとにある劍を帶び、左の手に燭を捧けて戸口を引あくれば、やがて額に切付けむとするものあるを、はづして其の手をとらへ燭をもて面を見るに、もと召つかひし奴也。平馬徐々として曰く、「おのれはにくきやつかな。されどあないしらぬ所へはえ入らで、こゝへ來るならむ。はた奴が態にて我を切らむとするや。されど主に顔を見られて面目なく、せまりてのしわざならむ。いづこより入りて何ごとをかせし。もとの道へゆけ」と捉へながらあゆまするに、米倉の壁こほちて有り、うらの土堀にはひ入りたる穴あり。「よし／＼こたびはゆるす。もし他人の家へ行きたらば忽ち命を失ふべし。今より必心を改めよ。いで物取らせむ、もとの穴を出でてしばしまて」とつきはなちて、さて米倉のこほちし所よ

同家中一同
藩士

杉山檢校

杉山檢校一
杉山和一

り手をさしいれて、折ふし收納の時にて杉なりにつみたる俵の中より、二た俵引きぬきて
兩手に引さけ、堀ごしに投出し、「それもちてとく行け」といひすて、うらの戸引きたて
て入りて寐ねたるを、家の内知る人なく、夜明けて倉も堀も切りぬきたる穴あるを、若
黨下部など見付けて、あわたどしくあるじにつけたれば、うなづきてわらひて有りしと
なむ。その他の所行はしらねども、此の一事もて、其の人がらいとかくはしく覺ゆ。こ
は其の劍術の門人、同家中の浪人竹村柳園子のものがたりなりき。

大君一將軍
の尊稱綱吉

杉山檢校は遠江濱松の人也。十歳にして替者となれり。其の性豪爽にして、凡ならず。
眼は盲たりといへども、名を天下に成さむことを欲し、十七歳の時鎌倉に至り、江の島
の岩屋に入りて、斷食し祈ること三七日、丹誠比類なし。されば、満てる夜の夢に、鍼と
管とを得ると思ひて覺めたるに、その物、實に掌中にあり。いとかたじけなく、諸侯よ
りの招に應じて、病を愈すことしばく也。終に大君の召を蒙り、日々に御前に侍るに、
或日「望む事ありや」との御命有りしに、「只一つさぶらふ」よしを申す。「何事ぞ申せ」

本庄一今の
東京本所
檢校職一盲
人の高級の
官
僧録一盲人
を統轄する
官

とあれば、「日一つ下され候へ」と申すに、侍らふ人も皆大に笑ひけり。君は戲言ながら
哀におほして、本庄一つ目といふ所、一町四方賜はりて、五百石扶持し給ひ、「日一つなる
は」と興せさせ給ふ。其の後又三百石御加恩あり、檢校職に任ぜらる。今も僧録屋敷と
てあり。辨財天を勸請し、又常に觀世音を信じ、慈善を専らとし、いやしき盲人を救
ふ事多し。海内の盲者皆その恩を蒙る。京師に清聚庵の地を賜はり、これを建つる。(高
倉綾小路の南)替者一流の規矩こゝに中興せり。京にも江戸にも其の木像を安置し、永
世其の徳を仰ぐ。終れる年元祿七年甲戌六月二十六日也。子孫世々其の祿をうくとぞ。

角倉了以并自立之

光好姓は源、氏は吉田、後に角倉と稱す。小字與七といひしが、後了以と改む。(家系羅
山の作、碑文に委しければ之を略す)母は中息氏。天文二十三年甲寅に生る。天性工役
にたくみ也。慶長九甲辰歳、事により美作國にゆき、和計川の舩船を見て、百川すべて
舟を行るべしと思ひ、たどちに嵯峨にかへり、大堰川を沂り、丹波國保津にいたるに、
湍石多くして、はつかに筏のみかよへれど、猶舟すべきと知りて、翌乙巳歳其の子立之を

舩船一底淺
くして平た
き船

胡人—支那
北方の蠻人

江戸につかはし、是を乞はしむるに、「山丹二州の幸なれば、すみやかにすべし」と許し給ふ。於是十一丙午歲三月より大堰川を浚うす。先大石は轆轤索をもて之を牽く。水中にあるは、其の上高く足代をかまへ、鐵槌の頭尖りて、長さめぐり各三尺、柄の長さ二丈あまりなるに、あまたの索を結び付け、數十人して其の槌を引あけて、直に落せば、巖石ことごとく碎けぬ。あるは、水より出でたるは、其の石の上にて大かどりを焼きて之を碎く。あるは河廣くして水浅き所は、石を帖みて水を深くし、又瀑などあれば、上をうがちて平らかにしつ、からうじて、八月に至りて、またくなれり。かよりし後、今に至るまで、丹波世喜村より、嵯峨に舟かよひて、五穀鹽鐵材石など有無を通じて、民大に利を得るとなむ。十二年の春又命を奉じて、駿河の國富士川を浚ふ。此の川もとも嶮しき流なれども、駿河の岩淵より、甲斐の國に船通ふこととはなりぬ。よりて其の邊の人々、舳を見てあやしみかつ驚きていふ、「魚ならずしてよく水を行く」と。かの胡人の舟を知らざるに似たり。又十三年「信濃國天龍川をさらへて、諏訪より遠江の國掛塚迄舟すべし」と命じ給ふ。則奇工をつくせども、きはめて峻流なれば、ふね用ひがたしとぞ。此の年洛東大佛殿造立あり、大木巨石を運ぶに甚なやめりしかば、了以又乞うて伏見の里よ

大悲閣—山
城葛野郡嵐山

り、河に循うて運送す。元來伏見の土地、大佛の基よりひききこと六丈なりとて、その道すがら高き所をうがちて、ひきき所に堤をつき、又河のめぐれる所は轆轤索をもて是を引きなどせしかば、不日にして木石ことごとく達せり。見る人みなあやしまざるはなかりしとなむ。十六年又官に乞うて鴨川に船を通す。今の高瀬川是也。十九年先にさらへし富士川壅りて、船のかよひなやめりしかば、了以を召し給ふに、了以たましく病に罹れりしかば、息立之をして行かしむ。三月より役を初めて七月に成る。時に了以病急なりと聞きて、とみにかへり來るに、いまだ京にいらざるの前二日に歿せり。慶長十九年甲寅七月十二日也。享年六十一歳。このとしの夏、嵐山に大悲閣を建立す。死に臨む時遺言すらく、「我が肖像を作りて大悲閣の側に置き、巨綱をあみて座とし、梨を杖として石誌を建てよ」と。後その遺教に隨ひ、碑文を羅山林氏に乞うて建つ。その詞に曰はく、

排巨川兮舟楫通、浮鴨水兮梁如虹、矧復鑿富士河兮石成功、慕其賜立圭兮笑彼化黃熊、嵐山之上兮名不朽而無窮

寛永六年冬十一月日

此の一條、羅山林先生の碑文のうち一二をとりて譯せし也。猶かの碣誌に委し。往いて見るべし。

因に云ふ、息立之、一の名は貞順、通稱與一郎、後號素庵。惺窩先生に従ひ、文學に長ぜり。常に深衣を著して、儒書を講ぜりとなむ。羅山氏と交りふかく、かつ羅山氏惺窩先生にまみえしも、此の人の紹介なりとぞ。

能 順

能順は洛北野の宮仕也。連歌に長じ、世に獨歩す。

貞享帝召して、連歌の點せしめ給ひ、御感ふかく、ありあふ御硯を賜はる。その時に奉る句、

けさしるや筆のうみより春の水

その後加賀の太守の招に應じ、小松梅林院といふ所に住めり。その比ばせを桃青の行脚に、

秋風は薄吹きしくゆふべかな

北野—京都
上京、北野
神社
貞享帝—後
西院天皇
加賀の太守
—前田侯

といふ能順の句を慕ひ、たづねられしことあり。行狀聯句集にみの。寶永三年丙戌十一月二十八日、七十九にして終れり。

村 上 等 銓

村上等銓は、平安三條油小路に世々醫を以て業とす。十六歳にして専ら行はる。廿二歳にして、

法眼—法印
に次ぐ僧位
徳川時代の
醫は僧體に
して随つて
僧官に任ぜ
られし也
廣島侯—淺
野侯
薩摩侯—島
津侯
馬かけ—競
馬

東山院の皇子の御急症に功を奏し、俄に法眼を賜ふ。後法印に敘し、春臺院の三字の宸翰を賜ふ。又御製を下さる。其の庭に松樹ありと聞し召し、松によする祝といふ題とぞ。思孝幼年にして其の御製を拜せしが忘れたり。其の松即御製の松とよびて、能く繁茂せしが、家絶えたるころ、いかどなりしや知らず。此の法印性大膽にして、しかも貪らず。或時廣島侯の不例を治し、其のかへさに面白き石どもあまた船につみて來りしが、いかど思ひけむ、備前の沖にして皆海に投げ捨てつ。又薩摩侯の醫療せし時も、驗ありて、褒美望みに任すべきよし御内意ありしに、法印暫く思惟して、御國の馬かけを所望しければ、「けしがる望也。金をも扶持をも望みてむとおほせしに」と、重ねて其の旨を

傳へられけれど、望ましからぬ由を申しければ、一日大變をたまひ、馬かけを見せ給ふ。生涯のあらましすべてかくのごとし。醫術の筆記若干ありしが、晩年おもふ所有りとして、皆焼きすてつ。その餘奇事多かれど失せり。

蕭蹊云、おのれ幼年の時、吾が家へもむかへて女弟が瘵にあづかりしが、是は露ばかり驗なくて身まかれり、予幼なく、其の行状ははつかも聞き知る事なし。唯耳疎き老人とのみおぼゆ。亞科には其の比山科家と共に名ありし人なり。

三輪執齋

三輪希賢字は善藏、即常の稱とす。號は執齋又躬耕廬ともいふ。洛北加茂に住み、又浪華江戸などにも子息の縁によりて居れり。はじめは朱學にて、後陽明良知の學を唱ふ。爲人柔和謙遜にして、道を任とす。其の徳周く聞え、京兆の尹某の候みづからおはして三度請ひ給ひ、訴を聞き給ふ陰にをらしめて、其の理の當否を問ひ給ふ。又酒井侯に報ぜし書、親切著明なる中、人主又學者の病にあたる所、こよに舉す。今聖賢の心術を學ばずして、其のなせる事業をのみ見て、事々物々にて是を尋ね究め、

京兆尹一京
都町奉行
酒井侯一上
野廐橋領主

案排措置し
一種々工夫
を弄し
一意必固我
論語子罕篇
に無意無必
無固無我の
句あり聖人
の心明白に
して私累な
きを云ふ

智を盡せりとおもひ、其のしれる所をまね行ひて、よく是を行ふと思ふ。これみづからは聖學なりと思ふらめど、則覇者のしわざなり。能くしり行ふといへども、天道にあらず。又義襲ひて是をとるのみ。夫既に此の心法なくして、知をきはめむとて、事々物々にて道理を尋ぬるは、闇夜にともし火なくして物を探るがごとし。しれる所似たりといへども、終に自得の學にあらずして、却て人我の隔出で來り、人欲の私勢ひを得、案排措置して、意必固我をなすゆゑに、物學ぶ諸生は、大やう常人よりおとり、是を教ふる師は、諸生より又ひがめる方多し。如何となれば、三欲の大敵（三欲とは此の前條に云、人欲動いて本心を害する亦其の品多し。中にも大敵となれる巨魁三つ有り、色欲利欲名聞なり）を去らずして知る所多ければ、其の知る所己が欲を助けて、みづから高ぶり、人を輕しむ。行ふ所人にまされるものあれば、その行ふ所またおのが欲をたすけて、自ら高ぶり人をかるしむ。たとへば食は民命をすくひて一日も是なければ死すといへども、食に傷れし人、其の食毒をさり、傷れを補はずしてこれに食をすむれば、かへりて病を助けて民命まさに盡きむとするがごとし。（下略）

其の學風、心術の大體を見るべし。著述の書は、易手記二冊、日用心法一冊、堯典和釋一冊、四言教解一冊、傳習錄解三冊、雜著四冊、救佛法一冊、以上皆寫本にて世にしろ人跡きを、老儒福井氏かたぐいにもとめて藏せらる。此の外にありやしらす。又和歌を好まる。凡儒生の間には是ほどに歌よむ人はまれなるべし。雜著の中、四言教の歌あり。ことがきは略之。(四言教は陽明先生の説也)

無善無惡心之體

ひく舟も何かさはらむよしもなくあしもなにはの水の心に

有善有惡意之動

そことなく戦ぐ難波の浦風によしあしのはや亂れそむらむ

知善知惡是良知

よしあしのかげはまがはじ難波江や底澄みわたる水の鏡に

爲善去惡是格物

よしをとりあしを刈りなば節の間に迷ふ難波の夢も醒まし

以上は、なにはの菅氏によりておくり給ふ所とぞ。此の外うたども多し。中に初春のうた、

ほのほのと朱の玉垣うちかすみ其のかみ山に春は來にけり

「此のほのくの初五は、避くべきものを」と、或卿難じ給ひしかば、「されば避けなむと存じ侍へど、他に置くべき詞を得ず」と申されしかば、其卿いろくにかへて見たまへど、けにも詞なければ、「さはくるしからじ」とのたうびしとぞ。

○蒲蹊云、此の初五を避くるは近世の事歟、「ほのく」とあかしのうらのうたを憚るとなり。されども其の後此の初五の歌いくらといふかぎりをしらす。

又ある時、

三つ輪ぐむ老が住家を」とと知れ隠ししるしの杉はなくとも

三輪の氏によりて、家の紋も三つの鳥井の形也。それを老の姿にとりなされたるも興あり。建仁寺中兩足院に先人の墓あれば、七十一の時、みづからの墓をも築き、自筆にて其の石のうらに書き付けられし。

先塋の後に、予が終の住所營みけるに、幸に杉の二本ありけるも、たどならず覺えければ、

たらちねに返すの身をおきつきのしるしとぞ見る杉の二本

三つ輪ぐむ
—老人の齒
の脱けて復
小きき齒を
生ずる事に
て、假名は
「みつはく
む」なるを
三つ輪に言
ひ掛けたり
建仁寺—京
都下京にあ
り、臨濟宗、
先塋—祖先
の墓

契りおく魂のありかをこよと見よ骸はいづくの土となるとも

元文四年冬

希賢七十一歳書

後五年を経て、寛保四年甲子正月二十五日に歿す、享年七十六也。子息は四五人ありしを、大かた異姓を嗣がしむ。蒿蹊按ずるに、雜著中、養子の辯を辨ずるといふ假名書の書ありて、一己の見識をあらはさる。吾が子に他家を嗣がしむるもこれなるべし。(養子辯は、ある儒生著す所にして、他姓を嗣ぐ事をにくむ。それを又辨せられたるが、此の翁の見所なり)

○因に記す、此の翁高貴の御方々へもしたしく参られしよし。久しく關東にありてのほりて後、南都 一乘院宮へまゐられし時、賜はりし御歌

ふじの雪都の花のめうつしはさぞなはえなきならの古さと

御返し奉られしが、それはわすれたりと或人かたりぬ。

松岡 恕庵 附 稻若水

垂加の神道
山崎闇齋
の創めたる
神道

恕庵松岡氏 名は玄達、字は成章、怡顔齋と號す。垂加の神道を學びては、眞鈴潮翁と

もいふ。平安の人、其の先は尾張名古屋に出づ。淺井圖南子いふ、恕庵先生はもと本艸者にあらず、儒家たれども、詩經の名物を困しむ、稻若水にしたがひて、本艸を三遍見給ひしが、大方諳記して、同じ比後藤常之進などいへる本艸者あれども、其の右に出でたり。故に人しきりに本艸をとひ、終に本業となりしかども、其の志にあらざとぞ。博覽好古儉素淳樸の人なること人の知る所也。今其の眞率なる二三條を擧ぐ。大きな倉を二つたて、一つには漢の書、一つには國書を藏められし程の事なれども、火桶は深草のすやきを紙にてはり用ひられし。又男善吾(名は典字は子勅、號復眞)幼年より絹のたぐひを著せず、袴も夏冬となく麻にて有りければ、門人たち「あまり見苦し」とてよろしき袴を送りければ、先生是を見て「われ仁齋先生の講席に出でし時、東涯いまだ幼くして先生の側にあられしが、白き木綿の布子白き木綿の袴也。是を思へば、善吾は染色衣たるは奢り也」とて、かのよき袴は著せ給はざりけるとぞ。又ある日奴僕を呼びて、蠟燭の屑をえり出して、「是は某、これは誰に取らせよ」と分ち、すこしかたちあるを皆残し置かれけるを、かたはらの人「今奴に蠟燭の屑を賜ひしは何事に候や」と問ふ。先生「鬢つけの爲也」と答へらる。又南天の木のととき幹を取出し、人を呼びて、「是はよ

國禁—國法
上の禁制

き南天なれば、かんざしにけづりて娘どもにとらせよ」と命ず。同じ比、白銀の調度國禁となりし時、世間銀の細工物をあつめ、官に捧げしが、其の後又年を経て、しきりに白銀のかんざしをさしたる比、女達の頭を先生見て、「先年銀は國禁なりしに、などは是をさすぞ」と仰せければ、娘たちかへすことばなく、「是は銀にてはなし、箔おしてこしらへしものなり」と答へければ、「さはよき細工よな」とて濟みけるとぞ。又ある年の春、書生おほく具して、花見に行かれける途中、瓦もて船のかたちをつくり、やねのうへに猿のすわりたる花生に、小艸の花をいれたる賣りものあり。先生是をめでて、書生に買はせ、僕にもたせてゆく、一町餘りにしては、とりて見らるゝ事度々にて、「此の猿はよく造りたる」など餘念なかりけるが、僕がもちたる間、ゆく人の袖にかよりて打わりければ、書生等心してあとへかへして、さらにもとめさせけるが、此のたびはもとのことくなるものなくて、やねのしたに猿のゐるをもとめ來りける。先生又下部が手よりとりて見給ひ、「こはいかに、いままで猿はやねの上に居たるに、是はたがひたり」とあるを、書生等下部の叱られむことをいとひて、「いなちがひたることは侍らず」とつよくいひければ、「さにや」とて、又前のごとく愛し給ふとぞ。是等もてその人となりを知るべし。



○蒿蹊云、銀の筭も猿のちがひしも、先生しられざるにはあらじ。欺きをうけて容るゝは長者の意ならむ。

○蒿蹊云、或時云々以下三熊生が書ける儘なるを、後に新安手簡をもて正せる所、台命にて詩經を進講し、圖をなし、木下へ助力を頼まれしも、皆白石先生也。是に付きて知りがたき事は、木下の媒にて若水へ尋ねられ、江戸になき物、或は唐物なども、京より下され、考なども添へられし事毎々なりしと手簡に見ゆ。三熊いかに見たがへて、かくしるしげむ。予が校正の足らざるも、亦罪さり所なくこそ。

因に云ふ、稻生若水、名は宣義字は彰信、江戸の人なり。若水を通名とせしかども頭は月代あり、しかも被風を著し、兩刀を帯びたれば、人皆あやしむ。或る時、台命ありて詩經を講ぜし時、草木鳥獸の筆におよぶほどは圖して獻す。其の比木下順庵も力をあはせられけるとかや。すべて産物を見ること、別才ありて、他の及ぶ所にあらず。加賀の太守より、祿三百石を給ふ。庶物類纂といふ書千巻を撰み、原本副本ともに自筆にて書かる。原本はいま官府にあり、副本は加賀にあるよし。惜むらくはいまだ五旬に満たずして逝す。白石先生も交り善かりしかば、およそ五旬な

らずして、千巻の書を編む人、古今例を聞かずと歎美有りしとぞ。(蒿蹊按、新安手簡に其の説委し)此の餘著す所、結髦居別集、炮灸全書等世に残れり。

三宅石庵

石庵、三宅氏、名は正名、字は實父、萬年と號す、平安の人なり。寛文五年正月十九日に生まる。兄弟六人ありしが中に、弟觀瀾(名は緝明、字俸陽、俗稱九十郎)と、此の老殊に學を好む。爲人沈靜儉簡にして、英敏勇決。稍長じて家産敗亡し、宿債を返して残る金十片有り。先生弟子に對していふ、「残る所纔也といへども、又學を爲るに足る」と。兄弟案を並べて寢食を忘る。しかもいくほどなく十片の金盡きたりしかば、兄弟手を携へて東都に遊ぶ。又おもふ所有りて、弟觀瀾を残して自は京に歸れり。さるに其の比讚岐に木邑某といふ人、其の名を慕ひて來り、勤めて國に作ひしかば、かしこに容居する事四年、其の後復浪花に來りて住み、學風大に行はれ、その聲海内に噪しく、門弟子日に月に盛なりしかば、學生等浪花に學場を設けむことをはかり、關東へ訴へしに、先生の名もとより台聞に達しければ、即其の名をさして學場の地を賜ふ。爰に於て先

不重則不威
論語の語
布衣無位
無官の者

生を招請すといへども、固辭していはく、「君子不重則不威。われは布衣の賤夫也。如
何ぞ棟梁たらむ」と。門弟子等いふ、「然らば先生の節儉を學ぶまじや。棟梁の教授誰か
染まざらむ。布衣を著て棟梁たらば、其の徳いよ／＼高かるべし。化育の益大ならむ一
と、度々言を盡して勸むるに、辭することを得ず舉に應ず。しかも纒に三年にして、享
保十五年七月十六日病に罹りて歿す、行年六十六。河内神光寺に葬る。生涯布衣より外
は衣す。書は遁勁正鋒にして妙也。故に今に至りても、人其の隻字を得て至寶とすれど
も、印信を用ふることなし、凡て質素を守る故也。詩文はもとより國歌俳諧をも嗜まれ
しが、皆意とせず。門に来るものには、只人道の理を責め、教學の趣を述べて、更に
他言をまじへず。婦人は岡田氏にして、二男二女を産す。長文太郎、二女ともに先生に
先だちて歿す。末子才二郎、名は正誼、父の志を繼ぎ業を受けて讀書堂を守る。(今の今
橋の學場なり) 觀瀾の弟惣十郎維祺號佩章も、東都に遊び、水戸侯に仕へて早世すとぞ。

桑原爲溪

名は守雌、桑原氏、爲溪は字にして通稱とす。號は空洞、浪華の人にて瓶花の家也。爲

八分一隸書
の一體
三論一佛教
八宗の一、
中論、百論、
十二門論を
所依とする
者
光琳一緒方
光琳、有名
の畫家
貪著一物に
心を惹かさ
る

宇都宮由的
一遜庵、周
防國吉川氏
の儒者
仁正寺侯一
近江蒲生郡

人清廉隱操有り。篆隸八分の諸體を極む。初め鈴木正直(儀左衛門、臨池堂と號す)に學ぶ
といへども、自から一家を成し、一時に鳴る。字學委し。三論を持し、老莊を主とす。
生涯妻を蓄へず子なし。心を方外に遊ばしめ、洛西泉谷の山中に庵を結びて、時々行き
て獨樂す。又仁和寺御門前光琳が建てし家にも住めりき。(此の家頗る風流にて、蓮池に禪
堂などもあり、光琳自畫の障子も有りしが、後やと荒れたり) 遊山翫水の癖、尋常にす
ぎ、はた平生移居を好み、洛中も所々にすめり。久しく居れば、近隣の人にも馴れて貪
著の思を生ずるをいとふとぞ。

下村道瑞

道瑞下村氏、號泰宇、周防の産とやらむ。少年より京師に遊びて、醫は北尾保安に學び、
文學は宇都宮由的に問ふ。學なりて近江仁正寺侯に仕ふ。後致仕同國八幡に棲遲し、老
を養ふ。常に枸杞を制して茶に代へ、「保養これにしくものなし」といへり。保養の故に
や、心身健にて、九十五六まで生存せり。療治も一風あり、病人旦夕にせまるといへど
も、くすりなしとはいはず、「療治は療治也、死は死也」といへり。すべて、氣象強き人

仁正寺領主
市橋家
雙聲——同一
母字に歸す
る反切法、
靈歴切歴の
類
疊韻——同一
韻字に出づ
る反切法、
掌兩切、掌
の類
八病——平頭、
上尾、蜂腰、
鶴膝、大韻、
小韻、正紐、
傍紐
口氣——言ひ
ぶり

にて、自のたてたるむねを變ぜず。故に世の學生に交ることを好まず。他は小兒のごとくおもへり。其の主とする所、詩文の音律にて、一生古今の詩に、雙聲、疊韻を改め、系を引くを所作とし、遂に詩家音律といふ書を著す。是は梁の沉約が八病を主として、「古の詩文には皆此の法あり。沉約以前も聖賢の語には自然に音響節奏あり。沉約も亦これにより。八病は詩に此の病を避くべしといふことにはあらず。八つのむづかしきことありといふ意にて、堯舜も其れ猶病焉の病の字のごとし。其の法は雙聲疊韻偏になる時は音響とよのはず、奇偶相應じて、聲律に愜ふ。凡雙聲疊韻を急に用ひたるは調急に、緩く用ひたるは調緩し。緩急の拍子相交り、唇、舌、牙、齒、喉の五音、平、上、去、入の四聲織り成して、自から文采をなし、限なき響あり。もし唯同祖の字をつらね、唇舌等の音を専ら用ふれば、吃語となりて節奏なし。反切はもとより聖賢の言語、詩賦の雙聲疊韻等の節奏の爲めなれば、是によりて溯れば、數千年前の聖賢の語勢口氣、宛然としてみゆ。此の法によらざれば、門外にありて門内を推計るものにして、風調を論ずるに由なし。又樂府歌曲の類は、かの國にても作者の意にまかせて作れば、音律に背くによりて、倚聲填字といひて、其の調に愜ふべき聲の限り空圏を作り、其の聲によりて文

李于鱗——名は攀龍、明の歴城の人、詩文に名あり
王元美——名は世貞、鳳洲と號す、明の太倉の人、有名な學者
菅江諸家——菅原、大江の二家、咫尺なれども——近けれども

字を填むる也。總じて、詞の正しきをもて、其の心の正しきを可し知なれば、節奏なきは君子の辭にあらす。など、詩書を初め經書に系を引き、雙聲疊韻を註し、詩も歷代を掲げて下李于鱗、王元美におよぶ。其の圖甚煩しければこよには省く。「皇朝にても、昔は此の法正しく、菅江、諸家皆此の法によらる。三百年前薩摩の僧文之等も（四書に文之點といふものあり）詩文猶是を用ふ。近世唯近體の詩に平仄を用ふるのみにして、此の法を廢していはざれば、知る人なし」など委しくこれを筆し、常の言語にも説きて大息せらる。蕭蹊少壯の日、此の老の居に咫尺なれども、唯文華にのみ意馳せて、かゝる緻密の法は聞くにも倦み學ばざりしを、老來さらに遺書を見て、頗る後悔の想を生じぬ。この書其の藏板にして、世にあまねからず。此の老歿して又いふ人なければ、纔にこよに其の論を擧げて、彼の思を世にしらしめむとおもへり。

詩家音律凡例小引

八病在五字内ニ謂ニ之急、在十字内ニ謂ニ之緩、緩急之度謂ニ之節奏、節奏也者、其作詩之本歟。豈嘗詩已ニ凡百散文儻文亦皆雙聲疊韻也耳。而今吾邑之士。絶無講求雙聲疊韻者。余甚惜焉。故著茲編并凡例云。

泰字 下村道瑞謹識

沉約が八病も出されしまよにこよに擧す。

平頭 上句第一二字與下句一二字同聲。

蜂腰 第二字不得與第五字同聲。

上尾 第五字與十字同聲。如青青河畔柳。鬱鬱園中柳。是也。

鶴膝 第五字不得與第十五字同聲。

大韻 如聲鳴爲韻。上九字不得用驚頑平榮字。

小韻 除本韻一字外。九字不得兩字同韻。如遙條同韻也。

正紐 詩病有正紐傍紐。謂十字內兩字雙聲爲正紐。

傍紐 若不共一紐而有雙聲爲傍紐。如流六爲正紐。流柳爲傍紐。

奥田三角

古稀一齡七十歲

伊勢の儒官、奥田三角、名は士亨、字は喜甫、蘭汀と號す。又後古稀の齡に及んで、公より南山の號を賜ふ。三角は亭の名にして、退隱の後俗稱に用ふ。小字宗四郎、後清

上足一高弟

享保乙卯二十一年

十郎といふ。其の先、越前豊原より出でて伊勢に來り、榑田川の邊に家す。故に其の所を直に豊原と稱し、累世土著の一家也。翁幼より學を好み、同國宇治にあそび、表叔蕪洲（山崎家の門人）に寄食し、ものよみすること三四年、蕪洲告げていふ、「學者正に天下第一等の人について學ぶべし。今京師に伊藤東涯あり、世に得がたき人とはこれらの人をいふべし。汝往いて學ぶべし」と。こよにおいて、十九にして西上し、堀川の塾にあること十餘年、諸門生おして上足とす。且つ講説に長じられしかば、師もこれを許し、屢代講を命ぜられぬ。二十二にして名物六帖を校して深く師の意に叶ふ。然りしより後編述必専ら任せらるゝとぞ。二十九にして藤堂家の學職に擧げられ、職にある事五十年、四君に歴仕し、優待他に殊に、退隱の後も寵遇甚しく、呼ぶに先生をもてし、名を呼び給はざるに至る。性剛介にして物に屈せず。然も家に在りて父母に順に、兄弟に睦まじく、他に接するに信厚也。凡三年の喪は、久しく廢絶し、學士といへども勉得ることかたきを、先生享保乙卯のとし父の喪にあひ、翌年又師東涯をうしなひ、心喪を合せ通じて四年、かたく喪をつとめられしなど、其の節操を見るべきもの也。經學に力を用ひられしは論なし。博聞強記もまた人の知る所にして、詩又一家の體をなすといへども、し

推敲一字句の鍛煉

八句一十歳

蛇足一不用の者を更に附け加ふる事細楷一小字の楷書易篋一死去

ひて推敲を用ひず、人の需に應じて立どころに成す。文章におきては多年心をとどめて専ら簡約を貴び、一篇苟もせず。詩文章ともに三角集に具す。識者鑑別すべし。終身抄書をつとめ、八句に及んで猶倦まず。著述はつとめられざりしかども、猶數部ありしが、皆一時の戲作にして、經義に及ばず。門生あるひは經書の注述を乞へば、「先師の遺書盡せり。我が輩蛇足すべきにあらず」とこたふ。又書を能くして、乞ふ者あれば欣然數十幅を拂うて厭はず。最も細楷によし。年古稀に過ぎて、なほ蠅頭字を作るに眼鏡を用ひず。はた文事のいとま、武事をも好み、弓馬の道拙からず。終身心を用ひられしとぞ。(三角亭の記。試馬場のまうけあるにても知るべし)七十七にして壽碇を作り、自から其の銘を撰む。身後或は溢美の言あらむをおそるとなり。易篋年八十一。豊原枕山先塋の側、あらかじめ建る所の墓碇の下に葬ると云ふ。蒿蹊少年より其の名聲を聞き、又近比三角集を見て、ますく醇儒にして、風流なるを知る。ゆゑに自撰の墓銘したはしく、伊勢に乞ひしかば、彼の門生野村氏はを寫し、かつ親しく見聞する所を録してよせられしにあひ、此の傳をあらはし、三角亭記に墓銘をあはせて左に掲ぐ。

三角亭記

余嘗於後圃中開試馬場、長不及五十弓、廣僅可旋馬。傍植花卉、外鑿芙蓉溝、內築小堤、偶記俞退翁三角亭詩曰、「春無四面花、夜缺一簷雨、同話錄、花爲韻。作余仁廓、余愛其句、深服其意、凡天下之花無四時、無五色、雖有、躑躅紫燕、稱四季、歲中三開耳、余家五色梅分淺深紅、足數、何索墨梅、何貪四面、竊思三角之爲物、則方之半矣、缺盈之戒、無以加焉、因欲微之、構亭於西北隅、庶乎不妨旋馬焉。志未果、客歲病、眼折、足不堪、騎乘、遂放馬、徹調馬埒、鋤爲菜圃、今茲春晚、有人告曰、「有廠材、價不滿一貫文、蓋安堤上也」余心搖焉、召一老僕謀之、僉曰、「不用、請倍其價、可辨矣、日亭午、此去神山幾里、春水方漲、編筏乘流、二人而足」余從之、薄暮果致、杉材十餘根、於門下、明日召匠構之、曰、「務存斧鋸痕、謹勿施輦斲、不日成之」又翌日、蕘茅、至三日、落之、時三月十二日也、揭篷窻子、扁忽官書至、飯于亭、歸于府、他日心常在、此亭、七月之望、歸鄉坐臥亭中、仰看青山、俯觀紅蕖、始償平生、因爲之記云。

(此の後凡百の器玩三角のものを愛し、文庫すら三角に造られしに至る。一奇事なり)

之三角亭詩

桑瓠一男子
誤桑瓠は桑瓠

桑瓠空負四方志。三角亭中夢亦奇。忽怪蟲聲開一面。深歡月影照多時。人間交際重謙損。天道循環警滿虧。窻自不妨八風至。牀頭長掛退翁詩。

又

三角亭中獨煎茶。人言封閉縮如蝸。直方難處下流地。圓轉何停峻阪沙。有水有山常可月。無冬無夏永觀花。比年患眼偏嫌白。藍紙粘窻同碧紗。

壽碣銘

奥田士亨字嘉甫。號蘭汀。亭曰三角。南山谷稀所賜。號也。小字宗四。宜休大人季。爲伯龍溪嗣。服嫂堀口氏喪。十四遊學宇治。十九上京。師事東涯先生。十一年。二十一命校名物六帖。深叶師意。爾後編述必專任焉。二十九擢津府。賜十口俸。戊午加五口。甲戌蒙命校明史。半年。旬豆竣功。癸未領百二十五。庚寅東下。留柳邸。九月。壬辰班掌鎖右。褒學術也。甲午轉中廳。賞著書萬卷與家丁卅員器械也。丙申告老。尙賜退俸十口。隔日入侍。或至夜分。所賜書畫。扇巾。衣裳。至襦帶。山積不止。等身矣。今茲己亥。不幸會嫡士元喪。忝蒙兩公存問。仍有花養賜。臣庶之家。未之前聞也。時歲七十七。先孀土井氏一男。次曰正準。冒岡部。三女

十口俸十人ぶち

長配姪士弘。餘天。後婿細江氏。一男曰敘典。冒吉村。內外孫十四人。歸孫七人。五十年來門生踰八百。今存百數。身後恐或溢美。自撰壽碣銘曰。起于田間。升中廳直。何以得之。稽古之力。

加々美櫻塙

加々美信濃守源光章。櫻塙と號す。甲斐國山梨郡山王權現の神職也。人となり溫柔恭敬にして、博學多聞、國學はさら也。儒、佛、道家、音律、有識、天學、曆、算等の書にも亘れり。和歌は風竹亭の翁に學び、文學は三宅尙齋に問ふ。初め家貧にして油なし。線香を燻らし、その光をたのみ書をよむ。學成りて後、隣國凡十箇國より門に遊ぶ者多し。神學指要をあらはし。世に行はる。餘は稿を脱せず。世壽七十四にして卒す。平生一言を交ふる者皆服せざるはなし。こよに話一二條を舉げてその人をしらしむ。此の門に山縣某といへるものあり。もと甲斐の産にて學成りて後東都に徘徊し、儒を唱ふ。然るに、其の學術よからず、國禁に觸るよを以てとらはれ、終に刑せらる。是に坐して此翁もおほやけの疑ひをうけ、廳へめし給ふことありしが、いくほどなくて本國にかへる

山縣某—山縣大貳

孔夫子云々
一孔子楚に
ゆかんとせ
し途中陳蔡
の二國兵を
出して之を
とどめし
淨衣一白き
狩衣
中臣の祓一
大祓の祝詞

を、知己の者酒肴を齎し來りて、恙なきを祝ひ宴を設く。酒闌なる時戯れて云、「翁の關東へめしにあひ給ふころも、さして恐るよさまなく、又けふこと故なく本國にかへり給ひても喜べる色なし。如何」といひしかば、笑ひて、「我もと犯せる罪なし。しかれども、孔夫子すら陳蔡の厄あり。ましてわれらごときにおいてをや。もとより無實のことなれば、などか解けざらむとおもひしかば、とけてもまた今更に悦ぶべきにあらず」といふ。又此のあたり近き所に桶屋あり。其のあるじ神道を學び、淨衣を著烏帽子を引いて、朝夕中臣の祓をよみ、幣とりてぬかづく。或時來りて神道の事を聞く。翁曰く、「神道は神職祝子すら守ることあたはず。まして家業桶屋なればなほさら也。元神道は天子の治め給ふ道をいふ。其の外に道有るにあらず。桶屋の神道は正直銘をむねとして家業をつとめ、父母に孝を盡し、朝夕先祖の位牌を祭り、己己が宗旨により、神をも佛をもたどうやまふにしくはなし。汝がごとき身の淨衣を著し、祓をよむこと、かつはおそれ多し。けふより改むべし」とをしふ。桶屋も其のことわりに服し、從來の行をかへ、兩親につかへて孝をなし、神をぬかづくのみならず、念佛をもまうしけるとぞ。また一書生來りていふ、「おのれ今度諸侯の召に應じて醫官に命ぜられ、祿を賜はりて、東武に

禰宜一神官

ゆく、可悦事ながら、もと神官の家に生れながら、髪を切りて僧形たらむこと本意ならず、口をしければ辭し奉らむや。いかゞ」と問ふ。翁曰く「汝禰宜の家に生るといへど三男也。故に家事にあづからず、醫を業とするは父の命也。今諸侯に出仕して僧形となるも、先祖を恥しむるにあらず、出仕の譽莫大なり。當時皇家すら皇子を出家せしめ給ふ例あり。然れば道に背ける道理もなし。心一決して出でられよ」と。爰においてころよく出仕せしとぞ。又ある時書生等集まりて、唐山と我が邦との是非と、文物の多少を論じ、すでに高聲にいひ募りければ、曰く、「我が邦はもとことばの國なり。文字にうときは理也。其の上文武に配すれば我邦は武國也。陰陽に配すれば我が邦は陽也。陽は形なきを尊ぶゆゑに、草木の花うるはしく咲けり。唐山は陰也。陰は形をとどむる故に、艸木實をよく結ぶ。陰の徳故に文物も亦多し。是文國のしるし也」と判ず。其の餘話多けれども省きぬ。思孝又其の詩歌を多く聞きしかど、皆遺失せり。其の中に歌一首記憶したるをしるす。

五月の晦日に身延山にまうづる人をおくる

雨にきるみのぶの山に長るすなけふ五月雨の空もはるるを

一 祚梨 一

越前丸岡侯
井郡丸岡領
主、有馬家
不羈にして
物に束縛
せられずし

奥の細道
松尾桃青が
東北旅行の
日記

一祚梨一は江戸の人也。性廉にして家乏しく、書のみ多し。凡そ世の人事を省き、外の聞見をいとはず、隠操ある人なり。越前丸岡侯聞し召して、使者をつかはされけれど、固辭してうけず。使者謀りていふ、「一つのあばら有り、それを賜ふべし、又何程の祿を充て行はるべし、しかれどもかつて勤仕の勞をおほせず、たゞ今迄の姿にてあらしむべしとの御事也」と。こよにして丸岡に下りぬ。もとより儒者に用ひ給ふ御心なれば、折々はもの問ひ給ふことあり。しかれども、一度も出仕といふことはなく、五年過ごしければ、今はとて、侯、梨一に儒書の講談を命じ給ふ。「おのれも幾とせか恩を蒙りしことなれば、辭するに忍びず、命に應ぜむとす。されど、脇ざしのみにて刀は今になし、いかどせむ」といふ。「それこそ安きこと」とて、其の使者の士より佩刀を贈りけり。不羈にして洒落なることすべて此の類なり。かゝる意より俳諧を好みて人にもしらる。もとの水といふ著書あり。又ばせをの奥の細道を註したるもあり。俳諧にて交りし洛の蝶夢法師、伊賀の桐雨といへるとともに、梨一が所をとひしことありしに、丸岡のそこく



俵物―米を
入れたる俵

と聞きて、其のあたりに行きしが、家もまばらにて、人にとふべくもあらぬ所に、築地の崩れて、犬の通ふ穴明きし家有り。其の穴より覗き見れば、庭はえもしれぬ草木繁りて、人けもありやしやおもふばかりなるに、俵物など多く積みたれば、是さだめて梨一が家たるべしと、つと入りて案内を乞ひしに、はたしてそなりけり。ある時、越前の兵庫といふ所の代官になり、(閑田子云、出勤だにもせぬ人の代官になりしとはいふかし。あるひは止む事をえぬ事ありて、しばらく君命に應じけるにやたづぬべし) 秋收を聞くことありしが、其の正直無欲なることを、百姓大きに感じて、梨一明神と唱へて、其の眞影を崇め、秋ごには祭れりとぞ。

百井塘雨

百井塘雨は、通名左右二、京師の人也。其の兄は室川の豪富萬屋といへるが家長をしてありけるによりて、おもへらく、商家とならば、此のごとく富むべし。然れもど、およぶべからねば、及ばぬことを求めむより、我が欲する名山勝槩をたのしむにしくはなしとて、金三十片を携へ、西は薩摩、日向、東は奥羽外が濱のはてまでを窮む。其の記事ありと

いへども、稿を脱せず。その中に奇なることは、富士にのほらむとて、道を迷ひ、そことも知らぬ曠野をさまよふこと數日、第四日には、氣根疲れはて、手足も縮み、一步も進まれねば、「とても死ぬべけれど、こゝに死なむより、同じくは往來の道に出てこそ」と、富士権現に祈りけるが、其の日もそこに臥して、明くる朝に見れば、夜の間露おほく降りて、木草の葉にかゝれり。折から咽渴きたれば、幸に手を伸べて、此の露をひと嘗むるに、甘き事たとへなし。夫よりかたゝの露を呑みくしければ、忽ち精神爽になり、足もかるくと成りしかば、こは神の恵み也とたふとく、又曠野をそこはかとなく行くに、谷のあなたに小家一つ見出したり。うれしくて行かむとするに、谷ふかくして道なし。思惟して、そこに竹のありける。其の枝に取付きて飛びければ、不思議に恙なく向うの地にいたりぬ。さてかの一つ家に入りて、しかゝのよしを語り、路を問ふ。あるじ驚き、「こゝは木樵山がつも通ふ所にあらぬものを、先今夜は休み給へ。明日案内せむ」と、粥など焼きてあたへ、さまざまの物語りするついで、「けさはめづらしく甘露降りたり、めしよや」といふに、さてはとはじめて知りぬ。「こゝには折々降るにや」といへば、「たまさかにはあることなり」といふ。彼の崑崙山に甘露ありと聞くを、

三綱一君臣
父子、夫婦
の大義
五常一仁、
義、禮、智、
信

なにはづ淺
香山云々
難波津に咲
くや此の花
冬こもり今
を春べと咲
くや此花、
あさか山か
げさへ見ゆ
る山の井の
淺くは人を
我が思はな

くに、此二
歌を手習の
始としたる
る事古今集
の序に見ゆ

こよにもまれくも降るなれば、富士を仙境といふも宜なりとおほえし。それより案内を得て、巔を極めけるとなむ。西遊には、霧島の嶽の天の逆錐を見むと、三度まで登りしかど、硫黄の氣に堪ずしてえいたらすといへり。凡そ日向わたりは、正學の道にいふ人なく、實に邊鄙なれど、また人心の直なるものから、塘雨、三綱五常の趣をよりく、に説きさとしければ、人々信じ、こよにとどまること八年、今やうく文字の事をもいふ人あるは、またく此の老の功なりとぞ。又はじめ嬰兒の手習の手本をもとめしかば、いろはをかきて與ふるに、「是は何といふこと」とあやしむ。塘雨もまたあやしめて、「ここは手本の始に何をかきて與ふるぞ」と問へば、「なにはづ淺香山のふた歌也」と答ふるに、古風の残れることを感じぬとぞ。此の外奇話もあれど之を略す。

○以上花頓記す。閑田子又いふ、此の人京にかへりて後、かの兄身まかりしかば、止む事を得ず、萬屋にたち入り、とかく事を取まかなひし時、其の主あるじに説きて、よしなき器財を買ふ事とよめ書をあまた買はしむ。又其女の需もちめに應じて、つくしごとの組の文を註して自在抄といふものを著せり。予も請はれてこれを添削し、跋はつをもかきたり。おもしろき老人なりしが、をとろしの春醍醐の花見にいきて、歸りての夜、頓死せり。流をつく一生涯りたしといふべし。花頓其の追福に此の傳を記すといひしが、これも亦ほどなく同じみちに趣けるも哀なりけり。

其 蛸庵杜口

其蛸庵杜口は、生涯俳諧を好み、よき句ども多かりけらし。はじめ退隱する時、人の訪らひしに答へて、

くちなはの見かへりもせぬはかまかな

此の句あまねくいひもてはやして賞す。雅俗聞見の博き人にて、談話おもしろかりしかども、老後耳聾の故に、明暮古文書のめづらしきを寫し、又自ら見聞きし事共を筆にまかせて、つれづれを消す。能筆にて、根氣も強かりしかば、凡二百卷におよび、翁草と號す。相識の人おのが好みにあたる卷々を借り寫してもてはやせり。八十六にして、乙卯の春、なき名の數に入られし。

瀧野瓢水

酒井侯一播磨飾東郡姫路の領主、酒井雅樂頭

播磨加古郡別府村の人、瀧野新之丞、剃髪して自得といふ。富春齋瓢水は、俳諧に稱ふる所なり。千石船七艘もてるほどの富豪なれども、遊蕩のために費しけらし。後は貧窶になりぬ。生得無我にして洒落なれば、笑話多し。酒井侯初めて姫路へ封を移したまへる比、瓢水が風流を聞き召して、領地を巡覽のついで、其の宅に駕をとどめ給ふに、夜に及びて瓢水が行方しられず。不興にて歸城したまふ後、二三日を経てかへりしかば、「いかに」ととふに、「其の夜月ことに明らかなりし故、須磨の眺めゆかしくて、何心もなく至りし」といへり。又近村の小川の橋を渡るとて、踏みはづし落ちたるを、其のあたりの農夫、もとより見知りたれば、驚きて立ちより、引きあけむとせしに、川の中に居ながら、懐の餅を喰ひて有りしとなむ。京に在りし日、其の貧を憐みて、如流といへる畫匠（初橋屋源介といふ）數十張の畫をあたへて、「是に發句を題して人に配り給はば、許多の利を得給はむ」と教へしかば、大によろこび、懐にして去りしが、他日あひて、「先の畫はいかどし給ひし」ととふに、「されば持ちかへりし道いづこにか落せし」といひて、如流がために面なしと思へる氣色もなし。所行大むね此の類なり。俳諧は上手なりけらし。おのれが聞くところ風韻あるもの少し擧ぐ。

ある堂上家へ召されし時、

消し炭も柚味噌に付いて膳のうへ

何某の大納言殿賜ひし御句

名はよもにひどきの灘の一つ鷹

といへるにこたへ奉りて、

ひとつ鷹狂ひさめたり雪の朝

大坂の知己の者遊女を請けむといふを諫めて、

手に取るなやはり野に置き蓮華草

母の喪に墓へまうでて、

さればとて石に蒲團も著せられず

駿河の白隠和尚賞美の句のよし、

有りと見て無きは常なり水の月

達磨尊者背面の圖に題す、

観すれば花も葉もなし山の芋

有りと見て
一證道歌
鏡裏看月
不難水中
捉月爭拾
得

京の巴人といふもの病すと聞きてのほりしに、伏見にてはや落命したりときよて、
嘘にしていで逢ふまでの片時雨

生涯の秀句と人のいへるは、

ほろくくと雨そふ須磨の蚊遣哉

七十六七ばかりにて終れりとぞ。

高森 正 因

一切經一佛
經の總名
經律論の三
藏すべて七
千餘卷
大和高取侯
領主植村家

正因高森氏、號は寂嘯、本肥後國阿蘇大宮司三家の内、(阿蘇村上高森を三家と稱す)高森の孫にして、紀伊國に生れ、醫をもて業とす。又佛乘に歸し、いまだ若くして一切經を閱するの望み有りて、京師に登る道、淀河の舟中にして、泉涌寺中來迎院主に相見して、志願を述べ、院主感じて「さらば吾が院に寓居すべし」と、誘はれてこゝに留る事三年、終に閱藏の願を果して後、此の寺近く伏見街道本町に居を定め、専ら醫術を施して、技妙に至る。其の一をいはゞ、大和高取侯の招に應じて至りし時、はや事きれ給ひぬと聞えしに、「然はありとも遙々参りしかひに、空しき御體にても一診しまうさむ」と望

仙洞一太上
天皇の御所

みて、診ひて曰く、「猶見る所あり」と、しひて藥を進めしに、忽ち蘇息し給ふとなむ。此の類猶有りけむ、大に世に行はる。又もとより國歌をこのむ。時に、
靈元 上皇、仙洞に人麿の社を造らせ給はむとて、あまねく古像を求めさせ給ふに、正因藏せる所の像、阿蘇より傳來せるを奉りしに、甚歎慮に愜ひしをもて、許多金及び本町の宅疎竹庵の租を免ぜられ、剩醫人なるをもて、忝く大己貴命の字の宸翰を賜ふ。終に法眼にさへ進む。且和歌を嗜むよし歎聞に達しければ、某の卿の傳奏にて、自詠二十首を奉るを、甚奇特に思し召して、東蘭亭の號を賜ふ。よりにて其の書院の名とす。凡生涯の榮譽かくのごとしといへども、身は不犯にして、しかも齋食を持ち、くすりをあたふるにも、鳥獸の肉をもちひ、殺生にあづかることをせず。寶永饑饉の時には、勝平散といふ藥を製して、病者に施せしなど、善業人の口にあり。七旬有餘にて病なく、自から死日を知り、法服を著し、端座して逝す。醫術の書は、其の家に傳ふ。(一生不犯の人なれば、子なく養子をもて家名を相續す)和歌集は一旦印行すといへども、火のために亡びたるを、ゆかりの人の書集めたるが有りて、其の中におほえたるを擧ぐ。

早春

春くれば雪間々々に若艸の生ひ先見ゆる野邊ののどけさ

尋花

日高くば此の川上を尋ね見むむすべば水の花香ぞする

山家月

世をいとふこころの外に澄む月の影さへ洗ふ山の井の水

嘲菊意

隱家の花とも見えす此のごろのよにもてはやす菊の色々

不_レ久詣道場

かすく_レの心の關をこえて今法のみやこの近きをぞ知る

あまたの中には、よろしきがおほかるべけれども、こよにとどむ。

端文仲氏家伯壽

端隆、字は文仲、通名順助、春莊と號す。書林なりしかど、隱操ある人にて、詩を能くして名あり。天明の火にあひて、大に零落す。しかれども、春莊帖と名付くる書畫帖を

天明の火
光格天皇天
明八年

懐にして、知己の諸名家に乞ひて記さしめ、「此の帖はおのが別莊なり」とたのしめり。發心集に、家の圖を書きてよろこびける男有りしに似たり。その作、彼の帖の首にかけるは、

半開全盛競春光 日日歸家衣袖香 酒館佳招僧院約 人情一月爲花忙

又

偷閑午日惜芳菲 惆悵花前舊友非 醉後縱能紅照面 時時作雪鬢邊飛

六如上人、多年此の人を憐ぶ故に、死を哭して、其の絶筆の詩韻を次いで曰く、

文仲戊申罹災 家産蕩盡 尋復得疾 其病中立秋詩曰 閩接林鐘暑更瘳 上蒸下濕瘴瘟并 播間芻具醫調護 棺後詩名天寵榮 老雀引雛窮巷寂 新篁灑月敗

簾清 五更行雨交金吹 秋自白川水北生 (作此詩後遂不復起終爲絶筆)

先廬委燼鬱攸瘳 錯莫賃居貧病并 一盞糧支百錢卜 數篇詩敵五侯榮 舟移夜壑

命何促 墓傍青山骨亦清 得句猶思來質我 每逢風景感逾生

上人末句自註曰 生每得詩 或有推敵未穩者 輒來詢之 余曰 某字可若稱其意 則

低頭合掌謝不置 喜形于色 若不稱意 則頭也不低 掌也不合 傲然掉頭曰 原字尙勝

林鐘一六月

也。其真率若此。交遊中能有若人乎。此事今尙往來于胸中一也。

○九齡字は伯壽號。蓋山人。本姓は加藤。近江佐々木山の麓清水邑の人。詩を好み、歌をも嗜む。若くして家産に疎きゆゑ、家弟に業を繼がしめ他邦に遊ぶ。後京師氏家柳園なる人、母家の縁あるによりて、其の女に配し、其の家を繼ぐ。柳園は醫人にて多能、有賀下流の歌をよみし人なり。伯壽は漢學を教授し、すこぶる歌をも唱ふ。然も自ら作る所の詩歌、すべて書きもとどめず散り失せたるを、歿後知己の人はつかに集むるもの有り。其の二三首左に擧ぐ。性飄逸風韻有り、且古詩を説話することを得て、人を絶倒せしむ。晩年には王陽明の學を信じたり。京師中にしてやゝ名をなすにおよび、久しく病みて歿す。をしむべし。

批沱湖二首

沱湖近江の琵琶湖
皇都天智
天皇舊都
金龜皇國の
城彦根城
地開云々
此の湖の成
れるとき富
士山出づと

萬頃煙波涵大清。琵琶何歲作湖名。園存石鹿皇都跡。藩壯金龜侯國城。諸島爭奇盤上峙。千山浸秀鏡中平。滔滔八百餘川水。向此朝宗日夜聲。
西北名山數十峯。巍然紫翠畫中濃。風前唵鳳笙洲竹。磯上臥龍蓋館松。天接中流涵日月。地開東海吐芙蓉。丈夫不識名區壯。宇宙何由披曠覽。

寄東適禪師

高僧丈室倚岩裏。千仞機鋒凌碧霄。講法臺前馴猛虎。參禪會上斬兒猫。寒溪明月敲氷汲。暮嶺白雲分雪樵。久抱煙霞負蓮社。思師永夜夢魂遙。

明妃曲

明妃漢元
帝の女官王
昭君、畫工
に賂せず醜
女にふがか
れ匈奴に遣
さる

氈帳秋風憶漢都。君王命妾和單于。此身空解誤明鏡。恨在娥眉不畫圖。
右二生はさして奇といふべきこともなければ、生涯意を得ずして歿するを憐むがうへに、前編の著をふかく稱して、世にしらぬ人のしらるゝをよろこびしかば、こたび花頭は春莊が傳を擧げ、おのれ又伯壽をあはせていさよか友誼を終ふ。

僧幻阿

幻阿、蝶夢法師は、京師の人、寺町の上阿彌陀寺の子院歸白院に住す。若き時は頗る放蕩なりしかども、俳諧をこのむこと人に過ぎ、四方の國々に行脚して、此の道を執行す。後洛東岡崎に閑居を占め、俳諧をもて聞ゆるものから、こよろざし佛乘に歸す。其の大功をいばど、天明申の年の火災に、阿彌陀寺焼失して、名におふ本尊弘法大師の作といへ

單于匈奴
の王の稱
阿彌陀寺
京都寺町
子院下寺

丈六―身の
丈六尺の
佛像、常
に坐像

無慙愧―破
廉恥

石山寺―近
江滋賀郡石
山村、西國
巡禮十三番
札所
常燈―神佛
の前に常に
點する燈火
癭瘤―こぶ
無用の長物

るも、丈六なるがゆるぎに、動かし得ず、灰燼となり、はつかに右の御片頬のみ寒灰の中より出でたりしを、いたく歎きて、佛工の妙手をえらみ、浪花の田中康朝に許多の金さまさまのものをさへ贈りて、(佛工をよろこばしむれば、佛像圓滿にととのふものとかや。むかしより例ありとなむ)此の残りしに繼ぎて、御首を修せしめ、總身は五條の佛工隆慶に作らしめて、本寺に安置す。又此の寺の鐘は、本尊の縁記を鑄つけて名鐘のきこえあるが、幸に烟にもれしを、時の住持無慙愧の惡僧にて、是をさへ他へ賣り渡したるを、幻阿さまはかりて、金を捨てて取返されたり。「此の人なかりせば、本尊も鳴鐘も名のみならまし」と人々稱歎せり。是より先、石山寺に常燈を供せられしこともありき。はいかいの事におきては、粟津のばせを堂を再建して風流をつくす。又ばせをの繪詞傳を著はして、ここの什物とし、其の寫を印行して世に弘むるをはじめとし、所々に芭蕉塚を建てて其の舊跡をしらしむるなど、其の徒の稱せる業おほし。天明の中比にや、もと住める五升庵の後の空地に、白庵といふものをたてて、同志の人をのみつどへ、花月を翫ぶ料とす。然るに幾程なく洛中大火の後、こよをかりて住める友人これかれ有りて、やうく住み荒らしたれば、初めの興も夢と覺めて、癭瘤の思ひせしが、遂にこぼち

相國寺―京
都五山の第
三、臨濟宗
付合―俳諧
の體につけ
あはする連
歌
臘月―舊曆
十二月の異
稱

て、彼の歸白院におくり、内佛場とす此の伯庵の記は、相國寺蕉中長老著はし給ひ、破りて後に六如上人の添記有り。今左に掲ぐ。生涯の發句付合文章などは、印行の書どもにあまたなれば、茲に贅せず。久しく病して、遂に其の冬臘月廿五日の曉身まかられぬる、齡は六十有四年なりき。

泊菴記

幻阿法師不慕榮利、不驚寵辱、所談者清玄、所詠者俳諧、性好山水、探名區、攬勝概、足跡幾極四海之濱、而一寓諸諷詠焉、其居于岡崎也、竝街巷、背山野、所爲聘、心目而寄遊暢、乃憑神足之通也、近更卜一宅、乃東距數百步、爲古法勝寺跡、因結團瓢、分白河水、帶其門、橫略約入之、咫尺間、頓隔凡境、南面華頂山、紫翠聳、出列松之際、東則南禪之樓、禪林之殿、正爾與軒楹相當、時則作鐘磬之響、如意瓜生、諸峰遷迤而北至、比鄰更開一窻、受之、乃黑谷蒼鬱擁其前、使四明迥以臨焉、至於雪月花樹爲之裝飾、則四時變朝暮、不可勝狀、叢爾一園、瓢席、僅函丈而氣象百千、盡在几席間、不亦奇乎、法師既多四方交遊、戶外之屢未、免雜選、則今之所營、唯同調者而得、以下揚云、乃謁余謂曰、「某老矣、不復從

運東西。此其臥而遊之乎。顧其所宗。厭穢而欣淨。是誠何心哉。師其忖度而命之。余曰。有是哉。其惟泊乎。夫泊也者。寄身一葦之。上下無所定。四維無所亞。必也知其所止而後止焉。然目不得不視。耳不得不聽。彼寒山之鐘。江楓之火。亦無所待而有。所待者也。經不言乎。見聞如幻翳。三界如旅泊。故見而翳之。是謂不見之見。聞而幻之。是謂不聞之聞。居界出界。方便之門。其在茲與。君豈所待是舍諸。且夫華頂禪林黑谷者。皆君所宗宗匠之跡。非所以羹墻于旦暮乎。昔者吾正覺國師居相之三浦。名庵曰泊船。聞芭蕉翁寓武之深川。亦有泊船之堂。是猶有繫乎水與船者也。今法師之營。非水而山。不船而泊。泊之時義於。是遠矣哉。法師曰。善哉。請記斯言。勿忘。

天明丁未十一月

淡海竺常撰

泊菴本爲朋簪。而設。既而以謂樹下塚間非敢所望。降此則一把之茅猶爲有餘。豈可有長物乎。遂乃捐之移於歸白道院。替爲佛室。略無顧惜念。於是泊菴之爲泊。名實愈副焉。即大典禪師所命亦爲得其實矣。唐詩有之。縱然一夜風吹去。只在蘆花淺水邊。法師之視泊庵。殆亦如斯夫。比之平泉之石。賢愚相距何如也。因

記之以附前記之後。

寬政癸丑孟冬

六如杜多慈周識

古谷久語

古谷久語は、伊勢國三重郡松本村の農夫にて、田わざをつとむる間に、好みて野史(軍記の俗書をさす)を読み、一わたりにして記得し、終に忘れず。村中の集會にこれを語らむことを乞ふ者あれば、乞ふ所の事實を説く事、其の書に對するごとし。此の村四日市驛に逼りたれば、若き時は、常に人夫に役せられて、旅人の竹輿をも昇きたるに、或は奴僕と侮りて談話せる士人など、いろくの舊事に委しきを聞きては、大に畏伏せりとぞ。終に沂りて、本朝の歴史及び萬葉集なども悉く暗記して語る。凡そ千歳の古の事も、今みる如く話せる故に、或は年經し白狐の翁に托したるにやなども風説せり。著はす所、南朝略史又古谷艸紙あり。艸紙は伊勢國中を巡りて、上古の地理古寺の廢れたる、及土産の品をも考索して録せり。されば國君の聞に達し、錢を賜ひて賞し給ふ。もと苗氏もさだかならねば、古谷の氏も君侯の賜へる所なりといふ。思ふに久語の名も、時

を移して古を語るによりて、人の名付けしにやあらむ。國の士大夫も是を愛して、詩歌を寄せ、親しく交る人もあり。七十の時、是等の人謀りて、壽碑を建つ。七十三にして壬子の年歿せりとぞ。

○又聞く。此の老搜し出せる伊勢の古圖、松坂本居氏の手に落ち、内宮の文庫に納められしが、此の圖によりて、太神宮儀式帳の内に鈴どめの杜といふ所のさだかならざりしが、分明になりぬ。これは往古の官道にて勅使参向の所に出でたり。是らも一つの功といふべしとなむ。彼の古谷脚紙には、さだめて此官道古今のたがひも記されたるべし。予も此のころかりて見むとするものから、まづ聞くまゝをしるす。

續近世畸人傳 卷之三

粟田口善輔

善輔（一作善法、又善浦とも有り）は、西口に住む隱者也。其の居は土間に爐をひらき圓座を敷きて賓主の座をわかち、十能に炭をすくひて、そのまゝ爐に投ず。往來の馬士轎夫に茶をあたへ、物がたりせしめてたのしみ、晝夜のわかちなき人なり。糶つくれば、一瓢をならして人の施を乞ふ。皆其の人がらを知りて、金錢米布をめぐむに、其のもののある間は、家を出づる事なし。爐にかくる所手取釜といふものにて、是にて飯を炊き、又湯をわかして、茶を喫す。其の湯の沸く時は「彷彿松濤聲。昔日高遠幽邃趣」と吟じて獨笑す。

手取釜おのれは口がさし出たぞ雜炊たくと人にかたるな
と戯れし事もあり。豊太閤そのことを傳へきと給ひて「其の手取釜を得て茶燕せよ」と利休に命ぜられければ、休すなはちゆきてしかくの御命の旨を傳ふるに、善輔聞くとひ

圓座—藁菅
間などにて
渦のごとく
圓く編みた
る座蒲團

利休—千利
休、千家茶
道の祖

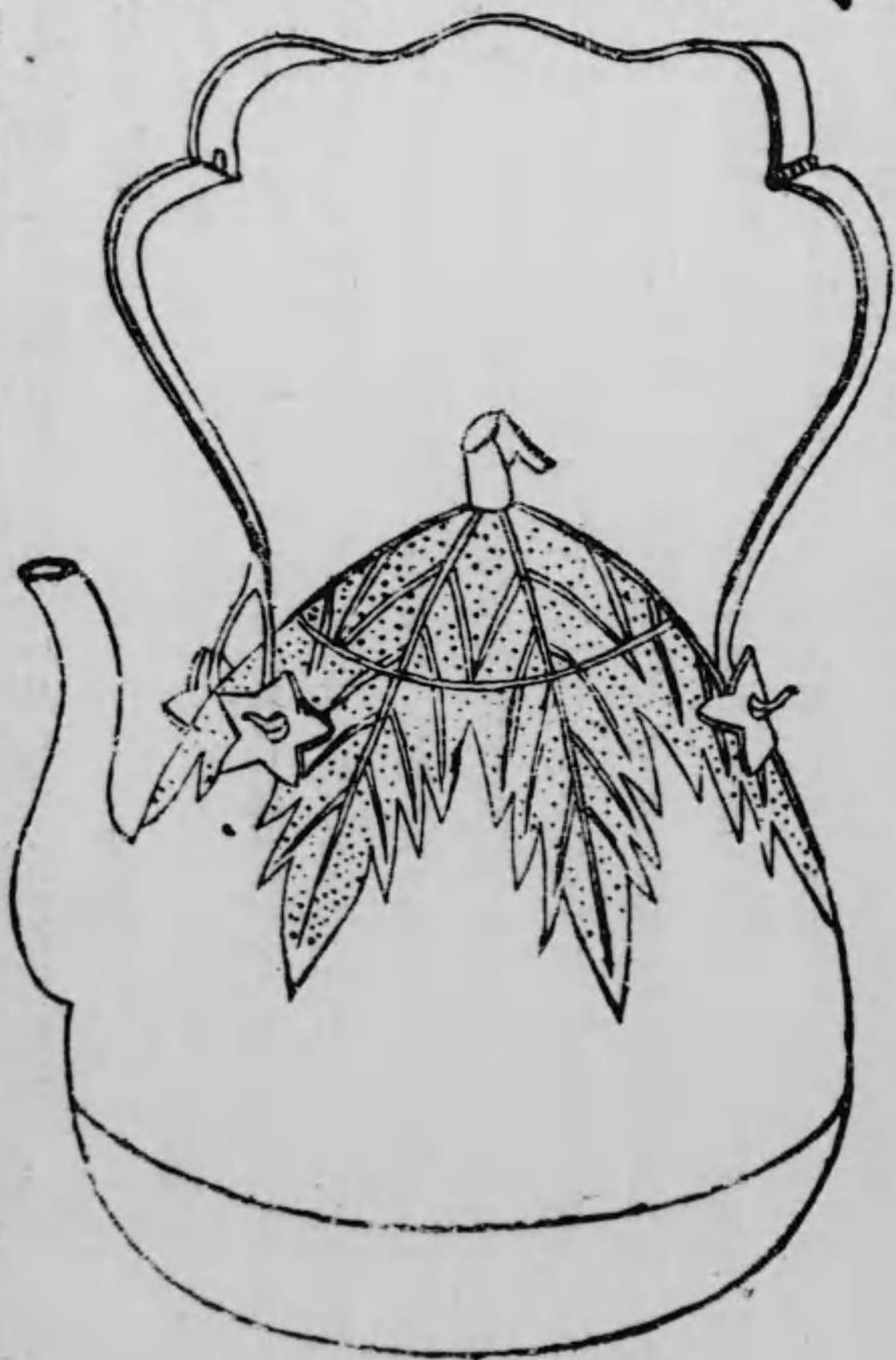
としく色を損じ、「此の釜を奉ればあとに代りなし。よしなき釜故に、とかく物いはるよ
も亦おもひの外なり」と、やがて其の釜を石に投じて打碎き
あらむづかしあみだが峰の影法師
とつぶやきたり。

茶毘所—火
葬所

○蒲隣按ずるに、あみだが峰、古歌によめるは東南麓谷なれども、此の栗田山にも此の名をよ
びて、享保のころまでは茶毘所ありしに思へば、南のあみだがみれの下は鳥部野にて、もと
の葬所なれば、のちに栗田にうつしたるにやあらむ。

利休もあきれたいはむかたなく、豊太閤は短慮におはしませば、いかどあらむとおもひ煩
へど、すべきやうもなければ、ありのまよに申しけるに、かへりてみけしきよく、「その
善輔は眞の道人なり。かれがもてるものを召しよは我がひがことぞ」とおほせて、その
ころ伊勢阿野の津に越後といふ名譽の鑄物師あるに命じて、利休居士が見しまよに、二
つうつさせて、一つは善輔に、かの破りたるつくのひとと賜ひ、一つは御物となる。善
輔歿して後、その釜、栗田口の良恩寺に收まれり。其の圖左のごとし。

寺取釜之圖



口經三寸二分 高五寸五分
底廣サ七寸 他蓋ハ別也

手取釜并鉤、箱に入鎖迄入念到來悦思召候。尙山中橋内木下半介可申也。

十月十一日

太閤御朱印

田中兵部大輔

田中兵部大輔
—田中吉政

○花顛云はく、田中兵部大輔は、その比の諸侯也。越後に御命を傳へて鑄させたる人ならむ。是は其の時の御使番山中木下よりの清書也。別に持ちたる人の意にて、此の善輔が釜の此の寺にあるによりて、寄附したるならむか。善輔にはあづからざるもの也。彼の太閤の御物は、或る大國の侯の御家に傳はるとぞ。又細川玄旨法印も、此の釜をうつせと阿野越後に仰せられしに、御所の思召にて、たゞ二つ鑄たる事に侍らへば、又同じ形に鑄候はむことは憚ありと辭しければ、理也とて、され歌をよみて、さらば是を其の釜に鑄付けよ。これ同じものならぬ證據也と仰せしかば、やがて鑄てまゐらせけるとぞ。其のされ歌は、
手とり釜うぬが口よりさしいてでれば似せぢやと人にかたるな
此の釜今も細川家に傳ふるよし也。又云はく、もとの手取釜の歌は、或説には堺の一路庵がよみしとも、又道六といふ人のよみしともいへど、此の玄旨法印のうつしの戲歌にてみれば、善輔がよみしに疑なかるべし。

陸羽、盧全
—共に宋の
有名なる茶
人
宇治の亞相
—源大納言
隆國

德島—阿波
德島、蜂須
賀侯の領地

○善蹊評して云はく、善輔茶を翫んで茶匠の窟に不_レ落は陸羽盧全勝れり。馬士驢夫をいとばす茶をあたへ物語せしむるは、宇治の亞相に似たり。しかも時の威權に屈せざるの一條は甚難うして甚危し。幸にして免たるは天歟、そもく無_レ我の所以無_レ敵歟。

園木覺郎

園木覺郎は、阿波の人にて、致仕の後、武藝をもて業とす。妹女に聲どりして家を委ね、みづからは山陰の竹樹林に隱居して、風月をたのしみ詩歌を翫ぶ。はた客を好み、夜をもて日に繼ぐことを常とす。性質膽勇あり。或時德島の長臣權柄を取りて跋扈せる人、覺郎老人が隱居に千年の古松あるを聞き及び、使者に人夫を添へて此の松をうつし植ゑむことをもとむ。老人何心なきさまにて、「吾が艸庵暴風の憂あるを、度々此の松によりて防ぎ侍れば、參らすることかなふまじ」と答へたれば、せんかたなく使者かへりぬるが、纔に其の門を出づるころ、下部を呼びて松を根より切り倒しけるとぞ。其の氣慨善輔に似たるをもてこよについづ。

細井廣澤

廣澤は細井氏、名は知愼、書名高うして、もとより文學あり。晝またかろく、書の因に
 かけるもの逸興あり。且算術に通じて、其の著述の書有り。經濟の才もありければ、諸
 侯の國に新田を開きしことも聞ゆ。凡多能の人也。こよに奇なる一話を擧ぐ。赤穂の四
 十六士のうち、大高源吾にしたしみ深かりしが、豫め其の復讐の謀をも洩しけむ、
 打入る夜、ひそかに書を贈りて、「今曉事を果さむとす」と告げしかば、澤が家吉良氏の
 館に近きにより、やがて他へ適くまねして、門を出で、人しれず家の棟に登りて其のさ
 まを窺ふ。さてやうくことしづまりぬとおほしき比、歸りたるふりにて内へ入り、た
 だ獨起き居て、出居にありし間、門をたよくものあり。心得て自から戸を明けたれば、
 はたして大高氏にて、おもひを遂けたるよしをかたり、脇さしの小刀をぬきて、かたみ
 にとて與ふ。武林唯七も亦相知る人なりしかば、具に別を告げて、是は血に染みたる手覆
 をとりてあたふ。されども廣澤生涯人にかたらず、自から此の事を記して、彼の形見と
 共に一つの函に納め封じて、ひめ置きしを、歿後子息九臯、何やらむとひらき見て、は

出居—表の
 客座敷
 手覆—小手

じめて知れり。今もつたへて其の孫藤右衛門家寶とすとなむ。

○菑蹊云はく、此の傳細井家相識江戸の人に聞きて記す。義士事に先だちて密謀をもらすに、
 その信義のかたきをしる。はた其のころ義士の知己なる旨をいつはりて身の榮とせし人も多
 かりし由なるを、生涯口に出さず、子弟といへどもしらざりしは、用意拔群の人なるを、他
 事に及ぼしても、おもふべし。義臣傳に、羽倉齋といへる神道者、大高氏にむつびて、吉良
 氏の館の案内を記し與へたりとかきたる、其の齋とは荷田春満の事也。羽倉家には傳ふる説
 なしといへども、彼の書に記せるはよくしる人ありしならむ。凡文雅に名高き程の人は、義に
 くみするも厚きなるべし。もしたと名利のために文雅をうりて、信義乏しききは人は、骨
 冷ずして名先づ滅す。たとひ殘る名あるも亦いやしむべし。

横井也右

也右、横井氏、俗名孫右衛門、尾張の士也。篤實謹厚にして文雅を好み、殊に俳諧に長
 じ、世に名有り。(芭蕉流を喜びて、しかも定れる師なしとぞ) 閑田子一とせ彼の國に遊
 びて、其の著述鶉衣、うらの梅といふ俳諧體の文集をみるに、そのさまいやしからぬの

ひとよなが
れ云々遊
女

みか、鼓舞自在比類なく覺ゆ。はた生前をよく知る人にあひて、其の行狀をきくに、文章にかよれたる趣と、言行一致なるに感ず。故に今此の傳をたてて、一三を擧揚せり。わかきより病がちなるにより、五十計にて致仕せる時、隱居に携ふる所の諸器物、すべて藝と盛とふた通を用ひず、煩はしきをいとへるに、相識る人何をがなと風流の器に意を用ひて贈らるよを、一辭するも來意にそむく故、これかれとつどひて本意にもあらずなりたり」とかたられしといふ。文章にもこのことあり。又六十の歳、賀を催さむといへるを、「妻子こそ悦びもすらめ、他人にあづかるべきことかは」ととめしと書かれしも、實事のよし。世人の、一面の識なき遠近に乞ひもとめて、己が賀は詩歌連俳何百何千におよぶなどほこるには、天壤のたがひにして、ことにたとく覺ゆ。又旅行の記のうち、一夜ながれのうかれめのさまなどをねもごろに書いて、さていふ、「凡そ人情はよく察して盡すべし。自己はかたく慎むべし」となむ。これらは戀歌などよむうへにかけてもおもふべきこと也。また生涯俳諧の門人といふ者なし。「二歳の小兒が舌しどろにもものいひたるが、おのづから五七五にかなひたるがをかしくて、是ひとり弟子とおもへる」と書かれしは、即俳諧にして、弟子なきは、世祿の家にしてさるべき事ながら、

數寄一風流
普通數寄に
作る

やよもすれば、上手といはれむとて、さしもなき人も、己に詔ふものを勸めて、其の業をなさしめ、弟子門生などいひなすが有るにとりて、これも亦一つの操なるべし。なほ一句一言の間にも己をつゝしみ、他を諷する意見えて、殊勝なり。予は其の數寄の俳諧をばおきて、その人がらの君子なるをたふとむ。發句文章は、各集あれば、こよには擧げず。又戯れにかよれたる野夫談といふは、其の趣向、家に入出入する農夫が江戸に下りて、太宰氏が四十六士論を書生の讀むをきよて、其の意をとひ、ふしんに覺えし旨をかたりしに托して、彼の論の非を、條を追ひて例の滑稽にかけり。眞名にて是を難ぜしものは、五井氏の著をはじめ、諸家の難陳等あれども、かなにて興あるやうに書きしは此の野夫談のみにて、しかも確然たる議論、諸家の論にまさるとも劣るべからず覺ゆ。又小皮籠とて、今やうのざれたるさまに書いて、其の邦内のわかうどの風儀をいまして、又婦女子のたしなみなど書かれしもの、おもしろく、其の人を知るべき一端にもあればおのれはうつしもてり。長壽にて、八旬の時に、國君より同列同齡の一兩人と共に賀の饗を賜へりとなむ。實に此の如き人は其の國華といふべし。

國華一國の
面目を起す
人

霞谷山人

霞谷山人は、何の所の人といふことを知らず。其の姓字をとへば、「姓は山、名は人、深草の霞谷に住む故に、霞谷山人といふなり」と答ふ。性多病にして、寒をうれへ夏日をよろこぶ。常に書をよむ時は、怡然として憂を忘る。しかも何の書といふことを選まず、凡めづらしき書にあふ時は、價を論ぜずして購ふ故に、家はきはめて貧しくて、書は大に富めり。常の言に、「法界は吾が心也。こよろはわが法界也。法界と心と初より二つなし。戒は吾が宅也。定は吾が衣なり、慧は吾が食なり。これを法界に遊ぶといふ」と。

元政上人の讚に云

病有^リ一焉。心病也。身病也。蓋心病也者。雖神醫而無^レ術矣。若^ク山人者。身病也已矣。法界之心何病之有。樂矣哉。

○蓋蹊云、是は元政上人五柳先生の傳に擬し給へる也と、法嗣惠明師書入ある艸山集、瑞光寺にあり。然れば、自らの事を書き給ふ也、別に傳を立つべからず。予後に聞きて正すに及ばず、故に追記す。

○蓋蹊因に云はく、世に元政壁書といふものあり。假名にされ事のやうに書きて、老莊のかたつかたを心得しと思はるものなり。元政上人においては、没交渉、假寐の夢にも上人をしらぬものいひ解したるなるべし。其の中に殊に、「髮結ふがむづかしさに、髮おろしたり」といふ事あり。又「悪心の作のみだ一體もちたれども、後世をねがふ爲にもあらず、お宿申すばかり也」とあり。上人は、出家以來持律戒愼の人也。又日蓮宗也。趣一向にたがへる事は、眼識なき人といへどもしるべし。又「ふかくさのうづらの聲を聞きて、焼いてしてやりたしと思ふ意もなし」といへるはいかにぞ。鶉狩などいひて、殺生のために出づる人は各別に、およその人、鳥けだものの形聲を見聞きて、食欲の意起るといふことは、まれなるべし。深艸のうづらといふより、やがて焼とりに意のつくは、あさましといふもあまりあり。是は若し生々の物識がほなる俳諧師などの、此の里に住みて書きたるにやあらむ。もし佐川田昌俊の作にやと花頭は疑ひしかども、是もあたらす。或は、霞谷山人こゝに住みて、風顛の趣頗る似たりともいふべけれど、戒定慧の説をみれば、大に非也。畢竟しられぬ事ながら、霞谷の名に付きて、こゝに評して上人のために冤を清む。

僧法眼僧圓通

三歸—佛法
僧に歸依す
ること、即
ち俗家の戒

法眼和尚は、平安の人、黃檗獨堪禪師の法嗣にして、性清廉溫柔、しかも學識あり。攝津國天王寺の側に一字を建てて、法福寺と號け、即こよに住す。同學紀伊國の圓通和尚と（紀州和歌山光明寺開基なり。前編に誤りて加賀の人とかきて後に改めしむ）並び行はれ、又意氣も相通す。一時兩師京にあられしに、法眼圓通にとひ給ふ。「祇園街に茶屋とよぶ家どもあり。和尚は其の家へ入り給ふ事やおはす」と。圓通「否しらず」とこたへ給ふ。「さらばけふは共に往きて見侍らむ」とて、手を携へてかの所に至り、いかにも軒高く門大なる家を見て、「こよよかるべし」とつと入りて、「吾は攝津の國の法眼」「おのれは紀伊の國の圓通也。あるじは何といふや」とことごとくしきに、主驚きながら、かねて知識の名を聞き及びしかば、先さるべき一間に請じ、家名など述べしが、女どもの立ちまはるをみて、「あるじはむすめあまた持たれたりと見ゆ。皆是へ招かれよ」とあれば、あやしきながらよび集めたる時、兩師つくづく見て「さてよき育ち也。親の身にしてはさぞうれしからむ。因縁にもなるべきなれば、いざ三歸を授けむ、皆合掌し、吾がいふ如く

布施—僧に
施し與ふる
物品
回向—讀經
して死者の
冥福を祈る
事

唱へられよ」とて、やがて高聲に授け給へり。「はやそこたちに用はなし、立たれよ」とて、兩師もついでかへらむとし給ふを、あるじ止めて、「とよのへ申すものさふらへば奉らむ」と、萬濟らに器などあらため饗應し、布施までしきければ、念比に回向して歸り給ふ。さて其の様を人に語り、「茶屋といふものはおもしろく丁寧なるもの也。若き僧達の行かむとするよしなるは理也」とあり。其の後はたどの家にてもてなしにあひても、「茶や／＼」と呼び給ふ。又一時兩師戲場の前を過ぎ給ふに、隨侍の僧見たく思ひて、欺きて、「此のうちにはさま／＼たふときことあり。拜み給はむや」といふ。兩師しばしもの思ひがほにて、「けふは某がもとへ心せけば、重ねて參らむ。先是より結縁せむ」と、木戸口にむかひ、三禮し給ふ。其後は戲場の前を見物者の行きかふをみては、「けふも參詣多し」と仰す。又圓通和尚、京なる富豪の相識る家へ行き給ふに、何やらん騒しければ、「何ごとぞ」と問ひ給ふ。「けふは息某が婚禮にさふらへば、家の内も靜ならず。こよひは他へおはして、他日御入り候へ」といふ。師うなづきながら、「其の婚姻といふもの、いまだ見及びたることなし。すこし見せられよ」と望み給ふ。あるじもてあまし、「中々御僧の見給ふべきことにはあらず」といへど、「いなくなるしからず」と動き給はねば、せひなく、「さ

普門品一妙
法蓮華經第
二十八、所
謂觀音經

らば隱居の祖母が一人あらるゝ所へおはせ」とあないまうしければ、さらばとて終夜普門品を讀誦し給ひしとぞ。なほ此の兩師の奇話法語などおほきよしなれども、よくしらす。實に意路不通の道者といふべし。

○高蹊云はく、前編に圓通和尚の事のみ聞くまゝに一條しるせるを、花顛こゝに法眼和尚を合せて出せるは遺漏しを補ふなり。みる人重複をもていふことなかれ。

叡山源七

攝津高槻一
攝津島上郡
高槻、領主
永井侯
大峯一吉野
金峯山

源七はもと攝津國高槻の士たりしが、暴惡放埒により、身をたつるに所なく、浪花に徘徊して馬卒となり、よからぬ業におきてはいたらすといふ所なし。其の比娼婦に八重といふものあり、かしくと別名せり。それ兄を害して罪せらるゝ時、其の馬の口を此の源七とりけるが、何とか感悟しけむ、道心おこり、妻も有りけれど大坂にとどめて、しるびて京にのほり、神樂岡の知福院をたのみて居たりしが、或ひは四國の佛閣を廻らむとおもへば、其の日より暇をひて出でゆく。あるは大峯へ詣でむと思へば、即詣でつ。さて其の山に斷食して籠り、百日も五十日もありしことたびくにおよぶ。其の後親し

横川一比叡
山三塔の中
慈惠大師一
天台の座主
名は良源、
世に云ふ元
三大師
鞍馬一山城
愛宕郡鞍馬
寺の略

き人に松尾氏なるが、日枝の山に詣つるに伴ひて、俄に此の山信仰になり、月には十四五度もまゐる。其の比知福院の住僧病みて終られければ、松尾氏の紹介にて、比叡の樺生谷大慈院に仕ふ。晝は木こり飯を炊きなど爲べき業をし、夜は峯々谷々をめぐりて諸堂を禮し、曙には院にかへること一日も怠らず。山法師皆其の名はいはず、仙人とよぶ。ある夜、横川の慈惠大師の廟に籠りし時、深更に空中より聲して呼びかけ「凡そ行法は滿つるがよきや、缺くるがよきや」とひしかば、こゑを勵まして「缺くるがよき」と答へしに、さわくと鳴りて、あとは松風の聲のみ也。又鞍馬に籠りし時も、同じ様なること有り。あるとしの春、俄に江戸をさして下り、速にかへり登りたれば、人々「何の用なりし」と問ひしに、「上野法滿院僧正は世に大徳の人なれば、今極樂世界に僧正の宮殿をまうけたまふ。此の秋某月往生ましますまなれば、此の事をしらせむとおもむきしなり」といふ。「例の仙人が何をかいふ」とうけがふ人もなかりしが、果して其の月日此の僧正遷寂し給ふ故、「何として知りけるぞ」と問へば、唯笑うていはず。又或時、武者小路實岳卿、讚岐象頭山に代參を立てむと仰せ給ふを、故ありて此の男承りてまるり、日を経て歸りける時、卿御對面あり。此の比の勞を謝し給うて、絹こがねなどかづ

遷寂一僧の
死を云ふ
象頭山一讚
岐琴平神社

かづけ給へ
るに賞と
して與へ給
へるに
鹽梅料理
の味加減
參り給へ
食ひ給へ

入定禪定
に入る事
轉じて死ぬ
る事
披露せむ
告げ知らせ
む

け給へるに、口に煙管をくはへながら取りて戴き、やがて「かよるものはうけ奉らず」とて、かへし參らす。いかやうに宣へどもうけざれば、卿も甚奇とし給ふ。又ある山僧（一説即大慈院也）常に膳に臨みては、鹽梅のよしあし、むづかしくいふ人あり。其の折から行きかよりにて眼をいからして、「凡僧家のものは、食をはじめ、何によらずみな佛物也。とかくいはず、參り給へ」といひければ、彼の僧も其の理に伏し、物好みふつに止られしが、後に鈴聲山の律師となり、終をよくせられし。常に「此の男よく諫めくれたり」と悦び給ひしとかや。又一時日枝山のれんげつよじ盛なるを、多く折りて一荷に擔ひ、上今出川新地といふより、二條四條の街にいたり、娼家の遊女に一枝づつ與へて行く。何の意といふことをしらす。淺ましき世をわたるものに、善縁を結ばしめむとにやあらむ。かくて年比へていかと思ひけむ、入定したきよしをいひけれど、心得がたきことなれば、とかくいひなだめて過しけれど、頻に催しければ、せむかたなく、「さらば病死と披露せむ」とて、穴を掘らせ日をえらびて、密に法事をなし、すでに時刻いたりぬるに、其のわたりに見えず。「さればこそ、よしなきこといひ出でて、せむ方なく身をかくしたるにやあらむ。されどもまづさがし見む」と、そこらもとめしかば、かたはらの柴つみた



る小屋に晝寐して、高いびきして居たり。「道入々々」と起しければ、眼を覺し、常のごとくものいひ打ちわらひ、「けに實に入定の時いたれり」と走り行きて、穴に飛び入りたり。見聞の人驚かざるはなし。時明和四年閏九月二十四日なり。

○一説、此の入定の意をも、即大慈院の律師一人知りて、これが爲にひそかにばかりたまひぬ。入定の時小さき鉦を携へて入りければ、其の鉦のこゑするや否を、折々行きてうかどひ、鉦の聲やみたる時ひらきて見給ひしに、はたして安座のまゝにて、氣息絶えたらば、上をよくおほひて歸り、已後かつて人に語られず。年へて後此の律師命終の時、事状を人にあかし給へりとぞ。又名を道入といひけるよし。花願書けるは、入定の前歎。久しく俗にて髪はわらをもて束れて有りしと也。

今も榊生谷に其の跡あり。又彼の妻は神樂岡へは折々訪ひ來りしが、いつも法文などいひ聞かせて歸しけるに、比叡に入りし後は、登ることかなはず。此の入定の由を聞きて後、尼に成りけるとなむ。是も高槻の士の女なりしとぞ。

○本文は花願記し置ける趣也。一説は、菴蹊知己の律師の話也。此の律師の話正しかるべし。大慈院も仙人男もよく知り給ふ人也。

僧義觀

知浴—浴室
を守る役

義觀法師は、肥前長崎福濟寺の知浴たりしが、元來非學にして、目一丁字を知らざれども、義を守ること確如たり。一時浴室より火出でたりしに、坐して動かす。人あわてて是を引出し救ひていふ、「火災は時也。人命隕すべからず。官聽もおそれあり」と諫むるに、法師頭を掉りて、「我は浴室を守るが任也。怠によりて失火せるは吾が罪なり」と、ただちに又火中に飛び入りて終る。

きた女

備前國岡山に津田某といへる經濟に長じたる士有り。新田を開かむとするに、かた／＼は山にそひ、かた／＼は海に添ふ地なれば、其の海の方に石をたよみ、界とせば、十萬の米を得べけれども、其の初めに人柱とて、男女にかぎらず、一人を龍宮に貢せざれば、成就せず。されども罪科を犯せし者は用ひず、誤りて海中に落ちたる者、又用にあたらすといひ傳ふ。さればせむ方なく其の事やみけるに、きたといへる婦女聞き及びて、「ち

しおのれが命にても苦しからずば、奉らむ」といふまゝ、其の女を召して問ひ給ふに「さして何をうしと思ふにもあらねど、生きて益なき命なれば、死して世のためにならむと思ふなり」とまうす。ひとへに思ひ入りたる趣なれば、「志神妙也。死せば新地の産土神にあふがむ」と仰せありければ、齋戒沐浴して潔よく海に入りぬ。かよれば、その地主の神に祠り、今も於幾多明神と稱ふるとぞ。

○花願云はく、道入は遷伊て死生を一つにす。義觀は義のために隨命、皆奇とすべきを、わきて此のきた女、故なく國の爲に、大洋に沈む節操、智勇の士も及ばず。奇のまた奇なるものなり。

尼妙船

後世のつとめ
後の世のため
佛道を修するこ

江戸にて俳諧に知られし法眼不角老人が妹を妙船といふ。京橋横河岸、松村半兵衛といふものの母なり。此の婆氏志貞にしてよろづの道を辨へ、その上後世のつとめねもごろに、他力の念佛怠なくつとめけるが、いつの比よりか、夕暮の看經の時、妙船が頭上へ佛壇より數點の光明かどやき、又はうしろより光さして佛間を照すに、家内おど

看經一經文
の黙讀
勤行一佛法
を修行する
五障一女人
は一には梵
天王、二に
は帝釋天、
三には覺王
四には轉輪
明王、五に
は佛身とな
るを得ずと
云ふ事
攝取一收め
取る事
稱名一念佛

ろきてこれを拜みたふとむより、近隣へも聞えて、夕暮の勤行をかうがへて、人々あまた來つどひ、讚嘆し、「日比信心口稱のしるしあらはれたり」といひはやすを、妙船がつてうけがはず、「吾が身は罪惡の凡夫五障の女人也。かく拙き穢身より、光明おこらむ事は有るまじ。もとより其の罪を滅すべきほどの行者にもあらず。おもふに魔事ならむ」と、佛前に於てこれを歎き、「若し大悲の本願に乘し、光明攝取の御利益に預り奉るとならば、命終をこそ期せめ、平生の光明は望む所にあらず。願はくは速にとどめさせ給へ」と至心に念じけるが、ある夕暮、佛間の二階とおほしく、何やらむ物の音頻にきびしかりければ、妙船あやしみ、子息へ告げて、速く二階を見せしむるに、古狐の大なるが二階の窓より飛び出でて、逸失せたり。此の由を告げしかば、妙船「さこそ」といひて、念願空しからざる報恩の稱名して、ますく信心堅固なりき。然るに此の尼の徒弟に與惣右衛門といふもの、若き時は放逸なりしが、蓮系といふ尼に歸依し、念佛をはけみ、是も白色の砂子をふらす故に、人々尊ぶことおほかたならず。妙船かたへ來りて、念佛唱行するにも、砂子をふらしければ、召し仕ふ男女近所の者もよりつどひ、争ひて是を拾ふことをよろこぶ。妙船またうけがはずして、「男女たど此の砂子をひろふに意を奪

はれ、要とする念佛は至心にあらず」と歎き、又佛前にて「是をとどめさせ給へ」と哀
慰をこふ。されば、又與惣右衛門來りて例のごとく念佛すれども、砂子嘗てふらず。時
に妙船いはく、「われ此の奇怪をよるこばす。反りて往生の障ならむことをなけくが故に、
如來前にて念願したれば、我が家にてはいかほど念佛せらるよとも、砂子はふるべから
ず」と示しければ、與惣右衛門大きにふづくみて、一言もなく出で去れり。是より後は
妙船と不通になりしとなむ。凡世間佛によらざる人は、信實の奇特をも肯はず、又信者
といふものは、邪正の差別もなく、點智の者にも欺かるれば、まして狐狸の業通におい
てをや。さるに此の尼、信の堅固なるによりて、かへりて奪朱の魔障をうけず。信、信も
信、疑、疑亦信といへる古語的當して、女には殊に奇特なり。稱せざるべけむや。

奪朱の魔障
—正しきを
紛らす邪魔

怒る

川谷貞六

土佐國侯—
土佐土佐郡
高知の領主
松平(山内
家)土佐守、
駿臺雜話!
室鳩巢の著

土佐國侯に仕へし天學者、谷川貞六といへるは、其の道に通じて、しかも風韻漢也。はた
神學を兼ねたれば駿臺雜話を難じてかけるものあり。其の奥に一首の歌を添ふ。
生れこしかひある國と知らねばや異浦にのみ拾ふあま

寅の刻—午
前四時、卯
の刻は同六
時、未の半
刻は午後三
時頃

是は國君へ奉りしとぞ。一日天象を見て俄に親族を集へていふ、「吾明後日死ぬべし。た
だし其の日の早天、公より吾を召して、天文の事を尋ね給ふべし。其の事終りて城外に
出でて必身まかるべし。各其の所に來り給はれ」といふ。例の奇をいふにやと信ぜずなが
ら、いとま乞の盃とて出したるを呑みて歸りぬ。ばたして其の日の寅の刻、召有りて卯の
刻に登城す。天學の仰ごに答へて、未の半刻に及び、事終りて、竹輿に乗りて、城下
十町許出で、其の約したる人々の來れるにあひ、即逝す。術の奇古人に恥ぢずといふべ
し。

僧 空 蓮

空蓮大徳は近江信樂郷の人にて、他力念佛の信心深し。されば、世間の人、「念佛すれば
必得往生」と云ふ本願の不可思議をわきまへず、疑ふ心を悲しみ、いかにもして現益を示
し導かむと祈誓し、里遠き巖窟にいりこもり、飲食を断ちて、一心に念佛念願し給ふこ
と、七日七夜なりしに、夢ともなく、うつよともなくて、阿彌陀佛現じたまひ、「汝がね
がひ佛意に愜へり。よりにて此の藕の絲を授くる也。此のいとる奇特をもて、衆生を濟度

衆生—世上
一切の人類

濟度—衆生の苦患を濟ひ、生死煩惱の境を去りて、成佛せしむる事

懺悔—過去の罪の惡を悟りて後悔する事

印施—印刷して人に旅し與ふる

し、疑念をはらさせよ」と宣ふと覺えて、ゆめさめぬ。たふとさ身にしみて、感涙雨のごとく、合掌敬禮し奉るに、やがて掌中より藕の絲出づること繰出すがごとし。こゝに於いてみづから名號を書寫し給ふに、是を拜して稱名する人は、合掌の手中藕絲を生ずること賢愚をわかず、或は金色、あるは青黄赤白、又短長の差別、あるは其の信の淺深によるか、たゞし大疑心ある惡埒のものは、かへりていとを生ずること多し。近江にて、一人うたがうて、其の名號を持せる僧に、巧思ありて、手洗ふ水の中に藥をまうけ、この絲を生ぜしむるも計るべからずとおもひ、澁をもて手をぬりかたむること三日にして後、彼の寺にいたりて、僧の指揮のごとく合掌稱名するに、手指たゞ蜘蛛のいとをまとふがごとくなりたれば、あまりのことに大聲を出して號泣し、從來の惡念を懺悔し、是より念佛の信者となれりと、其の僧かたらる。此のごろ又或る律師も此の名號を持して、拜せしめらる。予も拜瞻して、この奇特を感じ知れり。空蓮大徳大字は十幅小幅はかすをかぎらず、人のねがひに應じて書き給ふとかや。しかれども世に残るもの稀なれば、或人は臨寫して念ず。律師もまた臨寫をやがて板に彫りて印施ありしに、ともに拜見口稱すれば、いとを生ず。あるは境を隔てても、これを念ずれば、絲生ずるを正しく見たり。此の和尚の始末よく知らずといへども、此の願心の奇特をもて傳をたつ。

○手跡は、祐天大僧正に似て、しかも能筆と見ゆ。名號の左右に、天下和順、日月清明と四字づつわかちかき、正中の下に廓譽空蓮と記し、玉のかたちに似たる花押あり。

僧學信

閑藏の功—一切經を讀み了へたる功

地藏大士—地藏菩薩

學信和尚は、伊豫の人なるが、其の生るよはじめ、いとあやし。今治の淨土宗の寺に新亡の婦人を葬りしが、其の夜赤子の呱呱のこゑ、頻に聞こえければ、住僧あやしみて、聲をしるべに尋ねしに、彼の新亡の墓なりしかば、いそぎほりうがたしめて棺をひらき見るに、男兒生れ出でて有りけり。住僧よろこび「こは我が授り得し子なり」とて、乳母を付けて養ひしに、よく生ひ立ちて此の和尚となりたり。博學多識にして、一時の名僧なり。よにあやしきまで強記にして、精勤また類なし。年わかてし閑藏の功を畢りまた彌陀經十萬卷をもよみ終れり。書字作文などの雜技能はじめ翫ぶひまもなかりしかど、中年にいたりては、皆頗る雅賞を得たり。唯世務には愚にして孩童にもしかざることおほし。ある時、人にかたられしは、「われわかき時、常に地藏大士を信じて、深

釋迦佛入滅後、彌勒佛出世に至る間の六道能化の附屬を受けたりと云はるゝ菩薩
 扶宗護法—我が宗旨を扶け佛法を護る事
 唯識の述記—成唯識論十卷、唯識は萬法悉く第八識の所變と説く
 末那外縁勿字—末那は意と譯す、思慮の義、唯識の第七識

二世の悉地を祈りしが、世の富貴などいふ者は、人によりて害ともなれば、あながちに願ふべきにもあらず。さらば此のよのことは貧にしてよからむには貧ならしめ、賤にしてよからむには賤ならしめ、ともかくにも、たゞよからむやうにせさせ給へと、祈り申せし」とぞ。和尚體氣ゆたかに肥えふとり、寛裕なる人なりけれども、扶宗護法などに臨んでは、最勇敢にして、すべて身命のあることを知らざるが如し。されば、世人には、「迂遠なる人也。我慢なる人也」など、常に誚りわらはれぬれども、聊もかへりみず。年廿餘りにして、増上寺に有りける比、華嚴の覺州江戸にて唯識述記の講筵を開かれしに、和尚も其の聽衆に有りけるが、或る時殊に行きて謁を乞ひて、覺州と未那外縁勿字などいふことを論義し、和尚屈せずしていふ、「われもし百日閉關せば、述記を講ぜむこと難からじ。座首の講は聞くに足らず」とて去れり。其の後覺州和尚堺にて重ねて述記を講ぜられし時、其のことをかたり出でて嘆ぜられけり。和尚中年の比洛東獅谷に住持せられむことを懇請せしに、廬山の遺風をも復び興さばやおもはれければ、やがて請に應ぜられしかども、意に愜はぬことのみ多かりければ、さらぬことに托して、忽ち寺を退かれしを、ある人諫めて「夏にして住持し、秋にして退去せられむは餘りに

伊豫の松山の太守—伊達家
 香華の院—菩提所
 緇門—僧侶達
 門籍を除き—僧の籍を削り
 權門勢家—勢力家

かるくし」など、さがたたく聞えしに、和尚曰く「我聞く、淨土の莊嚴は寶殿逐身飛とかや。しかも、此の松徑竹關の寺、いかでかわが身を逐ふことをえむ」と、終に去りて、安藝の宮島の光明院にいたる。此の地は以上上人のむかしの跡かぐはしく、且山清く海朗にして、觀境心すみければ、ことごとまりて溘焉の心ありき。晩年、其の徳益高く、其の名いよくきこえて、伊豫松山の太守和尚を請じて、其の香華の地、大林寺といふに住持せしめ、兼て國中の僧機をも正さむと思ひ給ひければ、崇敬最ふかよりけり。和尚其の請に應ぜしより、其の士大夫のためには政教資治を贊述し、「政に預かる人は、老莊の學をも常に明らむべし」など申され、又緇門法中の爲には、戒乘を兼談じ、勸懲を専らと申し、不軌のもの十二箇院まで擯斥せられしかば、自他の宗門、僧機大に觀を改めけり。「嚴主に悍虜なく、慈母に敗兒あり。寛にして容るゝ事を要すとも、教は必嚴なるべし」と常に申されける。ある日、和尚京に上りて、數月不在の間、弟子の尼非法の事ありときこえければ、歸寺の後、忽門籍を除き、法衣を脱却せしめ、門前にして擯斥の法を行へり。「餘りに嚴刻に過ぎたり」とて、なだむるものありけれどもきかず。其の尼はしかも松山勢要の士の女なりしかども、和尚道義するどく、氣象正しくして、權門勢

いらふ—容
喙する

無量壽經—
佛說無量壽
經、淨土三
部經の一

佛舍利—骨
身の義これ
は釋迦全身
の舍利、下
のは火葬後
残れる骨

家を避けざることを皆此の類なりき。最も後に、一士人罪を得て獄に下りしを、其の罪情憐むべきことありて、それがために和尚しばらく助命を乞はれしが、先侯の歸敬に順じて、今の侯も歸敬は淺からざりしかども、「是は政道に預ること也。僧徒のいらふべきにあらず」とて、つひに許しなかりければ、和尚再び大林寺に歸らず、城門を出で、たゞちに安藝光明院にかへり退きぬ。人はをそしり笑へども、ものの數とせず。先侯の時、一とせ大に早して處々に請雨すれども、雨ふらず、民の患甚しかりければ、和尚に命じて、祈らしむるに、和尚一七日精誠を凝して無量壽經を讀誦せられしに、(經に天下和順の文あり)その驗いちじるく、松山領分を限りて甘雨大にそよぎければ、人皆蘇息のよろこびをなせり。此の事又後にも有りて、同じく驗をえたりとぞ。徳行のあまり奇特のことどもなほ多く聞えけりとなむ。七十有餘、老病不食してつひに滅を光明院に唱へらる。臨終の前日、かたみにともおもはれけるや、病床に臥しながら、護法の二字を大書して、有志のもの三四輩に遺し給へり。其の筆力平生に異ならず。又遺偈も有りしとぞ。異香天華の瑞を見て、四遠の道俗三五里の間、みな驚きて來りまうで、敬異せずといふものなし。茶毘の灰ことごとく紫色鮮明にして、光明映徹せること、恰も佛舍利のごと

橋南谿—宮
川春暉、西
東遊記の作
者

くなる舍利數百顆を得たり。凡和尚の事蹟こゝに盡すべからず。今いさよか其の略を擧ぐるのみ。

○蒲蹊云はく、學者和尚の傳は、花頭もとより出したる上に、橋南谿の西遊記に嚴島にて聞きし話を擧げられたるを合せ、おのれまた和尚に隨侍せる僧衆に聞く所を附し、是をもて守興和尚に托し、其の熟知の旨を加へて一篇を成されむ事をもとめたる所如此。(守興師も亦隨從の人なり)又小松谷義柳和尚の弟子義諦師に聞く所の話左に掲ぐ。

念四坊といふ遁世者、頗る風流の法師にて、行脚に出づる時、笈の内の本尊にとて、短冊に六字の名號を、義柳上人の染筆を乞ひてもち居たる、又其の脇に學信和尚の染筆を乞ひければ、うた一首、上下の句を左右にわかちて書き給ふ。

授くるもうくるもともになむあみだ佛の誓ひへだてなければ
となむ。又同じ時、念四坊「念佛を申さむとすれども、まうす心の發らぬをいかゞせまし」と問ひけるに、答へて、しめし給ふ法語、

「念佛をまうす心のおこりたらば、われも念佛まうさめ。さる心のおこらぬゆゑに、まうさめとはあやまり也。世間出世の善事、何事もしひてつとむるにてこそ、やむことを得ぬ場にもい

たるなれ。唯しひてつとめよかし」とて、かく、
 心して引けばこそなれ露ふかき秋の山田にかくる鳴子も
 和尚頗るうたをも好み給へば、在京の日、和歌者流の徒にも、まみえし人ありし。おのれ、
 其の生存の日、嚴島へ詣しかども、かつて知らず。其の光明院といふ寺をだに聞かざりしは
 いと殘多し。他郷に至りては、徳の聞えある人、（書）藝に長じたる人、百工の妙手などはなしや
 と問ひ聞きて、必相見を請ふよし、橋氏の西東遊記にかゝれたるは理りに覺ゆ。

僧 立 砂

立砂法師は、洛東智恩院光立院に住持す。いまだ若けれども、世を厭ふ心ふかく、人間
 の交りものうくて、其の院の傍に人の響かぬ所を選び、かり屋をしつらひ、机一脚を居
 ゑて、讀經學文など怠らず。且家の訪ひまうづるにも、奴僕の出であふのみなれば、皆
 親しみなし。あまさへ、雨ふれば、座敷も庫裏も漬りければ、「常に他行して院をも心に
 かけぬ僧也」など諷りながら、「修理をくはへむ」とはかるに、さすが院主に談せざればか
 なはず、かくといへば、「とかく且那打ちよりてよきにはからひたまはれ。日比の施物

智恩院—京
 都市下京區
 華頂山、淨
 土宗總本山
 庫裏—寺院
 の雜事を調
 ふる處

そこにも有るべし、こゝにも有り」と、袋棚疊の下、鴨居の上などより取り出さるれば、
 且那ども大きに驚き、「かねて思ひしにたがひて尊き人なり」など讚美しける。其の後、此
 の院もとかくうるさく覺えて、鞍馬山の東に形ばかりの庵をかまへて住れしが、又高雄山
 の麓にうつりて、程なく正念に終られける。其の年いまだ四十にも足らざりしとなむ。

廣 瀨 才 二

名は鱒、廣瀨氏、字才二にして、即通稱とす。（是堀川學生の通例なり）東涯先生に學
 ぶといへども、老莊を好みて一家をなす。又書に名あり。爲人介立にして、清操あり。家
 極めて貧しけれどもうれへず。獨居して、あるは、糧盡き油なきに至ることもあり。或
 る人來り、輿に乗じて物語したるに、午時に及べれば、「午飯を喫し給へ」とすよむるに、
 笑うて掌を撫で、「けふは米なきゆゑに食はず」とこたふ。客驚きて、「さらば米を參らせ
 む。其の代りには、公の交したしき宮筠圃（通稱常之進、傳は既に前編に出せり）の竹
 の畫を貰ひて賜はれ」とて、其のまゝ米多く贈りければ、其の後筠圃のもとにて其のよ
 しを語りしに、「それこそ安きこと」とて、あり合ひたる墨竹四張をおくられしが、其の

袋棚—壁の
 外へ張り出
 して作れる
 座敷の棚
 鞍馬山—山
 城愛宕郡、
 天台宗
 高雄山—山
 葛野郡神
 護寺、眞言
 宗
 堀川學生—
 伊藤家の門
 人

價にて二年は米薪乏しからざりしとぞ。かく貧しけれど、或る時梅道人の畫をみて、頻に渴望し、人に金を借りて、やうく買得す。しかるに、東涯これを見て、大きに歎美せらるゝ故、明けの日、たどちに先生に投ず。人其の意を問ひしに、「吾欲するも、人のほりするも同じことなれば、即參らせぬ」といふ。をかしきことは、冬の朝、隣の夫婦獨居を憐み、火を持ち來り、巨燧に投ぜむとせしが、中より狗子多く出でたり。婦人膽を消し、「こは何事をし給ふぞ」といふに、主人「それはよんべ風雨烈しく寒さ堪へがたかりしに、狗子あまた鳴く聲悲しければ、憐みて内へ入れ、幸巨燧に火もなければ、これに宿せり。渠さむからず、吾も暖かなりし」といへり。

藤堂樂庵 檜林由仙

樂庵藤堂氏、もと伊賀の名姓の子弟なれども、少年故ありて國を去り、洛東に棲遲す。爲、人才有りて強梁也。禪を主として、同好相逢ふ時は、假初にも棒喝を行ひ、はたあるひは初相見の人にむかひても、吾が機嫌によりて、「汝は何ものぞ」など突然と問ふに、其の人もとより禪意を會せざれば、驚愕きて、一言を出すこと能ざる時、「憐む可き癡人なる

棲遲—閑居
強梁—手に
あまる程わ
る強し

螺贏と螟蛉
と—螺贏は
土蜂、螟蛉
青虫は、土
蜂の青虫を
取りて己の
子とすと云
ふ諺より人
を人と思は
ぬに用ひた
り
福衡—後漢
書列傳七十
に出づ
三つ瀬川—
三途川—
八瀬—山城
杜父魚—鰈
とて淡水産
の魚にも同
名あり

哉—など恥かしむ。されば狂人なりとおもへるもあり。凡其の言行虚實是非一定せざれば、謹慎をつとむる人は、瓜彈をして、仇讐のごとく思ふも有り。されども自若として世人を見る事螺贏と螟蛉のごとし。故に漢季の福衡に比する人もありき。常に心にまかせたる頌を作り道歌をよむ。今記得せるは、
布袋和尚兒を負ひて川を渡る圖に題して、
背なを負ふ兒のさす瀬こそ三つ瀬川渡りはつべき浅せなりけれ

又頌無題

超私又超公。公中了公道。勿怪放子姪。唯任其惡好。

凡此の類也。晩年八瀬の山川より蛙を取り來り盆水に愛養す。其の聲冷亮として凡ならす。これ世に井手の蛙と稱する種類也。もし鳴かざる時は、自から笛を吹きて誘ふに必應ず。其の説にいはいはく、「河鹿といふも是にて杜父魚の事といへるは甚非也。腮開きたるものの聲を出す理はなし」など、河鹿の説を著す。此の奇翫にて或は蝦蟇先生なども人よべり。又閑暇の時に、木石骨角をいはず、手に任せて彫刻し、さまざまの物の象をなす。會て學ぶにあらねども、自ら緻密に、雅趣は凡工の及ぶ所にあらず、人を絶倒せ

外療—外科

あさくらや
云々—天智
天皇の朝
倉や木のま
るどのにわ
がなれば名
のりなした
つゆくは誰
が子ぞ—の
御製による

しむ。是も奇の一端といふべし。天明八年申歲六十八にして歿す。又其の家人齋女は翁若き時荒淫なりしも、妬ます背かず、是非を争はず、生涯よく仕ふ。知る人は皆感じて賢婦と稱す。先だちて頓死せられし時は、さしもの老爺も泣いて、其の勞を謝せられしとぞ。○由仙楢林氏は、外療の名家なれども、性質朴寡欲にして、其の伎を賣らむとせざれば、甚貧しく、居るに奴婢なく、出づるに僕従なく、龜服を著し、藥籠もみづから携ふ。中年妻を喪ひて一男一女をはぐくみ、矮屋に住めり。潔癖にて、唯物をむさくしくおほえけらし、常に門戸を閉ぢりて來る人ごとに名乗せざれば開かず。あさくらや木の丸どのの心地す。人に物をあたふるは門人のためといへども、かならず眼よりうへにさし上ぐ。是も潔きがためとぞ。此の人の稱すべきは、平日座上に父の席をまうけて、膳を備ふることに三度、飯も羹も生ける人のごとく盛りかへてすよむ。味のよきあしきにつきて、其の子どもと相謀るを、始めて至る人などものごしに聞きては、老父まさしく在ますとおもへり。思ふに、是は儒佛の禮法にもよらず、唯其の中心の誠にいづるなるべし。さて吾が親に仕ふることかくのごとくなれば、人も亦親のためといへば、甚これ憐む。其の一つをいはず、凡そ諸生にあらざれば、家方を傳ふことを許さざるに 播磨

稻荷—五穀
の神として
倉稻魂神を
祀れる者

の人、兒島尙善といへるが、半年につどめて、日々に怠らず學ばむことをこひしに、三度に及びて聽かざれば、力なく國に歸らむとするに臨みて、其の母を養ふがために在京久しうしがたき由を聞きて始めて、入門を許し、束脩の輕きをいはず、是に倍して物を與へ、別れむとは家の祕書をも自書してあたふるに及ぶ。此の間尙善同門の人に砒石をえたり。外科に有用の物なれば、悦びて携へ來り師に示せしに、其の後故なく破門のさたに及びしかば、おどろきて、即往きてことの由をとふに、曰く、「わぬしは孝子也と思ひて甚愛せるに、砒石を携へたる手をも濯がず、茶を汲みて喫す。もし毒にあたりて命を殞さば、母に仕ふるにいづれの身をもてせむや。さる不孝の者は吾が門に居らむべからず」といへり。されども、意の及ばざりし罪をわびて、からうじて許されたり。さて其の下る道の海陸船中馬上の心遣ひをもつぶさに説きて、親もたる身はせちに慎むべきことを誡しむ。又をかきしことは、ある富豪の家の療治に行きたる時、主人禮服をつけ清まはりて膳をあつかふさま也。「何事ぞ」と問へば、「けふは後園の小祠を祭る也」といふ。「其の神はなぞ」と又とへば、「稻荷と稱して、實は神狐也。神膳清ければ、必喫し給ふ」など其の奇特をかたるに、由仙何けもなく、「其の狐はあまり老狐にならざる間

に喰ふがよし」といへり。其の意あながちに主人を激するにもあらず、魚もけものも同じ意にて、狐ときよて喰ふべきものと思へりと、江邑北海話して笑はれしとぞ。すべて少しも物をつくるはずいつはらず。ある貴家の御療治したる時、やゝ待たせられしかば「吾はいそぐ用有り。かへるべし」といふ。對する侍、「何ぞ急なる病家ありや」といへば、「吾けふは西河へ漁に行かむと思へば、心あわたし」といひけることもあり。此の外奇話多き人にて、わかき時は任俠をこととせし説などもあれど、煩らはしければもらしつ。生來京師を離れぬ人なれども、はつかも京地の風趣なく、僻遠の人のごとしとなむ。七十有五にて去年乙卯歿す。

傾城吉野 井灰屋某 鍛冶某 僧日經

都島原の廓に、よしのといへる名妓あり。容色風姿類なきのみならず、手かき歌よみ茶香などをはじめ、凡遊藝に長じぬ。もとより心たかく、なみくの衣類器財などは、省だにせず。それが著たる廣東島のうはおそひを、よしの廣東と名付けて、今も賞茶者流の袋物にして、もてなすにてもしるべし。されば、ある諸侯いかなるついでにか、まみえ

任俠—男だて

廣東島—支那廣東より出づる絹布

小倉色紙—藤原定家の山城の小倉の山莊にて、百人一首の和歌を各一枚づつに書きたる百枚の色紙
東寺—京都下京にある眞言宗總本山
御影供—弘法大師の御影に物を供へて祭る儀式

給ひて、いかにもこれがよろこぶべきものをあたへばやと案じたまひて、小倉色紙のうち、俊成卿のうた「世の中よ、道こそなけれ」といふ歌の四の句、山の中にもと誤りかき給ふが、かへりて山中の色紙といひ傳へて名物となりたるをとうでて贈り給ふ。はたして是は二なくよろこびけると也。よに富める人の色好むは、唯一たびのあふこともがな、面目になど心をつくせども、引手あまたにていとまなく、はたおのが心かなはぬ人よりは、會て見えず。こよにいとまどしき獨すみの鍛冶あり。東寺の御影供の折に見そめてより、起臥おもかけ身にそひ、露もわすれず。是より其の業をなすあたひ、日々の食料を除きては、一錢も他のことに用ひず、月日を重ねてつみたる銀をこばくに成りたるを、ふところにし、島原の出口に往て、「いかゞせむ」とたゝすみてありける時、是が仕ふ女のわらは（これを禿と通稱す）二人出來たるを、誰とはしらねど、うちまねきて、此の名妓にたいめすべきやうをとひはかりしかば、大きにわらひて、やがて走り歸り、「よにかしきことこそあれ。いと淺ましくやつれたる男が、吾大夫の君（時の上首を通稱す）にまみえたと申すは」とて、手をたゞき笑ふを聞きとがめて、人をやりて、其のよしをつばらに問はしめ、とし月あまたおもひをこがせしやうを聞きて、其の日のまらうど

てうじて一
調へて

勝
すさう一殊

にしかなくと語りて、しばしのいとまを乞ひ、ある家をかたらひて酒さかななどてうじてもてなしぬ。其の日の客は京にてきこえたる富豪灰屋三郎兵衛といひたるものにて、若けれど、物の情をわきまへしものなれば、「此の上はたゞその男の心ゆくばかりもてなせよ」とねもごろにいひやりぬ。さてよしのが身をけだかくもてなすにも似ず、見るかけもなきものの志を憐むがたぐひなくすさうなることと、日比よりおもひまさりて、其の座にて家あるじにかたらひ、かれが身のしろ千金をあたへて、わがものとするにきはめぬ。かくて明の日、桂川に身を投げし者ありしが、一通の遺書あり、「とし比のおもひをはるけて、今は世におもふことなければ、かく身を捨つるなり」と書けり、何事とも知られざりしが、此の鍛冶男なりけるとかや。稀有のことといふべし。かくて三郎兵衛は、よし野を別屋にかくしすゑて愛しけるを、父聞きつけて、「いとあるまじきこと。わきて又なく名高きものを、しかするは世のきこえも憚あり」と怒りて勘當しけり。されども、思ひかはして、まどしきよをへても、うれへとせず。此の時に及びて、彼の山中の色紙は賣りたりとぞ。（千切や與三右衛門といふ者買ひしが、今はある諸侯の家藏となるとなむ）或る日灰やの父某、ものへ行きたる時、俄に雨ふり出でたれば、僕をかへして

へんぐゑ一
變化の字
音、妖怪

揚屋一遊女
を招きて遊
ぶ家

雨具をとり來らしむる間、とある家の軒にたよすみたれば、内よりいとうつくしくけだかき女出できたりて、「僕をまたせ給はむほどは、是へいらせ給へ。わびしき住家ながら、御茶一つ參らせむ」と奥へ請じて、折ふし釜の湯のにえたれば、うす茶をもてなしぬ。あるじもあらず、召しつかふ人も見えざるに、いやしからぬ住居もてなしの心あるにおどろきしが、其の日本阿彌光悦にまみえて、「いとあやしきこと、よもへんぐゑにてはあらじ」など聞えたれば、「それこそわぬしのむすこの住所、その女はかのよしの也。よもにくからじ。今は勘當ゆるし給へ」と勧めたれば、父も心とけて、其の詞にしたがひたりとぞ。よしの、島原にありし日、ある客舎へ（これを揚屋と通稱す）一人の僧來りて、「よしのとやらむいふ女、一と目見たし」といふ。あるじ頭をふりて、「よしのは名妓也、かろしく見給ふべきにあらず。殊にさる御身にては似けなし」と、あらしくいへども、僧きかず、「たゞ見るべし」とうごかねば、もてあまして、せむかたなくかくと告げたれば、何とかおもひけむ、ついきたりて、「いざおくへおはしませ」といざなふを、僧は立ちながらつくつくと見て、「よく見せたり。今は用なし。はやかへるべし。たゞし是をみるには、一百錢の銀入るべしと人いへり。さらば是を」とて首にかけたる財布より

とうでて、其の家あるじにあたふ。主笑ひて、「是ばかりの事に何の價をかうけ侍らむ」とかへしたれば、「さては人がわれを欺きしなり」とて、又首にかけて出でられぬ。よしのふしぎに覺えて、密に人をつけて其の歸る所を見せ、其の名をもきかしむるに、鷹峯の檀上にて、學匠のきこえある、日經上人といへるにて、彼の銀は人のいふまよに、信心の旦那に借りて、携へられしなりき。よしの、ふかく信仰して、殊更に文を贈り、小袖金子などを施して、「今よりは歸依の者に成り侍らむ。何にてもともしからむものは、心置かず仰せ給へ」とて、是より後は、しばく音信しが、灰屋にていくほどなく身まかりし後、ある人、此の僧の事を告げしかば、即鷹峯檀上にはうむりて、今もよしの塚とてありとなむ。

○因に云ふ、灰や三郎兵衛も、風流の男にて、うたをもよみたり。後には薙髪して、淨慶といへり。佐野氏にて、子孫今もあり。其のうたの中に、
むさしのの草はみながら置く露の月をわけゆく秋の旅人
置く露にとありしを、うへなきあたりの改め下されしと或人かたりぬ

栢原捨女

丹波國栢原田氏、女捨子、其の家に聲どりして、男子五人ありて後夫死し、たどちに盤桂禪師を師として尼となり、貞閑と號す。幼より風雅に志あり。六歳の時、

雪の朝二の字二の字の下駄のあと
といへりしより後、季吟法印にまなびて、俳諧に名あり。

粟の穂や身は數ならぬをみなへし

花をやるさくらや夢のうきよもの

など、人これを稱す。或る諸侯道のついで、かの家をとひたまひて、

栢原にをしや捨て置く露の玉

といふ句をたまひし事もありとぞ。尼となりては、省悟せる所師の旨に愜ひ、終に播磨網干龍門寺(盤桂禪師の寺なり)の傍に、不徹庵を創して今猶傳はれり。其の自畫贊、田氏に残れるは、

秋風の吹きくるからに絲柳こころほそくもちる夕かな

これは、薙髮せる時の歌にやとおほし。其の男子、長は家を嗣ぎ、三子は出家せる中一人は同じく盤桂禪師の弟子となり、後龍門寺を嗣けり。末子忠介は天死し、其の妻も若くしてさまをかへ、義香と號し、不徹庵に居て、姑に給仕す。これも俳諧をよくし歌をもよみ、貞操ありし人とぞ。

加賀千代女 越前歌川女

松任の人―
表具師福増
屋六兵衛の
女

千代女は加賀の松任の人にて、幼きより風流の志ありて、俳諧を嗜む。しかれども、其の師を得ず。是かれ行脚の人に問ふに、美濃の廬元坊を稱することみな同じ。こよにして殊更に行きて學ばむとおもへるに、折しも行脚して來りしかば、其の旅宿に就て相見を乞ひ、志をのぶ、元「草臥たり」とて、寢てありし所へゆきて、教を求むるに、「さらば一句せよ」といふ。初夏の比なれば時鳥を題とす。やがて句を吐きたるに、元其のたゞものならざる氣韻を見て、其の句をうけがはず、「是はたれもすべき所也」といふ。「さらば」とて、又一句を吐く。肯ざること初のごとし。元は既に眠につけども、女はなほ去らず、沉吟す。其の眼のさめたるをうかどひては、又一句をとふ。かくて數句に及び、つひに

雙どりせし
時―金澤の
表具師福田
彌八に嫁す
時に年十八

吳俊明―五
十嵐俊明、
越後の儒者
にしてまた
畫家

曉天に至る時、元起きて、「終夜さらざりしや。夜は明けたりや」とおどろく。時に千代女、ほとよぎす郭公とて明にけりといへるを、大に賞し、「是也是なり。汝他日此の意地をわするよことなくば、名天下にふるはむ」と、師弟の約をなせり。果して女流に珍らしき此の道の高名に至れり。これはまだ少女の時なりけらし。後聲どりせし時、しぶかるかしらねど柿の初契りまことに俳諧にてをかし。二十五歳にて夫にわかれし時、起きて見つ寢てみつ蚊屋の廣さ哉生涯身を全うし、一人の男子に夫の家を嗣がしめてのちは、尼になりて別居し、素園といふ。畫も越後の吳俊明に學びて、頗風韻あり。或る人「畫を上、贊を下に書いてたまへ」とのぞみしに、あさがほのたれたるをながくかきて、朝がほや地にさくことをあぶながら句のさま、すべて女流の趣ありて、つよからず。あさがほにつるべとられてもらひ水

永平寺—越前吉田郡、曹洞宗、

など、人口に膾炙して賞す。永平寺の長老、道のついでにや、とひたまひて、「一念三千の意を句に作るべし」ともとめたまへるに、

千なりも蔓一筋の心から

一念三千—吾人の一念

これも世に語りつたふ。老い極りて死せりとぞ。句集有りて世にひろまりぬ。

千の法界を具ふと云ふ義

○歌川は、もと越前國三國の花街(出村と云ふ)荒町屋某が許の遊女泊瀬川と云ふ。容色ありて、心ばへうるはしく、香茶花手跡ともに志すといへども、もとも性俳諧を好み、

ほく—發句

後雍髮して歌川といふ。(其のほくに吟と書きしは、花街を離れし後、しばし豊田や吟といひて、其の黨を集めし時のこと也。又瀧谷女といひしは、雍髮後瀧谷寺のほとりに居し、

第一邸宅

かつ其の寺僧に受戒などせし時なるべしとぞ)未ださかりなりし時、東都某の士夫、三國に來りて、殊にむつびけり。其の時長谷川いふ、「妾吾妻を一見せむと願ふこと久し。もし時を得て遊びなば、君が第にとどめ給はむや」といふに、こころよくうけひきぬ。其の後東國の人とだに聞けば、必此の事を約し置けり。一日、亭のあるじにむかひ、つばらに此のことを語りて、「こよかしこ、今はゆかりも出来ぬれば、百日のいとま賜ひなむ。もとより其の間の身のつくのひも用意せり」といふに、あるじもつきなきことな

破子—今の折詰辨當

がら、常の心ばへにめでてゆるしぬ。さて誰かれを送らせむといふに、「否、とくより心がまへせし」とて、菅の笠、竹の杖、其の外旅の調度などを見するに、家こぞりて感じつつ、目をえらびて出で立たしむ。是をきよつぎて、人々破子などもたらしつと、あるは三里あるは五里と送りぬ。夫よりは道すがらしるべをたづね、そこばくの日数をかさねて、江戸につき、先心あての第にたづね行き、しかくといふ。人々あやしみながら、かくといひつぐに、主人きよて、「さることも有りなむ。旅のつかれをやすめて後、たいめせばや」とて、ゆあみなどせさせて、「まづいかなれば、かよるさまにては來りし」と問はるゝに、俳諧執行のよしをかたり、道の記などをとう出で見するに、かつおどろき、かつよろこびて、内君に托して、うらなくとどめ給ふ。かくて、目をふるまゝに同列の人々をはじめ、某の國の守、これの北の方など聞きつぎ給うて、めさるゝに、或はほくし、あるは茶を點じ、又琴香花などもさまよく手すさびければ、日夜のわいだめなく、まつはし給ひしとぞ。ある時、主人の前に出でて、「こたび君のみかけにて、かねく残りなくみ廻り、としごろのほいもとけ、かつおもひもかけぬ御あたりの御惠を蒙りぬ國にて約せし日數も、今はみちなむとすれば、いとま賜ひなむ」といふに、あるじ「其の

わいだめ—差別

ことはすこしも心にかくべからず。別に人をもて國人にはせぬ」とて、せちにとどめ給へば、又多くの月日を過して後、ふたよびこふに、せむかたなくてゆるし給ふ。こなたかなたよりも、賤し給ふとて、こがね衣服何くれの調度など給はりける中に、名ある琴も有りしとなむ。されば馬五匹におほせて、國につかはさしめ給ふ。さて國に歸りし後、吾妻にて賜はりし物ども、ことごとく亭のあるじにとらして、「おのれかくてみとせをへなば、一つの庵を結びて、生涯をほごくみたまへ」といひて、又もとのあそびになりぬ。是をきよつどひくる人、踵をつぎしとかや。かくしつゝ約せし年月もみちぬれば、出村の町離に、草庵をむすび世をややく過せしが、安永六年丁酉七月病にかよりて歿せり。

目ざましに琴調べけり春の雨

さそふ水あらばくと螢かな

爪紅のしづくに咲くや秋海棠

おく時もしれぬ寒さや海の音

あそびなりし時文のはしに

たよいても心のしれぬ西瓜哉

○閑田子云はく、千代女歌川女ともに、發句のさま女流をあらはしてつよからず。殊に歌川はまた、口氣遊女と聞ゆ。凡詩歌共に其の本意のまゝなるが天然を失はぬ所といふべし。しかるに近代よみうたの教に、をのこといへども上手の女の歌を門戸として學ぶべしといふ事あり。口氣こはくしきはやくもすれば俗に落つれば、かく教ふるも一應はさもと思しけれど、實にはたけ高くつよき歌を手本にしてよみならはゞ、始終凡に落ちずして、しかも丈夫の氣象を枉げざるべし。伊勢小町ある事をしりて貫之躬恒を忘るゝや。又明人の詩話に、僧にして香火の氣なく、女にして脂粉の氣なきものをたとふは何事ぞ。香火の氣なきは破戒なり、脂粉の氣なきは夫を凌ぐべし。もとれるにあらずや。おのれつれに思へる事なれば因に論及す。

一の氣火香
抹香臭き匂

續近世畸人傳 卷之四

僧 中 山 附僧光慶僧月舟

龜鑑—手本
檀越—檀那
に同じ

中山和尚は備後の人也。幼くして、家産をいとひ、戯にも佛に仕へ、禮拜をなす。性敏悟亮達、習はずして經文を誦し、學ばずして、詩文を作る。父母其の心にまかせて、月舟和尚に投じて、出家せしむ。十三歳の時、亡父の墓をまつりて、家をいづる時、母氏手を抱りて曰はく、「汝が大寺に主せむことを願はず。宗旨を勵むと聞かば、うれしからまし。かまへて忘るよこと勿れ」と示さるよを、生涯の龜鑑とし給ふとぞ。十九歳の時武藏の雲堂寺にあり。ある時月舟和尚外に出で給ひて、獨坐止靜の間、其の寺歸依の檀越に三左衛門といふもの、三とせ以前に死にしが、忽然として來り、師を拜して法問す。師も心を盡してしめし聞え給ひしかば、よろこび謝して去る。少年より其の徳かくのごとし。其の後東大寺の公慶上人、樂宗の鐵眼和尚など、親しく交り給ひしが、寛文四年の秋、三師同じく會して物語の時、師云く、「大願を發さざるは菩薩の魔事也と、大般若

一切經彫刻
—一切經は
鐵眼の力に
依りて遂に
刻成し黄檗
山に藏せり

飛錫—僧侶
の旅

に見ゆ。しかれば、各位大願を發し給はむや否や」と。鐵眼和尚曰く、「誠に然り。吾も亦願心あり、一切經を彫刻して、檗山に納め、永く世に廣めむと思ふ」と。公慶上人曰く、「我は南都大佛殿を造立せむことをおもふ」と。師曰く、「我もとより大願有り。宗門の傳法の要總べて一師の印證による也。然るに、近世宗風頽れて、法弟を以て嗣とすること、祖意にあらず。誓ひて古に復せむとおもへり」と。二師是を聞き、拍掌し、「吾等が願心は大なれども、水至れば渠となるごとく、猶易し。師の願は倒に峻峻をのほるが如く、難しとも難し」と、禮拜して去る。師從來此の復古を心とし、宗祖道元禪師の像前に向ひ、心願を述べて袈裟を漬し給ふ。かくて五十六歳、加賀大乘寺より退いて、山城宇治田原の禪定寺にうつり、林中座禪のついで、靈芝の形自然に觀音の像を現するを得て、別に思ひあたり給ふことあれば、深く信じて、いよく復古の心を激せらる。其の後攝津國住吉の興禪寺にうつり給へども、又月舟和尚の命により、禪定寺にかへり住み、五十九歳の春猶彼願もならざれば、洛北鷹峰に源光庵を縛して隱居し、唯天の時に委ね給ふ。されども、元祿十三年關左に飛錫の時、途中の口號にも、
咸自拊膺至股晦 將勞頰舌動心灰 只期山澤互通氣 同是以虛受物來

東叡山—東
京上野寛永
寺の山號永
公辨法親王
—輪王寺門
跡の第三世
後西院天皇
の十六子
閩中—支那
福建の地方

など、しばらくも願心を忘れ給ふことなし。終に東叡山公辨法親王の擧によりて、曹洞家の諸大寺に台命ありて、願心成就し、流弊を禁ぜられ、古に復る。法親王殊に其の風を慕ひ給ふによりて也。是元祿十七年八月七日のことにて、はじめて大願を誓はれしより四十年にして全く成る。此の後自から復古道人となへられ、清人董愛山も復古禪林の額を贈れり。正徳五年乙未、世壽八旬にして、源光庵に遷化し給ふ。閩中鄭任鑰が贈る碑文、略して石に鐫りて彼の寺に建つ。

鎌倉右幕下
—將軍源頼
朝

○花願云はく、鐵眼和尚の願は、初より十八年を経て、天和元年辛酉、大藏經彫刻成り、黃檗山の藏となる。其の事は前編和尚の傳に具す。公慶上人は河内の人にして、南都東大寺龍松院に住す。此の東大寺大佛殿は、天平勝寶四年、聖武天皇の勅願にて建立まし、けるを、四百三十二年を経て、高倉院治承四年十二月二十八日、平重衡の兵火によりて失ふ。後養和元年、醍醐寺の俊仍坊重源上人、大勸進主として、後白河院鎌倉右幕下に勅し給ひ、建久六年再び就り、同じき三月十二日主上行、幸右幕下も參詣あり。其の後三百七十三年を経て、永祿十年十月十日、松永彈正久秀が兵火に又焼失す。此の時御首も地に落ちたるを、大和福住の處士山田道安といふ畫の妙手、多く財寶を出して、佛頂を鑄、籠に入れて引き上げ、繼ぎ奉りた

伽藍—衆多
僧の遊歩修
行の所、即
ち寺
大檀那—大
施主
薩摩の大守
—島津侯

濟家洞門—
臨濟宗と曹
洞宗と

れども、伽藍の興立には及ばず。(菑蹊曰はく、元祿九年、貝原先生の記にも、野中に立ち給ふと書かれたり)こゝに、此の上人、大願心を興して、貞享帝の勅を奉じ、寶永五年六月二十六日成就す。大檀那薩摩の太守にて、曼荼羅壇、什器、舍利塔等をも供せらる。これ又希有の大興立なり。三師の志願通計四十五年にして、各成就を遂げられしもたふとき事にこそ。因にいふ。月舟和尚は、世に知る所の高僧也。いまだ幼き時、母に携へられて其の師のもとに行き出家の約をなす。其の後、母義の機を織られける前に、物思はしき顔して立ち給ふを、母「何」とありてかゝるぞ」ととひ給へば、「吾口惜き事して、僧にならむと約したり。同じくは武士にならむ物を」といはれしに、母義涕泣して、持ちたる棧にて打ち、「汝たましく佛に誓ひ、いくばくもなく心變じたるや」と責めらるるに、「心變じたるにはあらず。思ふに出家は一人の成佛也。吾もし武士となりて時をえ、天下の政をとらば、天下の人をみな成佛させむものを」と答へ給ひしと也。其の機如此。されば、終に高僧ともなり給へりき。一旦、隱元禪師歸化の時、天下の禪林眼を新にし、濟家洞門をいはず、彼の徒となる人多かりしに、月舟和尚、獨臂を掲げて吾が宗を扶持し給ひ、其のいさをし後世におよべりとかや。されば、其の下に出づる智識、唯山和尚のみならず、これかれ聞ゆる人々有りとぞ。

僧 南 谷 附松下豊長

冥福—死者の追善

釋照什、字は南谷、幼華と號す、俗姓佐々木にして、松下を稱す。爲人温潤恭默、しかも沉勇也。寛文三癸卯年、石見國吉永の里に生まる。釋名、勝之允といふ。纔に乳を離るより、筆研を愛し、好みて字畫をなすに、頗る奇趣あり。父源太左衛門忠綱、會津侯に仕へしが、(前會津の主加藤式部少輔成明朝臣) 後致仕して京師に在り。長男豊長が爲に官途を求めむとて、豊長はた從者を引きつれ、江戸に行く。いくほどなく、赤坂田町の旅舎にして、不測の害にあふ。是寛文九己酉の年三月二十一日の夜也。(事故は豊長が附録にしるす) 時に、師年七歳。其の後、豊長攝津國芥川の驛にして、復讐せし時は、師九歳也。豊長京師を出づる時、師もともに往かむと請ふこと頻なりしかども、其の幼をもて、豊長みそかに行きて、復讐の後に人もて其の由を告ぐるに、師聞きて、此の行にもれ、ともに天を戴かざるの仇をうたざることを深くうらみ、且かなしびていへらく「吾幼しといへども、男兒として士夫の道ながく廢す。此のうへは、雜髮して、釋門に入り、父の冥福を祈らむの外なし」とて、もとよりの因あれば、遍照心院(此の地も

墳墓—原本
墳士—優れ
上足—優れ
たる弟子

風騷—詩文

山門—近江
比叡山の異稱

と經基王の殿舎によりて、六宮或は八條御所などいふ。今の御旅所といふも、滿仲の産屋の舊跡也。其の後八條本覺禪尼二位如實禪尼ともに、右大臣實朝公追福のため、佛閣となし、木幡上人眞空禪師を請じ給ふ。これによりて、尼寺と俗稱す。また安嘉門院四條局阿佛尼公の墳墓もあり、義洞長老にしたがひ、十一歳にして剃度し、終に上足の弟子となる。多年思ひを精しくし、心をひそめて、地藏院覺雄一派の淵源を極めつくす。此の間、詩章は熊谷直閑に學び、はた智積院泊如僧正、又峨山、月潭禪師等にも問ひ、専ら風騷にふけられしに、義洞長老、其の學ぶ所、釋門の要にあらざるを呵し給ひしかば、是より詩騷を止めて、永觀堂快立和尚に従ひ、楞嚴の義疏を聴く間、病にかよれり然れども、猶つとめてやまず。諸經論を諸師に聞く事枚擧すべからず。年三十法華の義疏書寫の望を起し、山門の靈空律師について講録を需め、坂本の寓居にして全く書寫す。通計八十卷也。時に、山王の祭日にあひ、遠近の人衢に堵をなす。しかれども、師一室を出でず、膽寫泰然たり。其の勉強精苦おもふべし。此の年はじめて多聞院にて梵網經古蹟を講ぜられしより、諸書の講に及び、聽衆百をもて算ふ。かくて源廟(經基王の廟なり)の興復をもて志とし給へども、故ありて院を辭し、山門の外に一草庵を結び

京兆尹一京
都町奉行

六孫王一源
經基、清和
天皇の皇子
貞純親王の
第六子
大樹君一五
代將軍徳川
綱吉

幻華堂となづけ、堂の記及び退院の辨を著はす。扱六年の後、元祿丙子のとし、満山の衆徒師の宿志により、興復のため再住を請ふこと頻なれば、又多聞院に移り、惣代の任をもて、江戸に往き、時の権門松平美濃侯によりて、廟の來由を記し、これを聞す。又明年丁丑九月復古の宿志、古記等を寫して呈するに、美濃侯曰く、「凡京師の寺政は、京師にて達すべし。是恒例なり」と。ことにおいて頼に上洛し、京兆尹松平紀伊侯に事狀を達す。此の時自誓の文を源廟に捧ぐ。其の終り、若時運未熟は自から病を受け速に没し、再來して願心を遂げむと云に至る。神感の故にや、明年己卯十月、有司來り、廟社より門廡に至るまで一般に結構す。此の月五日の夜夢中に、剋涼洗一枕夢、踏地窺半窻明」といふ一聯句を得たり。自ら趣味あることを覺ゆとなむ。庚辰四月六孫王に正一位權現の勅許有り、關東よりも、神寶數十品を奉納まします。十二月十二日新廟遷座の儀式に勅使あり。辛巳八月二十八日大樹君、六孫王權現の五大字を御みづからの筆して賜ふ。また水戸黃門光圀卿も、手狀を賜ふ。

六孫王御墳墓年久廢頽之處、今度新被加御修覆之由、珍重之事に存候。誠に源氏の氏神、御孫々迄、御繁榮の御事、過之御事御座有間鋪與皆人一同奉存候事に候。唯

今迄は、義家一人被致信仰候とて、無益の八幡を源家之衆用來候。多田の満仲者、源家と申計にて、御正統にても無之をさへ、多田院など御取立被成候。今度は、各別之儀、如我等愚老も、數十年來の積鬱一時に伸び、披雲望天不堪雀躍歡抃之至に候。爲今度御禮、満山代僧遍照心院内多聞南谷法印下向之處、兼々愚老此義致苦勞候段、御聞及候とて、早速足下迄御申聞候由、事多之處思召出過分に存候。終不致書中候故、以謝狀不申入候段、足下幾重にも宜御申聞可給候。頓首。

七月六日
光 圀

法眼立庵 鏡伯

此の後は親しく御面會も有りけるが、直の御文書も、大通寺にあり。道體益御清勝否、馳遐想而已。先比、蒙御許借候文書、新寫相濟即本書返還、別而忝存候。且被仰聞候書容易事、雖然、當分最中書立候。出來次第、從跡差遣可申候。尙期他日恐々頓首。

八月十五日
光 圀

遍照心院

豪 慧 和 尙

貌座下

寶永丁亥一
寶永四年
龍顏を拜す
一明正天皇
に拜謁す
眉目一名譽
院秩一寺領
子母の贏餘
一金を貸し
て得たる利
子
太子降誕一
享保五年正
月一日生、
御諱昭仁

寶永丁亥四月六日、又命下り、廩米百石を賜ひ、祭祀の用となさしめ給ふ。又中古以來長老の職廢せしかば、古記を抄出し呈するに、戊子歲正月十三日勅旨を蒙り、義周をもて其の職に任せしめ、龍顏を拜す。是満山不易の眉目也。又東林院を再造し、(義洞の創地也)山門の院秩をもます。かくて、歳ふるまゝに、廟社や、類廢に及ぶ故に、修繕の志を起し、又江戸におもむく。享保庚戌歲五月十九日、寺社司小出信濃侯より黄金を賜ひ、且命すらく、「此の金二分とし、一分は今度修費の料とし、一分は子母の贏餘をもて後々繕修の用に充つべし」と。是に於て廟社全く善美を盡せり。壬子の年、又江戸にゆき、深恩を謝し、且新畫(弟子照本所圖なり)の神影を加納遠江侯に呈す。侯齋沐して掲壁上一拜之時、忽東隣に火起りて、殆侯の第に及ばむとせしが、俄に西風吹きて火を轉じ、一點も觸ることなかりしとかや。庚亥歲正月 太子降誕(櫻町帝におはす)博士御胞衣を納るゝの地を卜するに、此の地吉にあたりとて、源廟の樹下に納め奉る。是より長く勅願の基趾となり、五月十日初て、紫衣を賜ふ。師後來不朽の例たらむことを願はれし

朗詠集一和
漢朗詠集二
卷、藤原公
任撰
歡喜天一又
聖天、祈願
する者を悉
く満足せし
むと云ふ縁
に油を灌い
てまつる

が、歳を経て志願のごとくに成りぬ。凡生涯の奔馳、満山の爲にして、毫末も身の爲にはからず。丁卯歳の春又東都に趣き、謁見の時、奏者寺號をいはずして、たゞ南谷と稱するほどの寵遇に至る。又寺管の第にして、官紙を出し、大中字眞艸行、はた朗詠集などを書かしめらる。其の他儒筆を需むる人踵をつぐ。此の歳の夏職を辭し、次坐に托し、東林院にかくれ、たゞ終焉の計をなし、歡喜天の浴油供を修すること一七日、蓋從來の功業此の尊の加護によることをおもふと也。結願の日より、病に罹り、人に面接を辭す。たまく法眼百々俊悅來て病をとふ。師いへらく、「我が病藥すべからず。然も過訪を忝くす。請ふ診脈せられよ」と。法眼即ち診して、「吁命也。實に藥治のおよぶ所にあらず」といへり。一日夢中源廟に至るに、かねて聞きし兜率宮の莊嚴のごとく也。かつ神、夷々子と呼び給ふと見て醒めぬ。直に筆をとつて、
陰來則陰。晴來則晴。君家歸去。天朗月清。
夷々子辭世と記し終りて、弟子にいへらく、「我今筆をとるに、扛杵のごとし。しかれども、もし社事によりて大君われを召さば、元氣忽ち復し、千里も遠しとせずしてゆかむ。吁時なる哉。吾が功も亦足れり」とて、是より言語を交へず、源廟をはじめ、常に仰

四大君一五代將軍綱吉より第八代吉宗に至る三家一徳川將軍家の一門尾張、紀伊、水戸三衣一僧の著用する三種の衣服、大衣、七條五條の袈裟、晉の趙盾、晉の靈公の正朔、公盾を殺さむとて刺客を送りしに晨に盾が盛服假寢せしに感じ刺客却て自殺せし故事あり

ぎ給ふ所の神社を拜し終り、端坐して寂す。春秋七十四。元文元丙辰歳十月十三日午時也。師生涯三帝の恩勅を蒙り、龍顔を拜すること數箇度、東都に行く事は前後三十九度、四大君の寵遇を忝うし、加之、月卿雲客、又三家以下國主諸侯旗下の士の歸依、擧げ記すべからず。然るに、謹慎の甚しきは、京兆尹來過の時は、前日必告げ給ふにより、師丑の時より起きて、日課の事業を勤め、寅の刻に至れば三衣を着て端坐す。毎時此の如くなれば、徒衆「なごさばし給ふ」と問ふに、「上を敬するは、かくすべき事なり」と答へられしとなむ。晉の趙盾が所行に准ふべし。世に師の書名を知りて、其の功を審にするもの尠ければ、彼の寺の記をもて要を探りて録す。手澤の書刻につくものは、楷書千字文五册、克己銘一册、八景法帖一册、大通寺開山宗師行業記一册、幻華消息一册、(如上印行)又詩稿許多あれども、其の志を見るべきものを擧ぐ。

客中早春試毫

江城爲客始逢春。且喜聖朝寓此身。山衲素無衣錦志。只期神運與年新。上堂日寄二三子。

衣錦志一立身之望 樗木一愚者

樗木從來不足量。他日儻堪爲棟梁。

山僧何幸主僧綱

大塊假我椽柱力

附松下加三郎豐長は(後故ありて母家の姓を冒し中瀬助九郎といふ)は南谷の兄也。父忠綱、江戸の寓居にして、早川八之丞が毒手にあひし時年十二歳也。其の夜、八之丞手書を渡し置けり。其書にいはいはく、

我は加藤式部少輔内早川八之丞一敏といふものなり。先年藪久太郎悻八助儀に付、大崎長三郎と出合ひ、白晝に討ち留め、國を立ち退きし所、親早川四郎兵衛切腹被仰付、其節縁類ども、切腹被差延我々に御預可被下候はば當人八之丞引返し可申由、致訴訟候へども、松下源太左衛門出頭し、其上、右長三郎縁類たるを以て、内々讒言申候に付、四郎兵衛切腹被仰付、源太左衛門右讒者故、如是次第なり。

其の後豊長、京師にかへり、宮原傳藏といふ人にしたがひ、劍術を習ふに、此の人もと親の怨家を討たむとせし間、其の怨家病死して本意を遂ざることをうらむ。さる故に、吾が身にくらべて、此の少年を憐み、日にをしへ、夜につたへ、かつ同じ心に、八之丞が行へを求むるに、八之丞は今薦僧となるよしを聞き出し、傳藏も亦其の黨に入り、う

薦僧一無虚僧、元は普

化宗の僧侶の稱、徳川の時代には武士罪を犯し者刑罰を遁れむ爲に、此の群に入りたり。あともひ率る。比、早朝に

らなきさまに語らひぬ。一日、浪華のかたに執行せばやと約し置き、其の夜助三郎にかくとつぐ。時寛文辛亥歳九月六日夜也。豊長とみに兩人の従者(坂根八左衛門、中田平次郎右衛門)をあともひ、夜ごめに、大坂に行き、官廳に達し、こよに待ちかしこにもとめ、此の日は大坂にとどまり、明日通衢にかより尋ね、其の夜は芥川の驛に宿す。翌九日旅店の蔀をあぐる比、薦僧二人通れり。則一人は八之丞、一人は傳藏なり。傳藏人を見て目くはし過ぎぬ。さて三人とも追ひ行くに、傳藏は岐路より右の方へ行き、八之丞は村橋に在る。やがて豊長その由をいひて切りかよれば、八之丞も懐劍をぬきながら、木綿畑の溝を飛び越えむとして、つまづきたふれぬるを討ちぬ。時に豊長年十四歳也。此の擧の後諸侯よりつものり求め給ふこと多時也。しかれども、豊長いふ、「子として親の讐を復するは、則其の職也。今是を口實として祿をうくるは恥づべきの極みなり」とて一も應ぜず。其の後、細川肥後侯は、母氏のちなみあればとて仕ふ。今に其の子孫連綿たりとぞ。

○蒿蹊云はく、俗間に、野叢談話といふものあり。それが中に、華塵談として此の復讐のよしを書けり。されど文飾多く、かつ事實も大同小異也。今寺記によりて、其の要のみをしるす。

雨森芳洲

對馬の文學對馬宗對馬守の儒者橋窓茶話二卷たはれ草三卷老いては云云後漢の馬援の語「丈夫の志たる、窮しては益々堅かるべく老いては當に益々壯なるべし」朝に云々論語の語

芳洲、雨森氏、名は誠濟、字は伯陽、通稱東五郎、木下順庵の門に遊びて、新井白石、室鳩巢、祇園南海の諸老と共に、名を天下に成せり。京師の人にして、對馬の文學となり、漸々に昇進す。音をよくして、唐音、韓音ともに通ず。韓人此の翁と話して、「公三國の音のうちには、殊に日本よし」といへるもをかしきが、これにて、異邦の音、此の國人に彷彿たるを知るべし。篤實の碩儒なれば、此の遺言政治の助となること多しとなむ。近年、上木せる橋窓茶話、たはれぐさの如きは、一時消閑の隨筆といへども、其の氣概はた博聞を見るべき一端也。蒿蹊ことに感心せる一件は、嵯峨天龍寺翠巖長老、同松翁長老に贈られし俗牘、二師の自坊三秀院にあり。極老の後、國歌に志して、精を盡されし旨也。おのが好む道なるが故に、嘆美せるにはあらず。老いてはますます、壯なるべしといへる古人の心ばへに似て、「朝に道を聞いて夕に死すとも可也」といへる聖語にも愜へるもの也。此の一條により、まして其の本色の漢學におきて、若きよりの格勤押して知るべし。書牘左に掲ぐ。(吾が友春日龜蘭州の話に、此の先生莊子をも千遍讀せられし

格勤—勉強

となむ。然らば經書はまして然らむ。讀書千遍義自通る意にや)

舊歲御狀相達御返書末、仕候内、新歳の法翰、又々相達忝拜見仕候。彌御堅固、御重歲被成候由、欣慰此御事奉存候。此元不相替私義無爲に罷在候。兩度共に、御佳作御爲見被下、扱々御上京以後別而御精被出候御事に御座候哉、各別に御上達被成候様に奉存、珍重不過之候。詩者、做多く看多く商量多しと申候。兎角多く御作被成上手御成り可被成候。商量の字、先づは人と相談する事を申候へども、人と相談致すばかりにては無之、以心問心、我心にて思案する事も商量と申候。俗話にも、人の申事を承り思案いたし御返事可申と申候時は、待我商量回話と申候。和韻いたし進申候様に被仰下候。此元御逗留中は、一時の御挨拶と存、めつたに詩も作申候へども、上方まではつかしく御座候て、登せがたく御座候、夫故、和韻をば仕不申候。御宥恕可破下候。此に一つをかきし咄御座候故、書付掛御目候。御笑可被下候。去年より、繁右衛門(方久對馬の國老古川氏、後にも見の)など、皆々寄合、歌の會をいたし、間には私其座へ參候事も候へば、私にも是非歌をよみ候へと申候へども、詩迄は平仄なりと習覺居候へども、歌は終に百人

一首の講釋をさへ承りたる事も無御座、かなけりらん一つも埒は明不申候。其の上、歌ことばとは、猶々存不申候に付、兎角古今をひたと讀候はば、歌詞にても覺え候はんやと存候に付、古今千遍讀と申願を心に立申候て、最早百五十遍は昨日迄によみおほせ申候。今迄の積りに致し候へば、八十四の七月に千遍の數滿申候積りに御座候。其間に老耄いたし候か、又は閻羅王より勾死鬼など遣し被申候へば、可仕様も無之候得共、先は願を滿候心に御座候。右千遍讀濟候て、さて歌をよみかより申候心に御座候。是は壽命の事はわきにのけおきての分別に御座候へば、さりとほをかきし事に御座候。しかし私最早世間に望みある者にもなく候へば、かくいたし死を待候も一奇事と存立候事に御座候。此段書付掛御目候は、老人さへかく存候事に御座候故、皆様にも御年少に被成御座候へば、猶々むだに御くらしなされますなと申上度如、此御座候。桂淵師、大愚師、岱宗師同志の御面々へ、御參會の節、此旨御傳被成可被下、奉頼候。申度事も御座候へども、老筆難堪、早々及貴答候。餘期後音候。恐々謹言。

二月十五日

雨森東五郎

誠 清

賣 藏 主 様(私云、後松翁長老にて翠巖長老の弟子なり)

又一通(是は同年の事にはあらず、猶後にくはしく論ず)

歳首法札被下置、忝拜誦仕候。先以新歳萬福御清勝の由、欣慰此事に奉存候。歳首歳暮の御詠被下之、方久方へも早速遣之同前に拜吟仕候。古川繁右衛門、只今は束髮致し方久と申候。歌に今稽古仕候へども、元より不才の上、老後の所作に御座候故、少も埒明不申候。

歌に今と云よりは自己の事と聞ゆ。謙遜甚しく、傍輩ながら方久のこととは見えす。猶後に論ず。

元來八十一歳の時、古今千遍歌萬首と申所願を立候而、千遍讀は二年かより相濟一萬首は去年こしらへ仕舞申候。

前文八十四の七月に千遍の數滿申候と有りて、こゝに八十一歳の時願をたて、千遍讀は二年掛り相濟、一萬首は去年こしらへ仕舞申候とあるをみれば、あらかじめはかられしは八十四の七月までの積りにてありしに、おもひのほか早く乘成りて、二年にて千遍讀は滿ち、

そののち一萬首も亦二三年にて終りしにや、年歴のつもりかくのごとし。前の文と年數悞はざる故に是は方久の事かと疑あれど、全く自己の事成るべし。

小兒の圓機活法を見候、同前なる和歌に御座候故、よむとは申がたく、こしらへ候と申候。如此仕候へども、歌は不申及、歌に似たるものも出來不仕、但老後の消遣と存候までにて御座候。(こよまでのつどきにて、自己の事にて、方久をいふにあらざるを知るべし)當和尚様へは、御縁御座候歟、一月に一度ほどは、碁も御參會仕候。(當和尚とは對馬當番の和尚なり)是もひたと負申候。何をいたし候ても、老人は役に立不申候。必々和尚様にも、御年よられまじく候。

一祇園與一方へ被借候橋窓茶話は、彼方より如期御返し申上候哉。彼方へ書狀遣し候へども、今に返書無之候。老人の事故、若も病氣哉と氣遣申候に付、何とぞ康健不康健の事、彼方屋鋪へ乍慮外御尋被下候へと、是等の趣、去年申上候へ共、終に其の返事承知不仕。若は中途にて、浮沈仕候哉、何とぞ與一事、御聞被下度、後便を相待罷在候。

一かなづかひ、御大事の御書物御借被下、寫仕廻候に付、去年指上申候。是は定て御

消遣—退風
まぎらし

祇園與一—
紀伊藩の儒
者、號南海

請取可被下と奉存候得共、此度の尊書にも、其事相見え不申候に付、御尋申上候。此外申上度事山々に御座候へ共、年ましに書狀相認候事難義に御座候故、省略仕候。但御懷敷奉存候。情意御遠察被成可被下候。再拜稽首、謹此不備。

三月三日

雨森東五郎

誠 濟

三秀院老大和尚

貌座下(私云、翠巖長老なり)

かくて易箆は、八十八歳の正月六日とぞ。先に擧げし僧衆の宗旨につき、堂社の建立に付、生涯の力を用ひられしも、此老の學術に精を入れられしも、畢竟同じく我が分を盡して、天地の恩に背かずといふべし。おのれらのごとき、暖に著、飽くまで食ひて、犬馬の齡を積りしものは恥づるに餘りあり。人も亦此の風を聞きて、興起あれとぞおもふ。

小 萬 女

攝津國某城主は、もと豊臣秀頼公に仕へて、北の方もろとも大坂の城中に居給ひしが、度



逐電して一
逃げて

度直諫して、旨に逆ひければ、逐電してあとをくらし給ふ。其の北の方と八歳の兄君三歳の妹君、捕はれになりて、城内のかごかなる所にこめられて、おはしけり。明暮唯夫君の事をのみ歎きて過し給ひしを、婢女に小萬といへるが、かひなくしき女にて、候は都の清水寺におはすよしを聞き出でて、北の方に告げければ、いかにもしてそこに行かばやと思ひけれど、人めしけきに思ひ煩らひ給ふ。小萬また城中よりの間道をかうがへ、水門より出でて、淀川を渡らば、やすかりなむと、みづからものみし終りて後北の方にまうし、自から先番袋に手廻りの調度衣裳などを入れ、頭に戴きながら、夜に紛れて彼の水門より忍び出で、淀川をおよぎのほりて、とある松蔭に袋をかくし、又およぎてかへるさに、心をつけて、小船の主もなきを見出し、おのれは水にひたりながら、ふねを押してゆく。折しも棹さへ流れきたれば、拾ひとりて、蘆原の便よき所に舟をかくし、北の方のおまへに参り、兄君を自からの背に負ひ、いもと君を北のかたの背に負はせまるらせ、からうじて、彼の舟にとりのせまうし、棹さしてかの番袋を取出し、ほのぐらき月かけに、たどるく、只あたりの女房の物まうでのけはひに取らなしけれど、夜あけゆけば、行きかふ人々見とがめて、「たど人とは見えす」などいふを、きこしめ

番袋―殿居
物を入るゝ
袋

て、北の方は心ぐるしう、いと道をいそぎ給ふが、山崎のほとりにて、いとむくつき男あとさきになりて、「いづくにおはす人ぞ」といふ。「清水まうでするものなり」とのみいひて過ぎ給ふに、此の男思ふ所ありけに走り過ぎしが、五條の東までおはしたる時、此の男大勢のわるものを引具して来り、四方より圍みければ、おどろきながら北の方聲をいらよけて、「山だちら道を遮るは何の爲ぞ」とのよしり給へば、一人がいふ、「先づ其の若子たど人とは見えねば、おくるべき所へ送りて賞を得む。次に女房のみめうつくしくおはすれば、我が思ひ人とせむ。其の次には番袋のうちによきもの有らむをとらむと也」と、いひもあへず、袋をとりにかゝるを、北の方小萬共に用意の懐劍をぬき出して、切つてまはる。賊はたど手取にせむとあしらひしが、つよく切り立てられて、逃けむとしては、又集り、終に若君を奪ひて逃けむとす。北の方人の手には渡さじと、賊が首とつらねて、若君をも一刀に切り給ひ、今は是迄と思し、「最期の供奉せよ」と、たどちに四人まで切り倒し給へば、小萬も六人迄切りける。其の他手疵を負ふもの數しらず、ちりなくに逃げけるが、北の方も數箇所の手疵に堪へたまはず、清水の馬とどめに休らひ、「せめて父君に妹をみせよ」との給ひて息たえ給ふ。此の北の方は、よに變なき美人にて、しかも